

ブラック 「笑ふ」 テスマン君が。そりやお奥さん、駄目ですよ——政治なんていふことは、あの人にはまるで柄がない——それはてんで柄にないことですよ。

ヘッダ え、それはわたしも承知してゐるのですよ——でも何でも、どうかしてそんなふうに向けて向けられないこともなからうかと思ひましてね。

ブラック え、——しかしそんなことをしたところで、何も満足は得られないでせう。何しろその方に向いてゐないのですからね。全體どうして御主人を、さういふ方面へ向けたいといふ考を起したのでせう。

ヘッダ それは餘り退屈だからですわ。「小さい間をおいで」ぢやあ、テスマンがいつか大臣になれようとは、まるでお思ひにならなかつて。

ブラック ふん——まあ奥さん——大臣にでもならうといふには、第一、少しはお金持でなければねえ。

ヘッダ 「我慢がなくなつたやうに立上がる」それは全くその通りよ。わたしずるぶん、しみつたれた家へつひお嫁に来てしまつたのですよ——。「部屋を歩く」お蔭で一生がずるぶんみじめな——それこそ人笑ひなものになるでせう——それは全くさうなんですよ。

ブラック いや、わたしの考ではほかに不満の原因があるやうです。

うです。

ヘッダ すると何でせう。
ブラック それはあなたがまだ一度も、眞剣にどん底からゆすり上げられるやうな思ひをしたことがないせゐです。

ヘッダ 眞面目なことですか。
ブラック え、まあさういつてもよろしいでせう。しかしあるひはこん度はそれが出来かけてゐるかも知れん。

ヘッダ 「頭を後に反らせる」あら、あなたはあの馬鹿々々しい教授の地位が競争になつた事件をおつしやるのですか。だつてあれはテスマンだけの問題ではありませんか。そんなことにまでわたし、頭を使ふ必要があるものですか。

ブラック ふん、ふん、ぢやあそれは退けておきませう。しかしこゝにもしやですわね——さあまあ——これをよそ行きの言葉でいふと——眞實且——重大なる責任といふやつが、あなたの肩にかゝつて來てゐるのではないでせうかね。「微笑する」ねえ、奥さん、女の新しい責任がね。

ヘッダ 「怒つて」お黙りなさい。そんなこと決して起りつこはないのですよ。
ブラック 「おだやかに」まあいづれ、一年のあとまでお預けにしておきませう——とにかくね。

ヘッダ 「そつげなく」決してそんなことになる氣遣ひはないわ。わたし、責任なんていふことに關係はないのです。

ブラック するとあなたは多くの婦人とは違つて、女の務めには關係なしに——
ヘッダ 「玻璃扉のところ」まあお黙りなさいといつたらねえ——。わたしよく思ふのです、この世の中でわたしの爲事は一つしかないといふことをね。

ブラック 「傍へよる」それを伺ひたいのですね。
ヘッダ 「他所を見る」死ぬほど退屈するといふこと。お分りになつて。「ふりかへつて奥の部屋を見て笑ふ」おや、ちやうどそこへ教授先生がおいでになつたわ。

ブラック 「戒めるやうに小聲で」お止しなさいよ。
テスマン、會合へ出る服装で帽子と手袋を手に持ち、奥の部屋を通つて右手から出てくる。

テスマン ヘッダ。——エイレルト・リョーヴボルのところから別に斷りは來なかつたかい。え、。

ヘッダ え、。
テスマン ぢやあやはりに今にやつて來るだらうよ。
ブラック 君、本當に來ると思つてゐるのかい。
テスマン あ、どうもさう思はれる。どうも君がけさ話

したことは、ほんの根も葉もない噂に過ぎないやうだ。

ブラック ふん。
テスマン あ、とにかくジュリヤヌ小母さんもいつてゐたが、將來、あの男がわたしの邪魔をすることがあらうとは、とても思へないといふのだ。え、君。

ブラック なるほど。すると萬事結構づくめだね。
テスマン 「帽子と手袋を右手の椅子にのせる」しかしとにかく、待てるだけはおの男の來るのを待つてゐたいと思ふ。君の御都合はどうですわね。

ブラック 大丈夫、まだ時間はたつぷりあるよ。七時か——七時半までは誰も來やしないから。
テスマン さう、ぢやあそれまでヘッダのお相手をしてゐよう。そして待つことにしよう。え、。

ヘッダ 「ブラックの外套と帽子を、隅ソファの上に置く」そしてどうぐあひわるく行つても、リョーヴボルさんだけは、家でわたしのお相手をして下さるといふわけですから。
ブラック 「自分の持物を手に取らうとする」いや、どうも恐れ入りますな。奥さん——そのどうぐあひわるく行つてもといふのは、どういふ意味です。

ヘッダ あの人があなた方と御一緒に出かけるのが厭だと

いつた場合ですよ。

テスマン 「不安らしく妻を見る」だがおい、ヘッダ——あの男がお前とこゝにゐられるとお思ひかい。ええ。ジュリヤイヌ小母さんは、晩には来られないのだよ。

ヘッダ ええ、でもエルヴステッド夫人が来るでせう。さうすれば、わたしたち三人でお茶を飲みますわ。

テスマン あゝ、成程、それならいいね。

ブラック 「ほゝゑむ」又それが恐らくあの男にとつても、一番健全な方法かも知れない。

ヘッダ どうして。

ブラック いやはや、奥さん。だつてあなたはこれまで、わが獨身會に對して随分嘲笑の言葉を向けられたでせう。全體あれは絶対に主義に忠實な男子にのみ許さるべきものであるとおつしやつたでせう。

ヘッダ でもリョウヴボルさんも、今では立派に忠實な主義の遵奉者ですよ。悔い改めた罪人ですからね——

ベルテ、前廊の扉から出てくる。

ベルテ 奥様、あのお客様がおいでになりましたが

ヘッダ こちらへお通し申すがいい。

テスマン 「小声で」きつとあの男だ。ねえ御覽。

エイレルト・リョウヴボル、前廊を通過して入ってくる。すらりと高い瘦せぎすな男。テスマンとはど同年輩ながらずつと老けて、いくらかやつれて見える。髪の毛と髭は暗褐色で、顔は長めに青白く、たゞ頬骨の上だけがほんのり赤く色づいてゐる。しやれた黒の眞新しい訪問服を着てゐる。暗色の手袋とシックハットを手に持つてゐる。扉の側で立止まつて、そゝくさとお辭儀をする。ままりの悪い様子である。

テスマン 「迎へて手を握る」エイレルト君——とうとう又出あつたね。

リョウヴボル 「低い聲でいふ」どうもお手紙をありがとう。」「ヘッダの傍による」奥さん、お手を頂けませうか。

ヘッダ 「さし出された手を握る」リョウヴボルさん、ようこそ。「手をふつて」あの、お二人はお知合ひでしたかしら——

リョウヴボル 「軽く辭儀をする」ブラック判事でしたね。

ブラック 「同様に」さうです。あれは何年前でしたか——

テスマン 「リョウヴボルの肩に両手をのせて」さあエイレルト君、どうか家にゐるつもりで寛いでくれ給へ。ねえ、さうだらう、ヘッダ。——君はこの町に又居つくのだからちやないか。ええ。

リョウヴボル さうするつもりだ。

テスマン いや、それは嬉しいな。君、どうだ——僕は君の新著を買つたよ。だが實はまたそれを讀む暇がないのだがね。

リョウヴボル 態々讀むがものはないよ。

テスマン どうしてだね。

リョウヴボル 何も大したことが書いてある本ではないから。

テスマン ええ——どうしてそんなことをいふ。

ブラック しかしどうも大した好評のやうですね。

リョウヴボル さあ、實はそれをあてに書いたのですよ。だから誰にでも同感されさうなことがばかり、本には載つてゐるのです。

ブラック 至極賢明なやりかたですね。

テスマン うん、だがエイレルト君

リョウヴボル といふ譯は、もう一度地位をつくりたいといふ目的があるのでね。何でも新しく始めようといふのでね。

テスマン 「やゝ氣後れがしたやうに」ふん、成程、さうだらう。ええ。

リョウヴボル 「帽子を下へおき、上着のかくしから一束に

した紙包を引出す」しかしこれが出るとね——テスマン君——まあこれが出たら讀んで貰ひたい。これこそ本物のだからね。僕の正味はこれだ。

テスマン へえ。全體それは何だらう。

リョウヴボル 續きたよ。

テスマン 續き。何の。

リョウヴボル わたしの本の。

テスマン こんで出た本の。

リョウヴボル 無論さ。

テスマン だ、エイレルト君——あれは現代まで來てゐるぢやないか。

リョウヴボル 無論さうだ。ところでこれには未來の問題が扱はれてゐる。

テスマン 未來の。いやはや、驚くなあ。だが未來のことなんか、まるで分らないぢやないか。

リョウヴボル うん。だがとにかくその一斑はいへよう。

「紙包 ける」そら、これだ——

テスマン おや、これは君の手ではないね。

リョウヴボル 口授したのだ。「ページをめくる」二部に分かれてゐる。第一は將來の文化力を論じてゐる。それからこれが第二部だ。「更にあとのページをめくる」これ

には将来の文化の發達を論じてある。

テスマン えらいことだね。さういふことを書くなんて、

わたしにはまるで考も及ばないよ。

ヘッダ 「玻璃扉のところを玻璃を叩いてゐる」ふん——

駄目——駄目。

リョウボル 「原稿を紙包に納め、卓の上におく」實は今

晩少し読んで、聞いて貰はうと思つてもつて来た。

テスマン あゝ、それは非常にありがたいな。だが今晚は

ちよつと——「ブラックの顔を見る」少し都合がつきか

ねるかと思ふのだが——

リョウボル ぢやあこん度にしよう。急ぐことではない

のだ。

ブラック リョウボル君、かういふ譯なんですよ——今晚

わたしのところにもちよつとした會があるのですよ。テス

マン君が主賓でね——

リョウボル 「帽子をさがす」はゝあ——ぢやあわたしは

失禮ませう。

ブラック いや、そこでお話があるのですよ。どうです、わ

たしどもの方へお出かけになりませんか。

リョウボル 「そつげなく、はつきりと」いや、それは御

免かうむりませう。非常にありがたいのですが。

ブラック いや、何です。まあ、さうなさい。ほんのちよ

つとした、選りすぐつた人数の集りですから。多分ヘッ

ダ——いや、テスマン夫人のいはゆる『お氣ばらし』にな

らうと思ひます。

リョウボル それは無論でせう。しかし——

ブラック ぢやあその原稿をもつておいでになつて、わたし

どものところで、テスマン君に読んで聞かされたらどう

です。部屋は大丈夫ありますよ。

テスマン どうだね、エイレルト君——さうしてくれ給へ

な。えゝ。

ヘッダ 「間に入る」でもあなた、リョウボルさんお氣が

進まないやうならどう。それよりかきつとリョウボルさ

んはこゝにいらしつて、わたしとお夕飯を上がる方がお

好きでせうよ。

リョウボル 「彼女を見る」奥さん、あなたと。

ヘッダ それからエルヴステッドさんと。

リョウボル はゝあ——「軽く」あの人にはけふの晝

間會ひましたよ。

ヘッダ おやさう。で、あの人こゝへいらつしやるのよ。で

すからリョウボルさん、是非あなたにゐて頂かなければ

ならないのですよ。でないとなあの人を家まで送つて行く

人がないのですもの。

リョウボル 成程ね。どうも奥さん、ありがたう——ぢや

あ残ることにませう。

ヘッダ それでは女中にもちよつといひつけておきますわ——

彼女の前廊の扉口へ出て行つて呼鈴を押す。ベルテ

入ってくる。ヘッダ小聲で女中にいひつけて、奥の部

屋を指し示す。ベルテ、うなづいて又出てゆく。

テスマン 「同時にリョウボルに向ひ」ねえ、エイレルト

君——その将来に關する問題といふ——それがこん度君

がしようといふ講演の——新題目になる譯だね。

リョウボル さうだ。

テスマン 實は本屋で僕は聞いたのだ、君がこの秋この町

で連続講演をやるといふことを。

リョウボル あゝ、さうしようと思つてゐる。テスマン君、

君、變に思はないでくれ給へ。

テスマン 飛んでもないことだ。だが——

リョウボル それは多少君の邪魔になることは、僕も諒解

はしてゐるのだ。

テスマン 「否認の調子」いや、決して君は僕のために遠慮

をしてなんか貰ひたくない。

リョウボル しかし僕は君の任命のすむまでは待つよ。

テスマン 待つと。うん、だが——だが——ぢやあ君は競

争はするつもりではないのか。えゝ。

リョウボル うん。僕は君に勝つにしても、世間の批判に

よつてするつもりだ。

テスマン やれ、やれ——ぢやあやはりジュリヤーヌ小母

さんの言つた通りだね。いや、さうだらう——僕もさう

思つた。おい、ヘッダ、どうだい——エイレルト君はわた

したちの邪魔に入る考はないのだよ。

ヘッダ 「そつげなく」わたしたちですと。わたしはそのお

仲間から退けて下さい。

ヘッダ、奥の部屋へゆく。そこにはベルテがゐて壺や

コップをのせた給仕盆を卓の上におく。ヘッダちよ

とくなづいて、又前景へ出てくる。ベルテは出てゆ

く。

テスマン 「同時に」しかし判事さん——あなたは。あな

たはそれをどう思つてゐます。えゝ。

ブラック 左様まあ——名譽と勝利——ふん——とにかく

結構——

テスマン 「同時に」それは。しかしとにかく——

ヘッダ 「冷たい微笑をふくんでテスマンを見る」どうもあ

あなたは、雷に打たれた人のやうに見えますわ。

テスマン うん——まあそんなものかも知れん——わたしもさう思ふ——

ブラック いや、奥さん、やつて来たのは嵐でしたよ。

ヘッダ 「奥の部屋を指し示す」男のお客様たちはあちらにいらしつて、冷たいブンスジュでも上がりませんか。

ブラック 「時計を見る」門出の盃をね。それも悪くはないでせう。

テスマン 結構だねえ。どうして大賛成だ何しろ今はわたしも、實に晴々と軽い気持ちになつてゐるところだし——

ヘッダ リョウヴボルさん、あなたもいかが。

リョウヴボル 「さへぎるやうに」いや、ありがたう。わたしは止しませう。

ブラック いやはや——しかし冷たいブンスジュはわたしの知つてゐる限りでは、決して毒にはなりませんよ。

リョウヴボル なるほど大抵の人にはさうでせうが。

ヘッダ わたしその間、リョウヴボルさんのお相手をいたしますわ。

テスマン あゝ、あゝ、どうかさうしておくれ。

彼とブラックは奥の部屋へ行き、腰をかけてブンスジュを飲み、巻煙草を吸ひ、次の光景の間活潑に話をす

る。リョウヴボル、煖爐のところ立止まつてゐる。ヘッダ、寫字卓の方へ行く。

ヘッダ 「少し調子を高く」さあ、何でしたら寫眞を少しお目にかけてませうかね。テスマンとわたしと——こんど歸り道にちよつとチロルの方へ遊びに行きましてね。

ヘッダ、一冊のアルバムを持って来てツファー傍の卓の上におく。自分はその向うのツファーの隅にかけ。リョウヴボル、傍へ来て立止まり、彼女を見る。さて後一脚の椅子をとつて彼女の左のわきに腰をかけ、背中を奥の部屋に向けてゐる。

ヘッダ 「アルバムを開ける」御覽なさい、リョウヴボルさん、山が續いてゐるでせう。これがオルトレルですよ。テスマンが裏に書き入れました。ほら、書いてあるわ、メラン附近オルトレル群峰と。

リョウヴボル 「じつと彼女をみつめてのち低く静かな聲でいふ」ヘッダ——ガープレルさん。

ヘッダ 「男をちらりと盗むやうに見て」ほゝ。しい。

リョウヴボル 「小聲でくりかへす」ヘッダ・ガープレルさん。

ヘッダ 「アルバムに見入る」えゝ、それはわたしの昔の名でしたわ。わたしたち二人が仲よしでゐたあの時分のね。

リョウヴボル で、これからは——一生ずつと——もうわたしはいひ馴れたヘッダ・ガープレルを止めなくてはならぬい。

ヘッダ 「ページをくる」さう、さうして下さい。それもおきに馴れるでせうよ。それは早いほどいゝでせうよ。

リョウヴボル 「怒りをふくんだ聲で」ヘッダ・ガープレルが結婚をした。それも人もあらうに、ヨエールゲン・テスマンと結婚をした。

ヘッダ えゝ、さういふ譯ですね。

リョウヴボル ヘッダさん。あゝヘッダ——さん。どうしてそんな氣になつたのです。

ヘッダ 「不機嫌らしく相手を見る」何を。何がいけないのです。

リョウヴボル なんだつて。

テスマン、入つて来てツファーの方へゆく。

ヘッダ 「テスマンの来る音をきゝつけ、濟ましていふ」それからこれがリョウヴボルさん、これがアムベツオの谷から眺めた景色ですよ。ほら、山の頂上だけしか見えないでせう。「人なつこくテスマンを見る」ねえあなた、この妙な山は何といふのでしたつけ。

テスマン どれお見せ。あゝ、これは白雲石の山、いはゆる

るドロミーテンさ。

ヘッダ あゝ、さうでしたつけ。ドロミーテンでしたよ、リョウヴボルさん。

テスマン おいヘッダ——こゝへ少しブンスジュを持ち込んでもいゝだらうか。聞きに来たのだがな。せめてお前の飲む分でも。

ヘッダ 結構ですとも。えゝ。それからお菓子も少し持つていらつしやい。

テスマン 煙草はいけないかい。

ヘッダ いけません。

テスマン よし。

彼は奥の部屋へゆき右手へ出てゆく、ブラック奥に腰をかけたままヘッダとリョウヴボルを時折見てゐる。

リョウヴボル 「前のやうに聲を忍ばして」そこでヘッダさん、もう一度聞かう——どうしてさういふことが出来たのです。

ヘッダ 「アルバムに見入るやうな様子をしながら」もうあなた、そんな調子でどこまでも話をなさるなら、わたしお相手はしませんわ。

リョウヴボル わたしただの間でも、ぞんざいな口をきいてはいけないのですか。

ヘッダ え、それはわたしの遠慮だとお思ひでせう。けれどそれはあなたのためなのですよ。

リョウボル あ、分かつた。さうすると君の戀人に——ヨ

エルゲン・テスマン氏に侮辱を與へるわけなのですわ。

ヘッダ 「そつと彼を見てほゝゑむ」戀人。あなた、本當に人がいゝわ。

リョウボル ぢやあ戀人ではないの。

ヘッダ でも不實を働くほどでもないわ。もうそんな話は止ませうよ。

リョウボル ヘッダさん——ぢやあこれだけ答へて下さい

ヘッダ しい。

テスマン、給仕盆をもつて奥の部屋から出てくる。

テスマン さあ、いゝものを持つて来たよ。

盆を卓の上に置く。

ヘッダ おや、どうして御自身で来てお給仕をなさるの。

テスマン 「コップに注ぐ」だつてヘッダ、お前のお給仕をするのはとんだ面白いしやれなんだよ。

ヘッダ でもあなたは二つのコップに一ぱいお注ぎになつたわ。リョウボルさんは、でも召上からしないでせう——

テスマン うん、それはさうだな——だがエルヴステッドさ

んが程なくやつてくるだらう。

ヘッダ ほんとにさうだつたけ——エルヴステッドさんがね。

テスマン お前、忘れたのかね。え、

ヘッダ わたしたちこゝで寫眞に見入つてゐたのですよ。

「一枚の寫眞をさし示す」あなた、またこの小さい町を覺えていらしつて。

テスマン あゝ、ブレンネル越の麓に當るところだらう。

さうだ、そこで一晩夜を明したつけなあ——

ヘッダ ——そして大せい面白い避暑のお客に出會つたでせう。

テスマン さうだ——全くね。どうだ君——エイレルト君

も、われ／＼と一しよだと面白かつたがな。え、

又中へ入つて行き、ブラックの傍に腰をかける。

リョウボル ヘッダさん、一つ聞きたいことがあるんですよ——

ヘッダ はてね。

リョウボル わたしに對する關係にも戀愛はなかつたのですか。その痕跡すらもなかつたのですか——それは愛

のほのかな光でも。

ヘッダ え、さあどうでせうね。まあわたしにはいはゞ仲のいゝお友達同士だつたやうに思はれますわ。それは本

當に心おきのないお友達同士のね。「ほゝゑむ」それにあなたは随分むき出しな力ちからでしたもの。

リョウボル だつてそれはあなたが望んだのでせう。

ヘッダ わたしあの時分のことを考へると、あの祕密な親しい交際に——それは誰一人夢にも思はなかつたあのお仲間ごつこに——何ともいへない美しい、心をそゝられるやうなところが——大膽な、向う見ずなところがあつたやうに思はれるのですよ。

リョウボル え、さうでせう、ヘッダさん。僕もさう思ふのですよ。——あれは大抵午後でしたわ、おとうさまのところへわたしが伺つたのは——すると將軍は奥で窓ぎはに腰をかけて新聞を讀んでいらつしやる——背中をわたしたちの方へ向けてね——

ヘッダ するとわたしたちは隅のソファーに腰をかけました

リョウボル いつも同じ繪入新聞を二人して見たもので

す——

ヘッダ アルバムの代りにね。さうでせう。

リョウボル え、ヘッダさん——それからあなたに懺悔をしましたわ——それはとても他の人間の知らないことをあなたはわたしに話させたのです。そこに腰をかけ

たまゝ、その頃夜晝なしに亂暴な眞似をしあるいた話をさせられたのですよ。まつたく時間なしに——休息なしにあげられてゐましたわ。あゝ、ヘッダさん——しかしあれだけのことを無理にいはせたあなたには、何といふ力があつたのでせう。

ヘッダ あれをわたしの持つてゐる力だとお思ひになつて。リョウボル え、他にどう説明のしやうはないのですよ。そしてそれはみんな——みんな、あなたがわたしに向けた婉曲な質問のためでした——

ヘッダ それを又あなたもずるぶん器用にのみ込んで聞いて下さつたのね——

リョウボル 何しろあゝいふ質問を連發されてはね。全く遠慮なしにづか／＼と。

ヘッダ どうか婉曲にと、おつしやつて頂きたいわ。

リョウボル え、でもずるぶん單刀直入でしたよ。よくもあゝいふことが——あゝいふことがたづねられたと思ひますよ。

ヘッダ だつてリョウボルさん、それをあなたもお答へになつたでせう。

リョウボル え、それがわたしにもやはり分らない所だ——今ふりかへつて見てもね。しかしヘッダさん、どう

ですわね——つまりこの関係をつきつめて行けば戀愛ではなかつたのでせうか。あなたの方には、わたしを綺麗なからだに清めてやりたいといふ意志はなかつたのでせうか——わたしが、あの自分の懺悔をもつて、あなたの懐にとび込んで行つたときにね。さうではなかつたのでせうか。

ヘッダ いゝえ、まるでそんなことはないわ。

リョーヴボル ぢやあれはどういふ心持だつたのです。

ヘッダ するとあなたには、あれがそんなにお分りにくいことだつたの。一人の若い娘が——まあ自分の刀の及ぶ範圍で——あらゆる秘密に立入つて見ようといふ心持が。

リョーヴボル はてね。

ヘッダ 少しは世間の中へ立入つてのぞいて見たいといふ心持があつても、それは——

リョーヴボル それは——

ヘッダ ——それは知ることを禁じられてゐるのでせう。

リョーヴボル ぢやあさういふ譯でしたか。

ヘッダ ——それはね。それはね——まあそんなことでせうね。

リョーヴボル 生活の欲望を充たすための友達つきあひですわね。しかしそれにしても、とにかくもう少しづつとい

もよささうなものでしたわね。

ヘッダ それにはあなた御自身に罪があるのよ。

リョーヴボル しかしあなたの方から絶交したのでせう。

ヘッダ えゝ、二人の間に現實が入つて来さうな危険が見えたものですからね。リョーヴボルさん、あなただつてよく分かつてゐるでせう、よくも恥づかしくはなかつてね、——あなたのためにあれほど心を閉してゐるお仲間に対して。

リョーヴボル 「両手をしつかり握りしめろ」あゝ、どうしてあなたも眞剣にならなかつたのです。わたしをおどかしたとき、思ひ切つてわたしを射殺してしまはなかつたのです。

ヘッダ わたし、世間の問題を恐れたのですよ。

リョーヴボル さうです、ヘッダさん、つまりあなたは臆病なのだ。

ヘッダ えゝ、大臆病。「調子をかへながら」でもそれがあなたには爲合せでしたわ。だつて今では、エルヴステッドさんのところで、ずるぶん親切に世話をして貰つておいでなのですよ。

リョーヴボル さぞテヤがあなたに何かを打明けたこととせうね。

ヘッダ あなただつてあの人に、わたしたちの間のことをお打明けになつたでせう。

リョーヴボル いや一言も。さういふことを理解するにはあの女は馬鹿すぎますよ。

ヘッダ 馬鹿。

リョーヴボル さういふことには馬鹿ですよ。

ヘッダ それからわたしは臆病ね。「一層近くによつて相手の目を見ることなしに、鼻をかきめて小聲でいふ」ではわたし、今あなたに打明けていふことがあるわ。

リョーヴボル 「緊張して」といふと。

ヘッダ わたし、あなたを射殺す勇氣がなかつたのは——

リョーヴボル え。

ヘッダ ——あれはわたしのみじめな臆病のせゐではなかつたのですよ——あの晩には。

リョーヴボル 「ちよつと相手を見て、分かつたやうに、熱情をこめてさゝやく」あゝ、ヘッダさん。ヘッダ・ガープレルさん、今やつとお仲間ごつこの奥にかくれてゐた秘密が分かりました。あなたとわたしとの——。あれはやはり生活の欲望があなたの心にあつたのだ——

ヘッダ 「叱るやうな目付で見て軽く」お氣をつけなさい。そんなことを思ふなんて。

暗くなりかけろ。ベルテ、外から前廊の扉をあける。

ヘッダ 「アルバムをばたと閉ぢ、ほゝゑみながら叫ぶ」

あゝやつとテヤが——さあ、お入りなさい。

エルヴステッド夫人 前廊から出てくる。會合へ出る支度をしてゐる。扉は彼女のあとに閉される。

ヘッダ 「ソファーによりかゝつたまゝ、腕をのべる」あゝテヤ——わたしどんなにあなたを待つたか知れないわ。

エルヴステッド夫人 通りがかりに奥の部屋の男たちに軽く挨拶をして、それから卓のところに来てヘッダに手をさのべる。リョーヴボルは立上がる。彼とエルヴステッド夫人は無言でうなづき合つて挨拶する。

エルヴステッド夫人 わたしちよいとあちらへ行つて、御主人様とお話して来ませうか。

ヘッダ まあそんなことはいゝのよ。あの二人はうつちやつてお置きなさい。おき出かけて行くのですよ。

エルヴステッド夫人 お出かけ。

ヘッダ えゝ。あの人たちはお酒を飲みに行くのですよ。

エルヴステッド夫人 「リョーヴボルに向ひ早口に」でもあなたには行かないでせうね。

リョーヴボル えゝ。

ヘッダ リョーヴボルさんは——わたしたちとあとに残るの

ですよ。

エルヴステッド夫人 「二脚の椅子を取り、彼の傍に腰をかけたようにする」まあ、こちらは本當にきれいですね。

ヘッダ ちよいと待つて、テヤさん。そこはいけないわ。あなた、いゝ子だから、わたしのそばへいらつしやい。わたし、眞中にゐさしていただくわ。

エルヴステッド夫人 えゝ、どうぞ御隨意に。

彼女は卓のまはりぐるりとまはつて、ソファのヘッダの右手に腰をかける。リョーヴボルはまた椅子に落ちつく。

リョーヴボル 「短い間をおいて後ヘッダに」この人なかなか可哀らしい様子でせう。

ヘッダ 「ちよいと彼女の髪の毛を撫でる」まあ、様子だけ。

リョーヴボル 左様さ。だつてわれ／＼二人は——この人とわたしとは——わたしと二人はこれこそ本當の仲間同士なのですよ、お互に無條件に信じあつてゐるのです。ですから二人は一しよにゐて、それはずん／＼遠慮なしに話をしあふのですよ——

ヘッダ 婉曲にでせう、リョーヴボルさん。

リョーヴボル さあ——

エルヴステッド夫人 「ヘッダにすりよつて小聲で」あゝヘッ

ダさん、わたし、どんなに爲合せでせうね。あなた、どう思つて——わたしがこの人にインスピレーションを吹込んだといふのですよ。

ヘッダ 「微笑を含んで相手を見る」おや、この人そんなことをいつたの。

リョーヴボル それから奥さん、この人は自分の持つてゐる實行の勇氣を分けてくれました。

エルヴステッド夫人 まあわたしが勇氣をですつて——

リョーヴボル 無限の勇氣をね——それは仲間のためとなると。

ヘッダ えゝ、勇氣をね——さうでせう、それさへあれば。

リョーヴボル 何ですつて——その意味は。

ヘッダ それがあれば人生もどうやら辛抱が出来ようといふものです。「ふと話をかへる」でもねえテヤさん、ところどころで——とろろあなた、おいしい、冷たいプリンシがあるのよ、上がつて下さいな。

エルヴステッド夫人 えゝ、ありがたう——わたし、さういふものを飲んだことがないのよ。

ヘッダ でもあなたはさう、リョーヴボルさん。

リョーヴボル ありがたう、わたしもやりません。

エルヴステッド夫人 えゝ、この人もやらないのよ。

ヘッダ 「じつと男を見る」わたしがお願いしても駄目。

リョーヴボル 同じことですよ。

ヘッダ 「筆ふ」やれ、やれ、ぢやあ、わたし、あなたに對して何の力もないのでせうか。

リョーヴボル その點ではね。

ヘッダ 眞面目にいふのですが、どうもあなたはやはり飲む方がいゝのですよ。あなた御自身のためにね。

エルヴステッド夫人 でもヘッダさん——

リョーヴボル どうしてです。

ヘッダ いや、人のためといつた方がいゝかも知れない。

リョーヴボル へえ。

ヘッダ それをしないと、人はぢきにこんなことを考へますよ。あなたといふひとは自分につまり——しつかりした自信がない——自分自身に確信がないのだといふでせう。

エルヴステッド夫人 「小聲で」でもやはり駄目ですよ、ヘッダさん——

リョーヴボル 人は何を思はうと勝手です——今のところ。

エルヴステッド夫人 「嬉しきうに」——えゝ、本當ですわ。

ヘッダ わたしさつきブラック判事の様子をはつきりと見てみましたわ。

リョーヴボル どうしました。

ヘッダ あの人あなたが一緒に彼方の食卓に行くだけの自信のないのを見て、嘲笑つてみましたよ。

リョーヴボル 自信がない。だつて無論わたしはこゝに残つて、あなたとお話をする方が好きだつたのですよ。

エルヴステッド夫人 それは無論、さうですとも。

ヘッダ でもさういふことまで判事さんは氣がつかないでせう。それからあなたがあの人たちのちよつとした他愛のない會合にまで、一しよに行くだけの自信がないと見ると、口をひんまげて、そつとテスマンと顔を見合つてゐたのですよ。

リョーヴボル 自信。自信を持たないといふのですか。

ヘッダ わたし、さうはいひませんよ。でも判事はさう取つたのですよ。

リョーヴボル 勝手にしろだ。

ヘッダ ぢやあいらつしやらないのね。

リョーヴボル あなたとテヤと三人で残りますよ。

エルヴステッド夫人 えゝ、ヘッダさん——それはお分かりでせう。

ヘッダ 「ほゝゑんでリョーヴボルに賛成するやうにうなづく」ぢやああくまで原則で行くのですね——主義に忠實

なのですね。え、男子はさうありたいものですわ。「エルヴステッド夫人の方をむいて軽く夫人を叩く」そら、わたし、けさあなたがすつかり顔色をかへて入つていらした時いつたでせう——

リョーヴボル 「はつとして」顔色をかへて。

エルヴステッド夫人 「恐怖をもつて」ヘッダさん——ヘッダさん。

ヘッダ そらこれで御自分にもお分かりでせう。あんな死ぬやうな心配をして飛びまはる必要なんか、まるでないのですわ。「話をきつて」さあ、これで三人とも本當に心から寛げるでせう。

リョーヴボル 「恐怖に打たれたやうに」おや——それは、何のことです。テスマンの奥さん。

エルヴステッド夫人 まあ、まあ、ヘッダさん。あなた、何をいひ出したの。何をしようといふの。

ヘッダ まあ静かになさいよ。いやな判事があそこで見てみますよ。

リョーヴボル ぢやあ死ぬ程の心配をして。わたしの爲に。

エルヴステッド夫人 「小聲で泣きながら」あ、ヘッダさん、あなたは今の一言で、どんなにわたしを不幸にして下さつたでせう。

リョーヴボル 「しばくじつと夫人を見つめる。顔をしかめる」ぢやあそれが仲間同士の無限の信用といふものなのだね。

エルヴステッド夫人 「哀願するやうに」あ、あなたまあ聞いて下さいよ——

リョーヴボル 「なみくついだパンシユの盃を取り上げて、高く上げて、低いしやがれ聲でいふ」テヤさん、君の健康を祝するよ。

彼はコップをあけて下におき、もう一つを取上げる。

エルヴステッド夫人 「小聲で」あ、ヘッダさん、ヘッダさん——これがあなたの目論見だつたのね。

ヘッダ 目論見。わたしの目論見。あなた、どうかしてはるなくつて。

リョーヴボル それからテスマン夫人、あなたの健康を祝します。眞實に向つて感謝します。眞實萬歳。

彼は盃をのみ干して又注ぎにかゝる。

ヘッダ 「その手を押へる」さあ——今はもうそれだけにするのですよ。會に行くことを忘れないでね。

エルヴステッド夫人 いけない。いけない。いけない。

ヘッダ しつ。みんなあちらで鶴の目鷹の目ですよ。

リョーヴボル 「コップを下におく」おいテヤさん——さあ

正直に言つて貰はう——

エルヴステッド夫人 え。

リョーヴボル エルヴステッドさんは、あなたがわたしのあとから追つて来たことを知つてゐるのだらう。

エルヴステッド夫人 「両手をふりしほり」あ、ヘッダさん——あなた、この人のいふことを聞いて。

リョーヴボル これはあなた方夫婦の話合で、あなたは町へ来てわたしを監督してゐるのだらう。きつとエルヴステッドさんが、進んであなたをよこしたのだらう。は、あさうか。それはきつと役所の方の手が足りなくなつたのだらう。さもなければカルタのお相手がなくて困るのだらう。エルヴステッド夫人 「苦悶しながら小聲で」あ、リョーヴボルさん、リョーヴボルさん。

リョーヴボル 「コップをつかんで注がうとする」さあ老村長のためにも萬歳を唱へよう。

ヘッダ 「さへぎりながら」今は駄目ですよ。これから出かけてテスマンに讀んできかせるのでせう。忘れてはいけないわ。

リョーヴボル 「コップを下におき、静かに」これは——これはテヤさん、わたしが馬鹿だつたね。それをそんな風にとるなんて。まあ君、いゝ子だ、おこつてはいけない。

見てゐたまへ——君もほかの皆さんも——一度は墮落してもやはり——そら、この通り起上がつたから。ねえ、テヤさん、君のお蔭だ。

エルヴステッド夫人 「急に嬉しくなつて」あ、ありがたうございます——

ブラック、この間時計を見てゐる。やがてテスマンと二人立上がつて客間の方へ来る。

ブラック 「帽子と外套を取る」奥さん、いよく時間が来ました。

ヘッダ さうでせうね。

リョーヴボル 「立上がる」判事、わたしも御一しよに。

エルヴステッド夫人 「かすかに叫ぶ」あ。

ヘッダ 「彼女の腕をつねる」聞えてよ。

リョーヴボル 「ブラックに」御親切にわたしをお招き下さるといふことですか。

ブラック はてね。ぢやあ御一しよにおいでですか。

リョーヴボル え、大變勝手ですが。

ブラック どうして非常に愉快です——

リョーヴボル 「紙包をまとめてテスマンに向つていふ」ど

うかこれを印刷にまはす前に、一通り君に見てもらつておきたいのだ。

テスマン え、おい——それはありがたいな。——しかしヘッダ、さうするとエルヴステッドさんを誰に送らせたものだらう。

ヘッダ あ、その位どうにかかりますよ。

リョーヴボル 「婦人たちの方を見る」エルヴステッドさんですと。無論わたしが戻つて来て一しよに歸りますよ。「なほ傍による」ぢやあテスマンの奥さん、十時頃にね。い、でせう。

ヘッダ え、結構。お待ちしてゐますわ。

テスマン さう、それでは萬事好都合に行つたといふものだ。だがヘッダ、わたしの方はさう早くは歸れまいよ。

ヘッダ え、え、まあゆつくりしていらつしやい——よろしいだけ。

エルヴステッド夫人 「強ひて恐怖を抑へて」リョーヴボルさん——ぢやあお歸りを待つてゐますよ。

リョーヴボル 「帽子を手にもつて」大丈夫。ぢやあさうしてね。

ブラック さあ。諸君、いよく遊覧列車の出發です。どうか、或美人のいはゆる氣ばらしをやりたいものですな。

ヘッダ あ、どうかしてその美人も、隠れ蓑でも着て御同席したいものですわ。

ブラック なぜ隠れ蓑を着ます。

ヘッダ それはあなた方の取り繕はない御愉快ぶりを拜観するためね。

ブラック 「笑ふ」いやはや、それでは美人におすゝめは出來ませんよ。

テスマン 「やはり笑つて」うん、うん、ヘッダ、お前はうまいよ。え、おい。

ブラック ぢやあさやうなら、さやうなら、奥さんたち。

リョーヴボル 「お辭儀をして告別をす」ぢやあ十時頃にね。

ブラック、リョーヴボル及びテスマン、前廊の扉口から出てゆく。引きちがへてベルテが奥の部屋から灯のついたランプを持つて来て、客間の卓の上におく。さて後同じ道を又出てゆく。

エルヴステッド夫人 「立上がつて不安らしく部屋の中を歩き廻る」ヘッダさん——ヘッダさん、これからあとはどうなるのでせうね。

ヘッダ 十時頃に——するとあの人歸つて来るでせう。目に見えるやうだわ。葡萄の葉つばを髪にさして、眞赤にな

つて、上機嫌で。

エルヴステッド夫人 え、どうかさういふことになればいいが。

ヘッダ それからまあ見ていらつしやい——それからはあの人も、自分に打克つ力を恢復したのですよ。それでこそこれからの生涯も、自由な人を通るのですよ。

エルヴステッド夫人 あ、どうか——あなたが思つておいでるやうな人になつてくれ、ばい、が。

ヘッダ さうですとも、他にどうなるのですか。「立上がつて一層傍近くよる」いくらでも疑ひたいだけあの人をお疑ひなさい。わたしあの人を信じるわ。まあ見てゐませう——

エルヴステッド夫人 ヘッダさん、あなた何か目論見があるのね。

ヘッダ さうですとも。わたし、一生に一度でも、一人の人間の運命に對して支配力をもつて見たいと思ふのよ。

エルヴステッド夫人 ぢやああなた、それを持たないの。ヘッダ え、持たないわ——一度も持つたことがないわ。

エルヴステッド夫人 でもあなたの御主人に對しても。ヘッダ まあ、あの人なんかで苦勞する値打けないのよ。ああ、本當にわたし、どんなに貧しい人間だと思つて。それ

があなたと来ては、その通り福があるのでせう。「熱情をこめてテヤを抱く」どうもやはり、あなたの髪の毛を焼いてやりたいわ。

エルヴステッド夫人 離して。離して下さいよ。ヘッダさん、わたし、あなたがこはくなつたわ。

ベルテ 「扉口で」奥様、お茶の支度が食堂に致してございます。

ヘッダ あいよ。今行くよ。

エルヴステッド夫人 い、え、い、え、い、え。わたし、やはり一人で家へ歸つた方がい、わ。今すぐに。

ヘッダ とんでもない。まあお茶をのんでのからのことよ、お馬鹿さんねえ。それから十時頃になると エインルト。リョーヴボルさんが来るわ。——葡萄の葉つばを髪にさして。

ヘッダ、エルヴステッド夫人を殆ど力づくで扉口の方へ引張つてゆく。

第三幕

テスマンの住ひの間。扉口のカーテンは引いてあ

る。玻璃扉の前も同様である。笠をかけたランプが卓の上で心を半分引込めたまま、ついてゐる。煖爐は口を開けたまま、で火が燃えてゐたのが、今は殆ど燃え盡きようとしてゐる。

エルヴステッド夫人、大きなショールにくるまり、足臺に足をのせて煖爐に近く、眩掛椅子に仰向けになつてゐる。ヘッダはソファの上に着物のまゝ横になつて、一枚掛物をかぶつたまま、眠つてゐる。

エルヴステッド夫人 「やゝ間をおいて、あわてゝ椅子のまゝ起上がり、緊張した様子で耳を立てる。さてのち仰向けになつて小聲で泣く」ただわ。あゝ、あゝ——あゝ、あゝ——ただわ。

ベルテ、前廊からそつと入つて来る。手紙をもつてゐる。

エルヴステッド夫人 「ふりむいて緊張しながらさゝやく」え——誰か来たの。

ベルテ 「小聲で」えゝ、今しがた娘さんが手紙を持つてまゐりました。

エルヴステッド夫人 「急いで手を出す」手紙を。どれ。

ベルテ いゝえ、奥さま、先生のところへ来たのでございますよ。

エルヴステッド夫人 あゝ、さう。

ベルテ お使に参つたのは小母さまのところの女中でございます。この卓の上において参ります。

エルヴステッド夫人 えゝ、さうして下さい。

ベルテ 「手紙をおく」どうもランプは消した方がよろしいやうでございますね。油煙が立ちますから。

エルヴステッド夫人 どうぞ消して下さい。もう夜が明けたのでせう。

ベルテ もう明けました。

エルヴステッド夫人 あゝ、すつかり明るくなつた。でもまだ歸つて来ないのね——

ベルテ やれ、やれ——いづれこんなことだらうと思つてゐたのですよ。

エルヴステッド夫人 さう思つたのですつて。

ベルテ えゝ、それはある人がこの町へ戻つて来たところを見たからでございます——。しかも他の方と御一緒にお出かけでしたからね。何しろその人の噂は前からよく聞いて居りましたもの。

エルヴステッド夫人 そんなに大きな聲をしないでね。奥さ

まがお起きになるわ。

ベルテ 「ソファの方を見て溜息をつく」やれ、やれ——御窮屈さうに、まあ、お寝かししておきませう。——煖爐をたきませうか。

エルヴステッド夫人 ありがたう、わたしは澤山。

ベルテ あゝ、さやうで。

女中は前廊の扉口を通つてそつと出てゆく。

ヘッダ 「扉のしまる音で目をさまして、顔を上げて見る」おや何——

エルヴステッド夫人 なあに女中ですよ——

ヘッダ 「見まはす」あゝ、こんなところに——さう、さう、やつと分かつた——「ソファの上にかけたまゝ、起上がり、欠伸をして目をこする」何時。

エルヴステッド夫人 「時計を見る」七時を過ぎましたわ。

ヘッダ テスマンはいつ歸つて。

エルヴステッド夫人 「立上がる」まだお歸りにならないわ。

ヘッダ まだ歸らない。

エルヴステッド夫人 まだどなたもお歸りにならないわ。

ヘッダ ぢやあわたしたちは四時まで起きて坐つたまま、待ち明かしたのね——

エルヴステッド夫人 「両手をしぼる」わたし、どんなにあの人を待ちくらしただせう。

ヘッダ 「欠伸をして口に手を當てゝいふ」あゝ本當に——つまらないことをしたわね。

エルヴステッド夫人 あなたは眠れて。

ヘッダ えゝ、えゝ。何だかぐつすり寝こんだやうよ。あなたは。

エルヴステッド夫人 まんぢりともしないわ。出来もしません。とても出来た話ではないわ。

ヘッダ 「立上がつて彼女の方へ行く」まあ、まあ、まあ。何だつて心配することなんぞないわ。どういふことになつたんだか、よく分かつてゐるわ。

エルヴステッド夫人 ぢやあどう思つて。聞かして下さい。ヘッダ だつて判事さんのところで、無論、はずんで長くなつたのでせう——

エルヴステッド夫人 えゝ、えゝ——それはもう分かつてゐるわ。でもそれにしても——

ヘッダ さあそこでよくつて。さうなるとテスマンだつて家へ歸つて来て、眞夜中に人を起したり大騒ぎもやれなくなるでせう。「笑ふ」それに何しろ太陽氣でさわいだすぐあとでは——歸りたくもなくなるでせうからね。

エルヴステッド夫人　でも——ぢやあどこへ泊り込んだのでせう。

ヘッダ　無論小母さんのところに轉げ込んで、そのまゝ泊つてゐるのですよ。あそこには、昔ゐた部屋もそのまゝあけてあるのですからね。

エルヴステッド夫人　いゝえ、小母さんのところではないでせうよ。だつて今しがた小母さんのところからお手紙でしたものです。そこにありますわ。

ヘッダ　さう。「宛名を見る」成程、ジュリヤノ小母さんの手ですわ。さてさうすると、テスマンはやはり判事のところにもずくまつてゐるのですね。それからリョーヴボルさんは向ひあつて坐つて——葡萄の葉つげを髪にさして、原稿を讀んでゐるのでせう。

エルヴステッド夫人　まあヘッダさん、あなたは自分でも信じてゐないことを、口だけでいつてゐるのだけわ。

ヘッダ　本當にテヤさん、あなたは少しぬけてゐるわ。

エルヴステッド夫人　えゝ、不爲合せとわたし、さうらしいのですよ。

ヘッダ　それにあなた、ずゐぶん疲れ切つてゐるやうよ。

エルヴステッド夫人　えゝ、わたし疲れてゐるのですよ。

ヘッダ　さあ、それでは、わたしのいふ通りにするのです

よ。わたしの部屋へ行つて少し横におなんなさいよ。
エルヴステッド夫人　まあ駄目、駄目——とてもわたし、眠れさうになんかないのですよ。

ヘッダ　大丈夫よ。

エルヴステッド夫人　でも御主人がもうぢきお歸りでせう。さうしたらすぐおたづねをしなくては——

ヘッダ　それはあの人か歸つてくれればさういつてあげてよ。

エルヴステッド夫人　ヘッダさん、きつとさうしてくれて。

ヘッダ　えゝ、大丈夫、安心していらつしやい。まあしばらく入つてお休みなさいな。

エルヴステッド夫人　ありがたう。ぢやあとにかくさうして見ますわ。

彼女は奥の部屋を通つて出てゆく。ヘッダ、玻璃扉のところにもゆきカーテンをしぼる。きら／＼しい朝の光が部屋の中にさしこむ。さて後彼女は寫字卓から小さな手鏡を出し、覗き乍ら髪を直す。それから前廊へ出る扉口へ行つて、呼鈴のボタンを押す。

ベルテ、しばらくして扉の向うに現れる。

ヘッダ　あゝ、煖爐を焚いておくれ。寒くてしやうがない。

ベルテ　おや、それは——只今ぢき暖まりますよ。

女中は石炭をかきあつめて煖爐にくべる。

ベルテ　「ふと止めて耳を立てる」奥さま、表のベルでござ

いますよ。

ヘッダ　ぢやあ行つて開けておいで。火はわたしが見てあげ

るから。

ベルテ　程なくおこりつきますでせう。「出て行く」

ヘッダ、足臺の上に膝をついて煖爐の中に薪を入れ

る。すぐそこへテスマンが前廊から入つて来る。疲

れた上にやゝ氣むづかしい顔をしてゐる。そつと爪

ささ立ちをして、中の扉口まで這ひ寄るやうにして、

カーテンの間からぬつと現れる。

ヘッダ　「煖爐のところを顔上げることなしに」お早う。

テスマン　「ふりかへる」ヘッダかい。「傍へ寄る」しかしど

うしたといふことだ——お前がそんなに早くから起きて

ゐるといふのは。えゝ。

ヘッダ　えゝ、わたしけふはずゐぶん早くから起きてゐるの

ですよ。

テスマン　わたしは又てつきり、お前はまだ休んでゐるも

のと思ひ込んでゐた。えゝ、おい、ヘッダ。

ヘッダ　そんな大きな聲をなされるなよ。エルヴステッドさん

がわたしの部屋で休んでゐますよ。

テスマン　エルヴステッドさんは一晩中こゝにゐたのかい。

ヘッダ　えゝ、だつてどなたも迎へにおいでにならないので

すもの。

テスマン　あゝ、さう、全くそれにちがひない。

ヘッダ　「煖爐の口をしめて立上がる」ねえ、判事さんのと

ころでは面白うござんしたの。

テスマン　お前、わたしのことを心配してゐたかい。えゝ。

ヘッダ　いゝえ、ちつともそんなことは思やしません。でも

あなたが面白うござんしたかと何ふのですよ。

テスマン　あゝ、あゝ、それは勿論ね。まあ一度位は爲方が

ないさ。初めはずゐぶん面白かつた——といつても

いゝだらう。それはエイレルトが原稿を讀んでくれたか

らね。何しろ一時間も早く行つてしまつたのだ。えゝ。

それにブラック君は、いろ／＼と外の世話をやいてやらな

くてはなるまい。で、その間エイレルトは讀んでくれた

のだ。

ヘッダ　「卓の右手に腰をかける」成程。ぢやあそれを話し

て下さい——

テスマン　「煖爐の傍の腰掛に腰をかける」いや、どうして

ヘッダ、あれはどんな立派な制作になるか、とてもお前

には想像もつくまいよ。疑ひなくもつとも注目すべき書物

の一つになるだらう。

ヘッダ え、え、そんなことわたし、どうでもいゝのよ

テスマン ヘッダ、實は白状するがね。あの男が讀んで聞かしたあとでは、むら／＼と、あの男が憎いといふ氣が起つた位だよ。

ヘッダ 憎い氣が。

テスマン わたしは向ひ合つて聞きながら、よくもこれだけのものが書けたと思ふと、エイレルトがねたましくなつた。え、おい、ヘッダ。

ヘッダ え、え、さうでせうつて。

テスマン しかもあの男が、あれだけの才能を持ちながらどうしても救ふことの出来ない人間だと思ふとね。

ヘッダ それはあの二人に人一倍生活の勇氣があるためにといふのですか。

テスマン どうしてそんなことではない——お前、あの男は節制なしに道樂をする、あれがいけないのだ。

ヘッダ で、どうなつたといふのでせう——結局は。

テスマン うん、まあ、早速にいゆるらんちき騒ぎといふ有様になつたのさ。

ヘッダ あの人、葡萄の葉つばを髪にさして。

テスマン 葡萄の葉つば。いや、そんなものは見なかつたよ。しかしあの男は何でも自分の爲事の興を起してくれたある女のこと、長々しい、よく分からない演説をやつた。うん、何でもそんな風にあの男はいつてゐた。

ヘッダ その人の名前をいひましたか。

テスマン いや、それはいひなかつた。だが他ならぬエルヴステッド夫人であることは推察が出来る。それにきまつてゐるさ。

ヘッダ で——それからどこであの人とおわかれになつて。

テスマン 家へ歸る途中でね。われ／＼は一しよに出た——居残り連だけがね。ブラック君も少し新鮮な空氣につかるのだといつて一しよに出た。そこでい、かい、われわれは何でも、エイレルト君を家まで送らうといふ相談をきめた。何しろあの男はすつかり御機嫌を通り越してゐたのだからね。

ヘッダ さうでせうつて。

テスマン ところでお前、大變なことが出来たのだよ。いや、情ないことといふ方がいゝだらう。いやはや——エイレルト君のために——話すのも——恥づかしい位だ。

ヘッダ ふん、ふん、それで。

テスマン そこでわたしがあとの連中に急いで追ひつかう

とすると——お前どうだ、その時往來で何をわたしが見つけたと思ふ。え。

ヘッダ だつて分かるのですか。

テスマン しかしお前、誰にもいつてはいけないよ。いゝかい。きつとだよ、エイレルトのためにね。「紙にくるんだ包を上着のかくしから出す」え、おい——これを見つけたのだよ。

ヘッダ それはゆうべあの人が持つてゐた包ではありませんか。

テスマン さうだとも。これこそあの男の生命より大事なかけがへのない原稿なのだ。それをあの男は往來に落しておいて、まるで氣がつかないのだ。え、おい、お前、情ない話ぢやないか——

ヘッダ ぢやあなせ、包をすぐ返してあげなかつたの。

テスマン いや。とてもそんなことが出来るものか——あの男のあの時の有様では——

ヘッダ それを見つけたことは他の人には話さなかつたの。テスマン 無論さ。エイレルト君のためにもそんなことは出来やしないだらうぢやないか。

ヘッダ ぢやああなたがリョーヴボルさんの原稿をもつておいでのことは、誰も知らないのですね。

テスマン あ、それは一人だつて知つてゐるものはないのだよ。

ヘッダ ぢやああなた、そのあとであの人と何を話していらしつたの。

テスマン それからはもう何も話をする暇などはありはしなかつたよ。だつて町へ出ると、あの男はほかの二人——三人の仲間と一しよに、我々をまいてしまつたのだ。え、おい。

ヘッダ へえ。ぢやあきつとその人達が家へあの人をつれ込んだのでせう。

テスマン うん。どうもさうらしいよ。それにブラック君もどこかへ消えてしまつた。

ヘッダ するとあなたはそのあとで、どこへどうまごつてゐたのです。

テスマン わたしともう二人の仲間は、遊び仲間の一人の下宿へ行つて、朝のコーヒーを飲んだ。いや夜のコーヒーといつた方が當つてゐるかも知れない。え、え。ところで、わたしは少し休んだら、——可哀さうにエイレルトも多分一休みした頃だらうから、すぐあの男のところへ、これを持つて行つてやらなければならぬ。

ヘッダ 「手を出して紙包をつかむ」いゝえ——持つて行か

ないでもいゝわ。すぐにはね。先にまあわたしに讀まして下さい。

テスマン いゝや、どうしてお前、それはいけないよ。

ヘッダ いけない。

テスマン うん——だつて考へても分かるぢやないか。あの男が目がさめて原稿が紛失してゐたら、きつと氣がちがふほど驚くにちがひないよ。何でも寫しといふものがないのだといふからね。それは自分でいつてゐた。

ヘッダ 「やゝ探るやうに夫をみる」ぢやあかういふものはもう一度書くといふことは出来ないのですか。二度とはね。

テスマン うん、それはもう決して二度とやり直せるものではないだらうよ。何しろインスピレーションによるのだからね。——ねえ——

ヘッダ えゝ、えゝ——きつとさういふことなんでせうね。

「軽く」あゝ、さうだつて——手紙が來てゐますよ。

テスマン えゝ、おい——

ヘッダ けさ早く來たのです。

テスマン 何だ、ジュリヤノ小母さんの手紙だね。何だらう。「包をもう一つの腰掛におき、手紙をあけてぎつと目を通すと驚いて立上がる」おいヘッダ、リーナ小母さんが

危篤だといふのだよ。

ヘッダ いづれ覺悟の前でせう。

テスマン しかも餘程急かないと、死目にあへないかも知れない。すぐ飛んで行つて來よう。

ヘッダ 「微笑をおさへる」今更飛んで行くのですつて。

テスマン ねえヘッダ、お前も一しよに行つてくれるといふのだけだね。えゝおい。

ヘッダ 「立上がり、面倒らしく、拒むやうにいふ」いや、いや、そんなことは御免かうむるわ。わたし病人だの死人だの見るのは大きらひ。何でもいやなことをさせられるのは御免ですよ。

テスマン さうかい——。「歩きまはる」帽子は——。外套は——。あゝ、さう、表だ——。どうかお前、間にあつてくれればいゝがねえ。えゝおい。

ヘッダ まあ飛んでいらつしやい。

ベルテ、前廊の扉口に現れ。

ベルテ ブラックさまがお見えになつて、通つてもいゝかとおつしやいます。

テスマン 今頃。いや、今はとても會つてはゐられない。

ヘッダ だつてわたしがゐますわ。いゝからお客様をお通し申しておくれ。

ベルテ出てゆく。

ヘッダ 「あわてゝさゝやくやうに」あなた、包は。

ヘッダは原稿の包を腰掛から取上げる。

テスマン あゝそれを。

ヘッダ いゝえ、いゝえ、わたしお歸りまでお預りしておくわ。

ヘッダ、寫字卓の方へ行き、それを書棚にしまふ。テスマン、あわてゝ手袋がはまらない。

判事ブラック、前廊から入つてくる。

ヘッダ 「ブラックに向つてうなづく」おや、これはお早いお目さめね。

ブラック えゝ、さうでせう。「テスマンに」君ももう早速御出勤かい。

テスマン あゝ、どうしても小母のところに行かなくてはならないのでね。どうです——病人が死にかけてゐるのですよ。

ブラック やれ、やれ、それはどうも。ぢやあどうかわたしの方はおかまひなくね。何しろそんな場合では——

テスマン えゝ、本當に失禮しますよ。——さやうなら、さやうなら。「前廊の扉口から出てゆく」

ヘッダ 「傍へ來る」あなた昨晚は御愉快を通り越したやう

ですわね。

ブラック 實際着物を着換へる暇もありませんでしたよ、

ヘッダさん。

ヘッダ あなたも。

ブラック えゝ、ごらんの通り。しかしテスマン君はゆうべの話をどうしてゐました。

ヘッダ なあにほんのつまらない話ばかり。何でもどこかの家へ行つて、コーヒーを飲んだといふだけのこと。

ブラック いや、そのコーヒーの梯子をかけた話は聞きましたよ。どうもエイレルト・リョーヴボル君は一しよではなかつたやうですわね。

ヘッダ えゝ、その前に皆さんが家へ連れて行つたやうです。

ブラック テスマン君も。

ヘッダ いゝえ、ほかの連中だといつてゐました。

ブラック 「微笑する」奥さん、ヨールゲン・テスマン君は實にお目出度い人ですわね。

ヘッダ えゝ、おつしやるまでもないわ。でも何かあつたのですか。

ブラック はあ、事件はそれだけのものではありませんよ。

ヘッダ はてね、まあ坐ることにいたしませう。それからゆ

つくり伺ひますわ。

ヘッダは卓の左側に向つて腰をかける。ブラックはその傍の幅の長い方に向つてかける。

ヘッダ さあ、それで。

ブラック ゆうべわたしが客のあとを——いや、正しくいふと、一部の客のあとをつけて行つたには、正当な理由があるのです。

ヘッダ で、そのお仲間の中にエイレルト・リョーヴボルさんがゐたといふわけですね。

ブラック まあ白状すれば——正しくその通りです。

ヘッダ さあ、それでいよく面白くなりましたわ——

ブラック ところでヘッダさん、あの人と他の二三人の連中がどこで夜を明かしたと思召す。

ヘッダ お話の出来ることでしたらどうぞ。

ブラック 勿論お話の出来ることですとも。で、連中は非常に盛んな夜會へ出かけたのですよ。

ヘッダ 御愉快な夜會へね。

ブラック それこそ無禮講の夜會ですよ。

ヘッダ それからどうして——

ブラック リョーヴボル君もそこへは前から招待されてゐたのです。それはわたしもよく知つてゐました。初めはあ

の人も斷つて行かなかつた。それがそれ、例の新しい人間に生れかはつたところですからね。

ヘッダ さう、田舎のエルヴステッドさんの家にゐた時はね。でもやはり行つたのでせう。

ブラック え、奥さん、何しろそら——不幸にしてゆうべわたしの家に来ると、精靈があの人に乗り移つたものだからね——

ヘッダ え、何でもインスピレーションが乗り移つたさうですね。

ブラック いや實際、非常に猛烈な程度のインスピレーションでね。で、どうもまるで、人間が變つたかと思ふやうでした。何しろ我々男子といふやつは、不幸にしていつも當然守るべき主義を守らないものでしてね。

ヘッダ あら、だつてあなたは例外ですわ。で、リョーヴボルさんは——

ブラック さあ簡単にいひますと——結局先生、とう／＼チアナ嬢の客間に上陸といふことになつたのです。

ヘッダ チアナ嬢の。

ブラック 夜會を開いてゐたのはチアナ嬢ですよ。女のお友達と崇拜者連の選ばれた會合のためにね。

ヘッダ それが髪の毛の赤い人といふのですか。

ブラック 圖星です。

ヘッダ 何でも——歌をうたふ女だとかね。

ブラック さう、さう——歌をうたふこともありませう。それから何しろ猛烈な射撃家ですよ——紳士諸君のね——奥さん。名前はきつと御存じでせう。エイレルト・リョーヴボル君は、最も熱心な保護者の一人にしてね——彼女の全盛時代には。

ヘッダ で、どうをさまりがつきました。

ブラック どうして生やさしいことではなかつたらしいのですよ。チアナ嬢の平和な宴會は忽ち修羅場と化したのです——

ヘッダ リョーヴボルさんとの間に。

ブラック 左様。あの人が、女主人公を相手にしたか、他の女たちを相手にしたか、とにかくあの人のものを盗んだといひ出したのです。何でも懐中物をぬかれたといつてきかない。他の品物も一しよにとられたといふ騒ぎです。つづめていへば大らんちきを始めたのです。

ヘッダ で、をさまりはどうなりました。

ブラック とよのつまり——まあいは——男女入亂れての大格闘になつたのです。爲合せとそのうち巡査がかけつけて來ました。

ヘッダ 巡査までやつて來たのですか。

ブラック え、どうもこの冗談はリョーヴボル君にもずるぶん高くついたでせうよ、氣違ひじみた先生にね。

ヘッダ へ、え。

ブラック 何でも先生、官憲に對して反抗を試みたらしいのですね。巡査の横面をなぐつたり、官服を引裂いたりしたらしいのですね。そこで先生、警察署までいやでも御同行といふことになつたのです。

ヘッダ でもそれをどこから聞いていらしつた。

ブラック 當の巡査から聞きましたよ。

ヘッダ 「じつと向うを見る」ぢやあやはりそんなことになつたのですね。やはりあの人、葡萄の葉つばを髪にさしたのですね。

ブラック 葡萄の葉つばですと。

ヘッダ 「調子をかへる」でもあなたに伺ひたいわ——全體どうして、そんなにエイレルト・リョーヴボルさんのあとをつけたり、様子をさぐつたりなさつたのでせう。

ブラック だつてさし當り出るところへ出て、あの人がつひわたしの家から出て來たことが分かれば、まんざら知らん顔では濟まされせんからね。

ヘッダ ではやはり裁判所まで行くのでせうか。

ブラック 勿論さ。しかしそれはとにかく大したことではない。しかしこちらの友人として、一應あなたとテスマン君に、昨夜のリョーヴボル君の行動について、はつきりした報告をしておく義務があるやうに思ふのです。

ヘッダ それはどうして。

ブラック どうもあの人が、あなたをいはず屏風がはりに用ひやしないかといふ疑ひが十分ありますから。

ヘッダ でもどうしてそんなことをお考へになるでせう。

ブラック もしく／＼奥さん、われ／＼は盲目ではありませぬよ。よろしいか。あのエルヴステッド夫人なるものは、無論早速にはこの町を離れはしません。

ヘッダ だつてあの二人の間に譯があるにしても、お互會はうと思へば、どこでも他にいくらでも場所はあるでせう。

ブラック いや、家庭としてはないでせう。苟くも名門を重んずる家では、今後再びリョーヴボル君を出入りさせるところはないでせう。

ヘッダ だから家でもさうしなくてはならないとおつしやるの。

ブラック さうです。どうも正直の話、あの先生が今後この家に入りますといふことは、わたしには不快といふより以上です。何しろあんな餘されもの——無能力者が

——入り込んで来るといふのは——

ヘッダ ——三角同盟の中へね。

ブラック その通り。さうなるといはず、わたしといふものは宿なし同様になるでせうよ。

ヘッダ 「微笑しながら彼を見る」ぢやあ——鳥籠の中の唯一羽の雄鶏でゐたいといふのが、あなたの目的ですね。

ブラック 「靜かにうなづいて聲を落す」左様、それがわたしの目的です。その目的のためには、わたしは敢へて——自分の手に委ねられた限りのあらゆる武器をもつて戦ひます。

ヘッダ 「微笑をだん／＼に引込ませながら」どうもあなたは怖い方のやうですね。いよ／＼となると。

ブラック さう思ひますか。

ヘッダ え、段々さう思ふやうになりました。まあ、あなたに急所を押へられない間は——呑気に安心してゐられますわ。

ブラック 「あやふやに笑ふ」成程、奥さん——まあ、おつしやるやうなものかも知れん。まづそんな破目にでも落ちたが最後、どんなことになるか知れたものではありませんからね。

ヘッダ おや、判事さん、あなたは何をおつしやるの。どう

やら脅迫がましく聞えますわ。

ブラック 「立上ガス」飛んでもない。さて三角同盟は——ねえ、よろしいか、何よりも自由意志で維持されもし、保護されもするのですよ。

ヘッダ わたしの考もさうですわ。

ブラック さてこれで申上げることだけは申上げました。さあそれでは、そろ／＼引上げなくてはなりません。左様なら、奥さん。

ガラス扉の方へ行きかける。

ヘッダ 「立上がる」庭の方からいらつしやるの。

ブラック え、近道をするのです。

ヘッダ 成程、その代り間道です。ブラック 全くその通り。わたしは一向間道を厭ひません。時によると、却つて飛んだ氣のきいたものですよ。

ヘッダ そのかはりピストルでやられるかも知れないわ。

ブラック 「扉口でヘッダに向つて笑ふ」何ひと、手飼ひの雄鶏をまさか籠のまゝ打ちもしますまい。

ヘッダ 「同じやうに笑ふ」全くね——一羽しかゐない時にはね——

ヘッダは笑ひ乍ら挨拶の代りにうなづく。ブラックは出て行く。ヘッダ、そのあとの扉を閉める。しばらく

ヘッダ・カーブレル

むづかしい顔をして立つたまゝ外を見る。さて後奥の方へ行き、カーテンを開けて部屋の中を覗く。それから寫字卓の方へ行き、書棚からリョーヴボルの紙包を出し、原稿のページをめくらうとする。ベルテの聲が前廊の外で高く聞える。ヘッダ、ふりむいて耳を立てる。それからあわて、紙包を抽斗にしまひ、鍵をかける。

リョーヴボル、外套と帽子を手に持ち前廊の扉口へ突き破るやうにして入つて来る。やゝ取亂して、興奮した様子に見える。

リョーヴボル 「前廊の方をむいて」だから何でも中へ入らなければならぬといふのだ。え、え。

扉を閉めてふりむいて、ヘッダを見て、忽ち自制して挨拶をする。

ヘッダ 「寫字卓のところへ」あら、リョーヴボルさん、テヤさんのお迎へにしては、ずるぶんごゆつくりですね。

リョーヴボル いや、こちらへあがるにしては、ずるぶん早過ぎたともいへませう。失禮はお許し下さい。

ヘッダ あの人はまだ家にゐることを、どこで聞いていらしたの。

リョーヴボル あの人宿ではゆうべ一晩歸らなかつたといひました。

ヘッダ 「客間の扉の方へゆく」さういつたとき、宿の人達はどんな顔をしてゐたでせうね。

リョーヴボル 「不思議さうにヘッダを見る」どんな顔とは。

ヘッダ 何かそれについて妙に思つてゐるやうないひ方ではなかつたかといふこと。

リョーヴボル 「すぐ覺つて」は、あ成程、さうですね。あの人の顔まで一しよに汚したわけだ。とにかくわたしは一向に氣がつかなかつたのです——テスマン君はまだ起きないでせうね。

ヘッダ さあ——どうですか——

リョーヴボル 何時頃歸つておいででした。

ヘッダ ずるぶん晩くよ。

リョーヴボル 何かお話はありませんでしたか。

ヘッダ え、何でも判事さんのところでは、ずるぶんはめをおはづしになつたやうですね。

リョーヴボル 他には何も。

ヘッダ え、さうでしたらうよ。何しろこちらが堪らなく眠かつたものですから。

エルヴステッド夫人、奥の部屋のカーテンを開けて

出てくる。

エルヴステッド夫人 「彼を出迎へて」あ、リョーヴボルさん、やつと。

リョーヴボル あ、やつと。しかしもうおそい。

エルヴステッド夫人 「心配しきつた様子で彼を見る」もう晚い——何かです。

リョーヴボル 何もかも。萬事休した。

エルヴステッド夫人 まあ、いけない、いけない——そんなことをいはないでね——

リョーヴボル 話をきけば、同じことをいふにきまつてる。

エルヴステッド夫人 何にもきたくはないわ。

ヘッダ どうもあなた方だけでお話になる方がいゝのでせう。わたし、行きますわ。

リョーヴボル いや、ゐてください——あなたもゐて下さい。どうぞお願ひします。

エルヴステッド夫人 でも、わたし、何にも聞きませんといふのにねえ。

リョーヴボル ゆうべの事件を話さうといふのではないよ。

エルヴステッド夫人 ぢやあ何を。

リョーヴボル それはわれ／＼が、これから別々の道に分かれて行かなければならないといふこと。

エルヴステッド夫人 別れる。

ヘッダ 「我知らず」わたしには分かつてゐた。

リョーヴボル テヤさん、君といふものがわたしにはもう用がなくなつたのだからね。

エルヴステッド夫人 それを面と向つておつしやるの。もうわたしに用がないなんて。わたしこれまで通りお手傳ひをしては上げられないといふの。一しよに爲事をしてはいけないといふの。

リョーヴボル わたしはもうこのさき爲事はしようとは思はない。

エルヴステッド夫人 「殆ど自分をなげ出したやうな態度で」ぢやあ何をして生きて行けよう。

リョーヴボル まあわたしといふものを知らなかつた昔に歸つて、生きて行く覺悟をして貰ひたい。

エルヴステッド夫人 でもそんなことは出来ないわ。

リョーヴボル まあ、やれるだけやつて下さい、ねえ、テヤさん。又家へ歸つてね——

エルヴステッド夫人 「非常に興奮して」どんなことがあつてもこればかりは。あなたのあるところにわたしもゐます。そんなふうにして追ひ出されやしないから。わたしはこのまゝこゝにからうして——あの本が出る時は、あなた

の傍を離れないつもりです。

ヘッダ 「緊張して、小聲で」あ、本が——さうだ。

リョーヴボル 「じつと女を見る」わたしの本で、そしてテヤの本だ。實際さうなのだ。

エルヴステッド夫人 え、わたしもさうだと思つてゐます。だから本が出る時には、わたしもお傍にゐる権利があるのです。わたしはどこまでも本と一しよにゐて、あなたが十分尊敬と名譽を取返すところを見たいのです。そしてその喜びを——その喜びを、あなたと二人で分けたいのです。

リョーヴボル テヤさん——二人の中の本は、二度と世の中へは出ないのだよ。

ヘッダ あ、。

エルヴステッド夫人 出ないのですつて。

リョーヴボル 出せないのだ。

エルヴステッド夫人 「苦しい豫感をもつて」リョーヴボルさん——原稿をどうしたのです。

ヘッダ 「緊張して男を見る」原稿を。さう——

エルヴステッド夫人 どこへやつたの。

リョーヴボル あ、テヤさん——どうぞそれを聞いておくれでない。

エルヴステッド夫人 だつて、だつて、わたしは聞きます。

すぐそれを聞かせて貰ふ権利があるのです。

リョーヴボル 原稿は——。うん、さうだ、原稿はずたくに引裂いてしまつた。

エルヴステッド夫人 「叫ぶ」あゝ、嘘です、嘘です——

ヘッダ 「思はず」でもそんなことは——

リョーヴボル 「ヘッダを見る」——本當だとおつしやるのでせう。

ヘッダ 「氣を落ちつけて」さうよ。無論ね。それはあなたが御自身の口からおつしやるのですものね。でも、やはり本當らしくは聞えない。

リョーヴボル でも、何でも、本當なのです。

エルヴステッド夫人 「兩手をふりしほる」あゝ、どうしませう——どうしませう、ヘッダ——自分の本をずたくに引裂いてしまふなんて。

リョーヴボル 自分の一生はとうにずたくに引裂いてしまつたのだ。まして一生の著述位何でもないことだ——

エルヴステッド夫人 ぢやあそれは、ゆうべしたることなんです。

リョーヴボル あゝ、さうだとも。びり／＼引きちぎつてやつた。そして入江にはふり込んでしまつた。はるか沖

の方へ。あそこにはとにかく新鮮な海の水がある。その中へ沈んで行くだらう。嵐に吹きまくられるだらう。やがて——沈んでしまふだらう。ずん／＼深く、深く。わたしと同じことだね。

エルヴステッド夫人 ようござんすか、リョーヴボルさん、本をそんなことにしたといふのは——。いはゞ赤ん坊を殺したやうなものですよ。わたしは死ぬまで忘れません。

リョーヴボル それは君のいふ通りだ。まあ子供を殺したやうなものだ。

エルヴステッド夫人 でもどうしてそんなことが出来たでせう。だつてその子供は半分わたしのものですよ。

ヘッダ 「殆ど聞えない聲で」あゝ、子供——

エルヴステッド夫人 「苦しい息づかひ」ぢやあこれぎりね。えゝ、えゝ、それではヘッダさん、お暇するわ。

ヘッダ でもまさか、この町を立つのではないでせう。

エルヴステッド夫人 あゝわたし、何をするか自分で自分から分らないわ。どちらを向いても——闇ですよ。

前廊を通つて出てゆく。

ヘッダ 「しばらくだまつて立つてゐたが」ではリョーヴボルさん、送つておいでにならないの。

リョーヴボル 僕が。往來中を。あの人とつれ立つて行く所

を、世間の人に見せろといふのですか。

ヘッダ 全體ゆうべ、他にどんなことがあつたか、無論わたしは知りません。でもどうしても、もう取り返しつかないことなのですか。

リョーヴボル ゆうべだけで事件は落着いたのではない。それはよく分かつてゐます。その上問題は、わたしはもはや先々かういふ生活をつゞけて行くことが出来ないといふことです。もう新しくやりかへすことは出来ない。生活の勇氣も、抵抗力も、あの婦人と一しよに去つてしまつたのだ。

ヘッダ 「じつと前を見る」あの甘いお馬鹿さんが、一人の人間の運命を指先で操つたのだ。「男を見る」でも、なんぼ何でも、あの人によくもあゝ不人情にしむけられたものね。

リョーヴボル いや、不人情などとはいはないで下さい。

ヘッダ あの人長い長い年月、ありつたけの精神をつぎこんだ爲事をつひいゝ加減なことにして元も子もなくしてしまふといふのは。それを不人情とはいへないでせうか。

リョーヴボル ヘッダさん、あなたには眞實を話すことが出来るよ。

ヘッダ 眞實とは。

リョーヴボル でもその前に約束して下さい——わたしが打明けたことを、決してテヤにはいはないといふ誓言をして下さい。

ヘッダ ぢやあ、誓言しますわ。

リョーヴボル よろしい。ではいひませう。今しがたわたしのいつたのは本當のことではありません。

ヘッダ 原稿のことですか。

リョーヴボル えゝ。わたしは原稿を引裂いたのではないのです。入江になげ込んだのでもないのです。

ヘッダ えゝ、えゝ——。でも——すると、どこにあるの。

リョーヴボル やはりそれでも亡くなしてしまつたのです。元も子もなしにねえ。

ヘッダ それでは分かりませんわ。

リョーヴボル しかし子供を殺すといふ——それが父親の行ひ得る最大の悪事ではないのです。

ヘッダ 最大の悪事でない——といふの。

リョーヴボル えゝ。一等の悪事をテヤに聞かせることは

わたしは忍びなかつた。

ヘッダ おやあ、最大の悪事とは。

リョーヴボル ねえ、ヘッダさん、假に一人の男がゑるとします—それが明け方になつて—しかも一晩亂暴に騒ぎ廻つたあとで、子供の母親の所へ歸つて来て、かういふのですよ。おい、お聞き—おれはこれ／＼の所に行つてゐた。かく／＼の場所にもゐた。子供はおれがつけゐた。これ／＼の場所にもゐた。すると子供が見えなくなつた。かゝる行方が知れないのだ。どうも全體何もの手に渡つたのかまるで分からぬ。からもう手が、りが無くなつてゐるのだ。誰にどうされてゐるかさらに分からないのだとかういつたとします。

ヘッダ でも—つまりいへば—ほんのこれは一冊の本の問題でせう—

リョーヴボル テヤの純潔な魂はその本の中にもつてゐます。

ヘッダ えい、それは分かつてゐるわ。

リョーヴボル ぢやあお分かりでせう。わたしたちお互の關係にもはや將來のないといふことは。

ヘッダ ではこの後どうなさうといふの。

リョーヴボル 何にもない。まあわたしはどんな風にしてこ

の一生に結末をつけるか見てゐて下さい。それは早ければ早いほどいいのだ。

ヘッダ 「一足進んで」リョーヴボルさん—よくつて—。あなたは一番—その結末を立派にして見せようとは思はなかつて。

リョーヴボル 立派に。「ほゝ笑む」葡萄の葉つばを髪にさして、といつかあなたがいつたやうにね—

ヘッダ あゝいや。葡萄の葉つばなんか—わたしあゝいふことはもう信じない。でもどうぞ立派にね。たゞ一度しかないことですよ。—御機嫌よろしう。さあ、もういらつしやい。もう二度と来てはいけませんよ。

リョーヴボル ぢやあ奥さん、御機嫌よう。それからヨエールゲン・テスマン君にもよろしく。「出て行かうとする」ヘッダ いゝえ、ちよつと待つて。お形見をもつて行つて頂くわ。

寫字卓の方へ行き、抽斗を開けてビストルの箱を開く。やがて一挺のビストルをもつてリョーヴボルのところに歸つてくる。

リョーヴボル 「彼女を見る」これを。これが形見ですか。

ヘッダ 「おもむろにうなづく」このビストルに覺えがあるでせう。一度あなたをねらつたことのあるビストルです

第四幕

テスマン家の同じ部屋。晩である。客間は暗いまま。奥の部屋は卓の上の方に掛けた吊ランプの火で照らされてゐる。玻璃扉のカーテンは引いてある。

ヘッダ、喪服を着て暗い部屋の中を行つたり来たりしてゐる。やがて奥の部屋へ入つて左の方へ出て行く。二度ピアノの音が聞える。やがてヘッダは又出て来て、客間へ入る。

ベルテ、右手から奥の部屋を通つて出て来る。灯のついたランプを持つて客間の隅ソファの前の卓にのせる。その目は泣きはらしてゐるやうで、小帽子に黒い布をつけてゐる。静かにつゝましく右手の方へ出てゆく。ヘッダは玻璃扉の方へ行き、カーテンを少しわきよせて外の闇を見る。

やがてそこへテスマン嬢が喪服を着て、帽子にヴェールをかけ、前廊から入つて来る。ヘッダ迎へに出て手

よ。

リョーヴボル いつそあの時お役に立て、下さるとよかつたのでした。

ヘッダ そら。こん度は御自分でお役にお立てなさい。

リョーヴボル 「ピストルをかくしにしまふ」ありがたう。

ヘッダ そして—リョーヴボルさん、立派にね。きつと立派にやると約束して下さい。

リョーヴボル 御機嫌よう、ヘッダ・ガープレル。「前廊を通つてゆく」

ヘッダ、扉口でしばらく耳を立てる。それから寫字卓の方へ行き、原稿をくるんだ紙包を取り出し、しばらく上覆ひを眺めて二三枚ページをくつて中を見る。それからそつくり手にもつて、煖爐の傍の掛椅子の方へ行つて腰をかける。紙包は膝の上のつてゐる。やがて煖爐の口を開けて、それから紙包を開く。

ヘッダ 「一綴りの原稿を火の中になげこみ、じつと向うを見つめながら咳く」さあテヤ、お前の子供を焼き殺すのだよ。—このちぢぐれ頭奴。「なほ續いて原稿を煖爐の中に投込む」お前とリョーヴボルの中の子供をね。「あと原稿を残らずなげこむ」さあ、焼いてやつた。これで子供を焼いてやつた。

をさしのべる。

テスマン嬢 あゝ、ヘッダさん、この通り悲しい姿でお目にかゝりますよ。さてとう／＼姉も終りました。

ヘッダ それはもうこの姿で御覽の通り、伺つてをります。テスマンから知らせがございました。

テスマン嬢 さう、さういふ約束でした。でもやはりヘッダさんのところへは——若い盛りの人たちの家へは——自分でやつて来てお知らせする方がいゝと思つてね。

ヘッダ それはわざわざ／＼ありがとうございました。

テスマン嬢 まあリーナも、何もこんな時に逝つてくれなくてもよささうなものだにね。せつかくのヘッダさんの家も、今から喪の色を着なければならぬだらうぢやないか。

ヘッダ 「拒むやうに調子をかへて」でもずるぶん静かな御往生だつたのでせう——ねえ。

テスマン嬢 あゝ、それは見事な——おだやかな臨終でした。それに何よりも爲合せだつたのは、ヨエルゲンさんにもう一度會つたことでした。そして心置きなくお暇乞ひが出来たのですよ。——それであの人はまだお歸りでないのだね。

ヘッダ えゝ、さうすぐとは戻られないやうな手紙でした。でもまあおかけ遊ばせな。

テスマン嬢 えゝ、どうもありがたう。ゆつくりして行きたいのですがね。でもどうにも暇がなくなつてね。これから行つて棺に納めて、まあ出来るだけ綺麗にお飾りもしてはなりません。お墓に入れるにしても、みつともないだけにしなくてはね。

ヘッダ わたしで何か出来ることはございませんか。

テスマン嬢 どうして飛んだことです。そんなことにヘッダ・テスマンともある人が手をつけてはなりません。又そんなことに考を向けてもなりません。大事なときですよ——いゝかい。

ヘッダ あゝ、考通りに——何でも行くものでしたらねえ。

テスマン嬢 「前の話を受けて」えゝ、えゝ、それが世の中ですよ。わたしの所では、これからリーナに着せるリンネルを縫はなければならぬのですよ。ところで、こちらでも、きつともう間もなく、縫物の御用がおできだらうね、さうなくてはならないもの。でももつともそれはまるつきりちがつた縫物だらうがね——やれ／＼、ありがたいた事だ。

テスマン、前廊から出てくる。

ヘッダ あゝ、ちやうどいゝ所へ歸つて来て下さつてね。

テスマン おや、ジュリヤノ小母さん、いらつしやい。

ヘッダのところへですか。えゝまあ。

テスマン嬢 あゝ、これからお暇をしようとしてゐたところですよ。お前さん、約束をおしのことばみんな心配しておくれだらうね。

テスマン えゝ、どうもきつと半分は忘れたらうと思ひますよ。あしたの朝又出かけて行きますよ。何しろけふは頭がまるでめぢや／＼だから。てんで考がまとまつて来ないのです。

テスマン嬢 でもヨエルゲンさん、お前、そんな風になつては困りますよ。

テスマン へえ。ぢやあ、どうしろとおつしやるのです。

テスマン嬢 不幸の中でも面白く氣を持つて貰ひたいのですよ。何によらず、物事につけて面白くね。この通りわたしを見ておくれ。

テスマン あゝ成程、あなたはリーナ小母さんのことをおつしやるのですね。

ヘッダ これからお淋しくおなりでせうね。
テスマン嬢 當分はねえ。まあ、でもさう長いことではありますまいよ。死んだリーナの部屋がいつまでも空いたま

まではありますまいよ。

テスマン へえ。ぢやあ誰か入れるおつもりですか。えゝ。

テスマン嬢 いやはや、いつだつて何かしら介抱や世話の爲手を探してゐる不幸な病人はあるものですよ——氣の毒な話だが。

ヘッダ すると本當にさういふ厄介者を背負込むおつもりなの。

テスマン嬢 厄介者。やれ／＼飛んでもない——わたしには厄介者などはなかつたのだよ。

ヘッダ でもまるつきり赤の他人が来たのでは——
テスマン嬢 何さ、病人とはおきに仲よしになりますよ、それにわたしといふ人は、きつと誰かしら世話をしやる人でもなければ、生きて行く効がないのだからね。まあどうか爲合せと——こちらの家にその内きつと小母さんが世話をしあげられるやうな事がお出来だらうからね。

ヘッダ まあどうかわたしたどもの方のおつしやらないで下さい。

テスマン あゝ、えゝおい、お前、われ／＼三人で、どんなに楽しくやつて行けるだらう、今にも——

ヘッダ 今にも——

テスマン 「不安らしく」あゝ、何でもないよ。いや、追々

よくなつてくるだらう。さうしたいものだね。

テスマン嬢 え、え、きつとお二人でお話がおありだらう。「微笑する」それにヘッダさんから、何か用のお話もあるだらう。左様ならさあ、それではリーナのところへ行つてやりませう。「扉口のところでふりかへる」まつたくどうも、考へると不思議だね。今ではリーナはわたしの傍にもゐるし、亡くなつたヨークムにいさんのところへも行つてゐるのだよ。

テスマン え、小母さんさうでせう。え。

テスマン嬢、前廊の扉口から出てゆく。

ヘッダ 「テスマンを冷やかに探るやうな目で追ひながら」どうもこん度の不幸は、小母さんよりはあなたの方が餘程こたへてゐるやうね。

テスマン い、や、不幸のことばかりではないよ。エイレルトのことで心配でたまらないのだ。

ヘッダ 「あわてゝ」又あの人、どうかしたのですか。

テスマン わたしは晝過ぎ早速あの男のところへ行つて、原稿は大丈夫保管してあるといひに行つたのだ。

ヘッダ ——で、お會ひにはならなかつたでせう。

テスマン あゝ。家にはゐなかつた。だがそのことでエルヴステッド夫人に出會つたが、けさこゝに來たといつて

みた。

ヘッダ え、ちやうどお出かけになつたところへ。

テスマン 何でも原稿を引裂いたといつたさうだね。

ヘッダ え、しきりとさういつてゐました。

テスマン ぢやあ、お前だつて原稿を返してやる氣にはなれなかつたらうね。

ヘッダ え、返しませんでしたわ。

テスマン だがわれゝの手にあることだけは話してくれたらうね。

ヘッダ い、え。「あわてゝ」あなた、エルヴステッドさんにはおつしやつて。

テスマン いや、いはなかつた。しかしあの男にはどうしたつていはなければねえ。まあ、あの男もどんなに絶望に陥つて、悔みぬいてゐることだらう。原稿をおよこし、ヘッダ。これからすぐに持つて行つてやらう。紙包をどこへやつた。

ヘッダ 「眩掛椅子に腰をかけたまゝ、冷やかに身じろぎもせず」あれはもうありません。

テスマン 無いと。全體どうして——それは何をいふのだ。

ヘッダ わたし、原稿は焼いてしまひました——初めから終りまで。

テスマン 「驚いて」焼いた。エイレルトの原稿を焼いたと。

ヘッダ そんな聲をなさるなよ。女中が聞くぢやありませんか。

テスマン 焼いた。どうもしかし——いや、いや、いや——とても信じられないことだ。

ヘッダ だつて、さうなんですもの。

テスマン でもヘッダ、お前のしたことは何だと思ふ。それは拾得財物の隠匿横領といふのだよ。え、おい、まあ判事君に聞いてみるがい——きつと説明してくれるだらう。

ヘッダ まあ、その話はなさらない方が、何よりもおためせうよ——判事さんに向つても、その他の誰に向つても。

テスマン しかし全體、どうしてそんな不思議なことをしでかしてくれたのだ。どうしてそんな考を起してくれたのだ。どうしてそんな考にとりつかれたのだ。返事をおし。え、おい。

ヘッダ 「殆ど氣のつかないほどの微笑を抑へて」あなた、わたしはあなたのためにしたのですよ。

テスマン わたしのために。

ヘッダ・ガープレル

聞いた話をなさつたでせう。

テスマン さう——それから。

ヘッダ その時あなたはおつしやつた。この著述のためにあの男がねたましくなつたと。

テスマン いやはや、何もその言葉通りに思つたのではなかつたのに。

ヘッダ それはとにかく、わたしとしては他の人間にあなたの影をふませることは、思ふだけでも我慢が出来なかつたのですよ。

テスマン 「疑ひと喜びの間によるめき乍らそゝくきと」ヘッダ。——お前、それは本當かい。——しかし——しかし——そんな風にしてわたしに對する愛情を見せてくれたことは、つひこれまでになかつたのだよ。え、おい。

ヘッダ で、これもお話しておく方がいゝでせう——かういふときに——「急に話の先を切つて」いやいや、これはジュリヤノ小母さんからお聞きになつた方がいゝでせう。この話はある人がなさるでせう。

テスマン あゝ、これでどうやらお前といふものが分かつたやうだよ、ヘッダ。「兩手を打合せ」いやはや、どうも——こんなことがあらうか。え。

ヘッダ まあ、そんな聲をなさるなよ。女中が聞くわ。

テスマン 「溢れるやうな嬉しきで笑ひ乍ら」女中だ。いや
ヘッダ、お前は本當にいゝ奴だ。女中といつたつて——や
はりベルテぢやないか。こちらから出かけて行つて、ベ
ルテに話してやりたい位だ。

ヘッダ 「絶望したやうに両手をかたく握りしめる」あゝ、
わたし死んぢまふ——とてもこれではやりきれない。

テスマン 何がさ、お前。えゝ。

ヘッダ 「自分を制して冷やかに」何から何まで——馬鹿馬
鹿しくつて——ねえ、ヨエールゲン。

テスマン 馬鹿々々しいつて。わたしがこんなに大喜びを
してゐるのがかい。とにかく——まあベルテには何も
いはない方がよささうだ。

ヘッダ だつて——なせ止すの。

テスマン いや、いや、まだいけない。しかしジュリヤー
ヌ小母さんには何を話さなくても話さなくてはならない。そ
れに初めてヨエールゲンと、わたしの名を呼んでくれたこ
とも。えゝ、おい。やれ、やれ、どんなにジュリヤーヌ小
母さんが喜ぶだらう。どんなに喜ぶだらう。

ヘッダ わたしがエイレルト・リョーヴボルの原稿を焼いた
と聞いてですか——あなたのためにね。

テスマン うん、成程、それはさうだ。原稿の一件はあれ

は勿論誰にも知らせてはならない。だがヘッダ、お前がわ
たしのために夢中してくれたこと——これはどうあつ
てもジュリヤーヌ小母さんに知らさなくてはならない。
とにかく世間でも、若い細君といふものはさういふもの
だか、知りたいくらゐだよ、えゝ。

ヘッダ それもジュリヤーヌ小母さんに、行つて聞いてみた
らいゝでせう。

テスマン うん、折があつたら聞いてみよう。「再び心配
さうな様子になる」いやしかし——しかし原稿は。どう
も考へると恐しい——氣の毒なエイレルトのことは——
やはりどうも。

エルヴステッド夫人、最初の訪問の時と同じ服装で、
帽子とマントをもつて前廊を通つて出てくる。

エルヴステッド夫人 「急いで挨拶をして、非常に興奮した
調子でいふ」あゝヘッダさん。又上がつて済みませぬね。

ヘッダ テヤさん、あなた、どうかして。

テスマン 又リョーヴボル君がどうかしましたか。えゝ。

エルヴステッド夫人 えゝねえ——きつと何か災難が起つ
たのではないかと思つて、氣が氣ではないのですよ。

ヘッダ 「彼女の手を執る」あゝ——あなた、さう思つて。

テスマン やれ、やれ、しかしどうも——奥さん、どうし

てそんな考を起されるのでせうね。

エルヴステッド夫人 でもちやうどわたしが入つて行きま
すと、下宿の人達があの人を噂してゐるのが聞え
たのです。まあ、けふこの町では、あの人についてそれ
は嘘のやうな噂が擴がつてゐるのですよ。

テスマン 左様、どうもねえ。わたしも聞きましたよ。し
かしあの人が眞直に内へ歸つて寝たことは、證人に立つ
てもいゝのですよ。えゝまあ。

ヘッダ で——一體、下宿では何ていつてゐるの。

エルヴステッド夫人 さあわたし、何にもこれといつて取
止めたことはなかつたのですよ。あの人たちも別段委し
いことは知らなかつたのでせうか——それともきつとわ
たしの姿を見たので、口をつぐんでしまつたのでせう。

テスマン 「不安らしくあちこちと歩く」どうか——どう
か、奥さん、あなたの聞きあやまりであればいゝが。

エルヴステッド夫人 いゝえ、いゝえ、たしかにあの人の話
をしてゐたにちがひはないのです。それから何でも、病
院がどうかしたとかいふことも耳に入つたのです。

テスマン 病院。

ヘッダ だつて——そんな筈はないでせう。

エルヴステッド夫人 あゝ、わたしあの人では全く、死ぬ
程の心配をしてしまひましたわ。それからすぐ、あの人
の住居の方へ出かけて聞いて見ました。

ヘッダ でもまあよく、そこまで思ひ切れてね。

エルヴステッド夫人 えゝ、だつて他に爲様はないのでせ
う。何しろ曖昧のまゝではとても我慢が出来さうもない
のですもの。

テスマン でもあの人には會へなかつたでせう。えゝ。

エルヴステッド夫人 えゝ、それに、家の人たちも一向何に
も知つてゐないのです。何しろきのふの晝過ぎからまる
で歸つては來ないといふのです。

テスマン きのふの。まあそんなことをいつてゐるのです
か。

エルヴステッド夫人 あゝ、もうきつと何かいやなことが起
つたにちがひないのですよ——他に考へやうがないので
すもの。

テスマン ねえヘッダ——どうだらう、これからわたしが
町へ行つて、いろ／＼な方面を聞き合せて見たら。

ヘッダ いゝえ、いゝえ——あなたがそんなことにかゝづ
らつてはいけません。
ブラック、帽子を手を持つて、前廊の扉口から入つて

くる。ベルテ、扉を開けてあとを閉める。ブラックはむづかしい顔をして、黙禮する。

テスマン あゝ、判事さん、あなたか。ええ。

ブラック はあ、けふは重大なことをお傳へしなくてはなりません。是非こちらへ上がらなくてはならないやうになつてね。

テスマン どうも察するところ、ジュリヤヌ小母さんからお聞きでしたね。

ブラック 左様、それもあります。

テスマン ねえ。とんだことでしたよ。ええ。

ブラック まあテスマン君、それは取り方次第でね。

テスマン 「不安らしく彼を見る」それとも他に何か事件があるのですか。

ブラック 勿論。

ヘッダ 「緊張して」何か凶事が、あなた。

ブラック それもさ——取り方一つでね、奥さん。

エルヴステッド夫人 「われ知らず興奮して」あゝ、それこそイレルト・リョーヴボルのことですよ。

ブラック 「夫人を下目で見て」奥さん、どうしてさうお思ひです。もう御承知ですか。

エルヴステッド夫人 「まごついて」いゝえ、いゝえ、まるで

何にも、でも——

テスマン しかしどうか話して下さい。

ブラック 「肩をそびやかす」さてそれでは——氣の毒ながら——イレルト・リョーヴボル君は病院へ運ばれてますよ。多分もういけないでせう。

エルヴステッド夫人 「叫ぶ」あゝ、どうしよう、あゝ、どうしよう——

テスマン 病院へ。しかももういけない。

ヘッダ 「思はず」ぢやあ早速に——

エルヴステッド夫人 「泣き乍ら」ヘッダさん、わたしたちは融け合はないうちに別れてしまつたのですよ。

ヘッダ 「さゝやく」でもテヤさん——、テヤさん。

エルヴステッド夫人 「ヘッダにはかまはず」わたしすぐ行かなくては。息のあるうちに一目會はなくては。

ブラック 奥さん、それは駄目ですよ。誰にも會はせはしませんよ。

エルヴステッド夫人 まあ全體どうしたといふのです、おつしやつて下さい。どういふことなのです。

テスマン まさか自分でやりはしまいね——。ええ。

ヘッダ ええ、やつたのですとも——あなた、請合ふわ。

テスマン ヘッダ——どうしてそんなことを——

ブラック 「たえずヘッダに目をつけてみて」奥さん、不幸にして的中しました。

エルヴステッド夫人 あゝ、何て恐しい。テスマン ぢやあ自分で。ええ、おい。

ヘッダ 一發やつたのですね。ブラック 奥さん、又あたりました。

エルヴステッド夫人 「しつかりしようとつとめる」いつのことですの。

ブラック けふ晝すぎ、三時から四時の間に。テスマン でもどうも——全體どこでやつたのです。ええ。

ブラック 「やゝ曖昧に」どこで。左様、どうも——やはり自分の住居でせう。

エルヴステッド夫人 いゝえ、そんなはずはございません。だつてさきほど、六時から七時の間に、わたしはそこへ参つたのですもの。

ブラック はて、それではどこかよそでせう。實ははつきりとは知らないのです。たゞ分かつてゐるのは、人に發見せられたといふことです。何でも發見せられた時には、

あの人はかう胸を——丸で貫いてみました。

エルヴステッド夫人 あゝ、何て恐しいこととせう。そんな風にして死ななくてはならないものか。

ヘッダ 「ブラックに」胸を貫いて。

ブラック 左様、申上げた通り。

ヘッダ ぢやあ、こめかみではなかつたのですね。

ブラック 胸ですよ、奥さん。

ヘッダ ええ、ええ、胸でもまあいいわ。

ブラック へえ、奥さん。ヘッダ 「拒むやうに」なあに——何でもないので、何でもないので。

テスマン で、疵は生命にかゝはるほどだといふのですね。ええ。

ブラック 疵は絶対致命傷です。多分もう駄目でせう。エルヴステッド夫人 ええ、ええ、さうでせうとも。駄目です、もう駄目です。あゝ、ヘッダさん——

テスマン しかし伺ひますが、どこから——それだけのことをお聞きになつた。

ブラック 「そつげなく」巡查の一人から。いつも口を利きつけてゐる男から。

ヘッダ 「一層高く」とうく初めて男らしくやつたのね。

テスマン 「びつくりして」どうも——お前、何をいふの。ヘッダ それでこそ立派だといふのです。

ブラック ふん、奥さん——

テスマン 立派なことだ。え、おい。
エルヴステッド夫人 まあヘッダさん、そんなことがどうして立派なことだといへるでせう。

ヘッダ エイレルト・リョーヴボルさんは自分で綺麗に勘定を済ませたのですよ。あの人はとにかく——當然しなければならぬことを、するだけの勇氣があつたのですよ。

エルヴステッド夫人 い、え、どうもそんなわけで爲たこととは思へませんわ。あの人のしたことは、精神錯亂の結果にちがひないのです。

テスマン 絶望の餘りしたのだよ。
ヘッダ そんなことはありません。それはわたし請合ひます。

エルヴステッド夫人 でもやはりさうですよ。精神錯亂の結果です。わたしどもの原稿を引裂いたとそつくり同じやうに。

ブラック 「はつとして」原稿、といふと著述の原稿ですか。それを、破つたのですか。

エルヴステッド夫人 え、え、ゆうべしたのです。
テスマン 「小聲にさゝやく」おい、ヘッダ、とてもこれは免れられないよ。

ブラック ふん、どうもこれは奇體だな。

テスマン 「部屋の中を歩く」どうもエイレルト君も、こんなことでこの世から去つてしまはうとは。當然名前を後世に傳へるはずのものも残さず——

エルヴステッド夫人 あ、それをもう一度寄せ集めることが出来たとしたら。

テスマン え、それが集められるものならねえ。それはどんなことでもわたしはしますよ。

エルヴステッド夫人 でもテスマンさん、その位出来るでせうよ。

テスマン 何とおつしやる。
エルヴステッド夫人 「服のかくしをさぐる」ほら、これを御覽なさい。わたしあの人が口述するとき使つた、ばらばらのノートを取つておいたのです。

ヘッダ 「一足進む」あ——

テスマン それを奥さん、取つておいたのですね。え、エルヴステッド夫人 え、この通りあるのですよ。それをわたし立つときもつて來たのです。それでかくしに入つてゐたのです——

テスマン あ、どうか見せて下さい。
エルヴステッド夫人 「小さな紙片の束を出す」でもこんな

にごつちやになつてゐて、まるでいたづら書きのやうなものですよ。

テスマン え、まあ、これでひとつ調べて見たら。とにかく二人がかりでやつて見ませうか——

エルヴステッド夫人 え、え、とにかくやつてみませう。
テスマン やれますよ。きつと行きます。それに一生を捧げますよ。

ヘッダ ヨールゲン、あなたの一生を。
テスマン さう。いや、もつと正しくいへば、捧げえられる時間を残らずといはう。わたし自身の蒐集はその間中止にする。ヘッダ——分かつたかい。え、これがエイレルト君の記念に捧げる爲事だよ。

ヘッダ 成程ね。
テスマン そこでエルヴステッドの奥さん、これから二人で一しよにかゝりませう。どうも、過ぎたことをあとから悔んで見たところで、今更役には立たない。え、何でもわれ／＼の心の平和を、どうにかして取返すやうにしようぢやありませんか。さうして——

エルヴステッド夫人 え、え、わたし一生懸命やつてみますわ。

テスマン さう、ぢやあこちらへいらつしやい。早速さつとノートに目を通してみませう。どこへ陣取りませうね。この邊が。いや、いつそあちらの部屋がいゝでせう。判事さん、失禮。さあ、とにかくいらつしやい、奥さん。

エルヴステッド夫人 あ、どうか——これがうまく行くやうだといゝが。
テスマンとエルヴステッド夫人は、奥の部屋に入る。夫人は帽子とマントを取る。二人は吊ランプの下卓に向つて腰をかけ、熱心に書類の取調に没頭する。

ヘッダは暖爐の方へ行き、眩掛椅子にかけの。すぐあとを追つて、ブラックが傍へ寄つてくる。
ヘッダ 「低音に」ねえ、あなた——エイレルト・リョーヴボルさんがしたやうなことを見ると、本當に清々しますわ。

ブラック 清々する。左様さ、とにかくやつてしまへば、あの男も清々したでせう——

ヘッダ い、え、わたしです。とにかくまだ勇氣にまかせて思ひ切つた行動に出る人が、この世の中にあると思ふと清々しますわ。自然に美の光が加はるやうな行爲をね。

ブラック 「ほゝゑむ」ふん——奥さん——

ヘッダ まあわたし、何をあなたがおつしやらうといふのか分かつてゐますわ。それはあなただつて、やはり一種の専門家ですからね。——誰かのやうにねえ。

ブラック 「じつとヘッダを見つめる」エイレルト・リョーダ
ボル君はあなたにとつて、あなたが御自身に認める以上に大切な人でしたらう。それともわたしの思ひちがひかな。

ヘッダ さういふおたづねには決してお答へいたしませんよ。たゞわたしの知つてゐますことは、エイレルト・リョーダボルさんに、あの人の考通りに一生を送るだけの勇氣のあつたといふことです。しかもその上あの通り——偉大さが、いゝえ、その上美があるともいへるでせう、とにかく人生の饗宴から——人に先立つて飛出してゆく力も意志もあつたのですよ。

ブラック 奥さん、どうもお氣の毒ですが——しかし折角のあなたの美しい幻を、いやでも破らなければなりません。ヘッダ 幻ですと。

ブラック それとてもどの道破れるに極つたものですがね。ヘッダ で——それはどういふこと。

ブラック あの人は自分から——覺悟の自殺をしたのではありませんよ。

ヘッダ 覺悟でない。

ブラック えゝ。エイレルト・リョーダボル君の事件は、只今申上げたやうなものではまるでないのですよ。

ヘッダ 「緊張して」何かかくしていらつしやるの。何です、それは。

ブラック エルヴステッド夫人が氣の毒ですから、ちよつとばかり潤飾してみたのですよ。

ヘッダ するとどういふのです。

ブラック 第一にあの人は、とうに死んでしまつてゐるので

ヘッダ 病院で。

ブラック 左様、二度と意識を回復することなしにね。ヘッダ まだ何かかくしていらつしやるの。

ブラック 事件はあの人の住居で起つたではありません。ヘッダ だつてそれはどの道同じではありませんか。

ブラック さうばかりでもないのですよ、それではいひますがね——リョーダボル君が丸たまに當つて斃れてゐたのは、チアナ嬢の居間でしたよ。

ヘッダ 「ふと立上がらうとして、腰を落ちつける」そんなはずがあるのですか。そんなところへけふ又行くわけがない。

ブラック ところがけふ晝すぎそこにゐたのですね。何か取られたものを取りかへしに來たのだといつたさうです。

ヘッダ あゝ——ぢやあやはり——

ブラック わたしはつつきりそれが原稿のことだと思つてゐました。しかしそれは自分で引裂いて無くしてしまつたのだといふでせう。すると或は何か懐中物のやうなものであつたかも知れない。

ヘッダ きつとさうでせう——で、そのまゝそこに——そこに、ではゐたのですね。

ブラック 左様そこに。胸のかくしに丸たまをこめたピストルを入れてね。丸は急所に當つたのです。

ヘッダ 胸にね——でせう。

ブラック いゝや——それが下腹部に當つたのですよ。ヘッダ 「嫌惡の表情で彼を見る」それまでも。あゝ、おわらひ草な、愚劣な事ばかり。こちらの思つた一々が、呪ひのやうにかはるのなもの。

ブラック まだもう一つありますよ。これも愚劣な事の仲間

ヘッダ それは。

ブラック 持つてゐたピストルです——

ヘッダ 「息をつめて」で。それがどうして。

ブラック どうも盗みものにちがひないのです。ヘッダ 「飛上がる」盗みもの。それはちがひます。そんなことはありません。

ブラック どうも他に考へやうがない。盗んだものにちがひない——。しい。

テスマンとエルヴステッド夫人が立上かつて、奥の部屋の方から客間の方へ出て來る。

テスマン 「両手に書類をもつて」おい、ヘッダ——どうもあそこの吊ランプの下で物を見るなんて、とても出來たことではないよ。えゝおい。

ヘッダ えゝ、さうでせう。

テスマン お前の卓をちよつと借りてもいゝかい。えゝ。

ヘッダ どうぞ。「早口に」まあお待ちなさい。片付けるから。

テスマン あゝいや、そんなことはいらぬよ。十分場所があるから。

ヘッダ いゝえ。いゝえ。まあ片付けるといふのにねえ——それからこれはそつくりピアノの上のせませすわ。それ

ヘッダは樂譜の下になつてゐるものを書棚の下から出し、その上になほ外の二三枚の譜をのせて、それを残らず奥の部屋の左手に運ぶ。テスマン、寫字卓の上にノートの紙片をおき、隅の卓からランプをこちへ持つてくる、テスマンとエルヴステッド夫人は腰をかけて又爲事にかゝる。

ヘッダ 「戻つてくる。エルヴステッド夫人のうしろでかくその髪にさはる」ねえテヤさん、エイレルト・リョーヴボルの記念碑はうまく建ちさうですか。

エルヴステッド夫人 「意氣沮喪したやうに相手を見上げる」まあ、まあ——これを整理するのは全く大變な爲事でせうよ。

テスマン きつとやるよ。どんなことがあつてもな。それに他人の書いたものを整理するといふことは——たしかにわたしに適してゐる。

ヘッダ、煖爐の方へ行き、床几の一つに腰をおろす。ブラックはその傍の掛椅子に體をさゝへながら、女の上に體を屈める。

ヘッダ 「さゝやく」ピストルがどうしたのですつて。
ブラック 「小聲で」あの人が盗んだに相違ないのです。
ヘッダ なぜ盗んだときめたのです。

ブラック 奥さん、他にどうしたつて説明のしやうがないのですよ。

ヘッダ ええ。さう。
ブラック 「かくく彼女を見る」リョーヴボル君は勿論けさこちらへ伺つたでせう。ねえ。

ヘッダ ええ。
ブラック あなたと二人きりでしたか。

ヘッダ ええ、しばらくの間。
ブラック あの人のゐる間、あなたは部屋をお出になりませんでしたか。

ヘッダ ええ。
ブラック まあ考へてみて下さい。ちよいとの間でも部屋の外へ出られはしませんでしたか。

ヘッダ さうね、ちよいとの間位は——表の部屋へ出たかも知れませんか。
ブラック で、その間ピストルの箱はどこにありました。

ヘッダ それはあの下に——
ブラック ええ、ヘッダさん。
ヘッダ 箱はあその卓の上にあります。

ブラック その後二挺ともあるかどうか調べてみましたか。
ヘッダ いゝえ。

ブラック その必要もないのです。リョーヴボル君が身につけてゐたピストルを、わたしは見たのです。見ると早速、きのふから見覚えのある品だといふことが分かりました。いや、前からもね。

ヘッダ それをお持ちですか。
ブラック いや、警察にあります。

ヘッダ 何だつて警察はピストルを押へておくのでせう。
ブラック 所有者を見つける手懸りにするのですね。

ヘッダ あなた、それが見つけられると思つて。
ブラック 「後からヘッダの方をのぞき込んでさゝやく」いや、ヘッダ・ガープレルさん、わたしが口を開かない限りは——分かりませんよ。

ヘッダ 「相手を恐るゝ見る」で、あなたがもし口を開かずにほないとすると——それはどうなるのです。

ブラック 「肩をそびやかす」まだしかし逃道はありますよ。ピストルは盗まれましたといへばね。

ヘッダ 「はつきりと」その位なら死にます。
ブラック 「ほゝゑむ」よくいふ口です。だが、やるものはない。

ヘッダ 「それに答へることなしに」で、もしピストルが盗まれたものでないとしたら。そして所有者が発見された

としたら——するとどうなるの。

ブラック 左様、ヘッダさん——すると世間の問題が起ります。

ヘッダ 問題か。
ブラック 左様さ。問題がね——それは死ぬほど嫌ひだと仰る奴がね。勿論あなたは審問を受けなくてはならん。

あなたもチアナ嬢もね。あの女が無論一切の事情を陳述するでせう。それが過失であつたか自殺であつたかね。全體女をおどすつもりでピストルをかくしから出さうとしたのかどうか。その拍子に偶然引金が外れたのかどうか。それともあの女がピストルを手からもぎとつて射殺しておいて、又もとのかくしにピストルを入れたものか

どうか。ずゑぶんそんなこともやりかねないのです。何しろチアナ嬢なるものは、一筋縄で行かない、したゝかものなのだから。

ヘッダ でもそんないやらしいことなんか、まるでわたしには何の関係もないのですわ。

ブラック ええ。しかしあなたもかういふ質問には答へなければなりませんぞ。なぜエイレルト・リョーヴボルにピストルをやつたかといふ。で、彼にピストルを與へたといふ事實から、どういふ結論が引出されるでせうか。

ヘッダ 「うなだれる」全くね。それまではわたしも考へなかつた。

ブラック で、まあ爲合せとわたしが口をつぐんでゐる限り危険はないですね。

ヘッダ 「彼を見上げる」ぢやあ判事さま、わたしはあなたの手の中のものなんですね。これから煮て食はうと焼いて食はうと、あなたの思ひのまゝなんですね。

ブラック 「一層聲をひそめてさゝやきながら」まあ、まあ、ヘッダさん——わたしを信じて下さい——わたしは局面を悪用するものではありませんよ。

ヘッダ でもやはりあなたの思ふまゝですわ、あなたの註文や希望次第なのですわ。奴隷なのですわ。やはり奴隷なのだ。「烈しい勢ひで立上がる」いゝえ——とても我慢が出来ない。どうしたつて出来るものか。

ブラック 「半ば嘲るやうにヘッダを見る」まあ、人間は不可抗力にはいつか馴れるやうになるものですよ。

ヘッダ 「その目つきに答へて」えゝ、さうでせうよ。寫字卓の方へ行きかける。

ヘッダ 「思はず知らず微笑の浮ぶのを抑へて、テスマンの調子を真似る」さて。ヨールゲンさん、どんな具合ですね。えゝ。

テスマン いやはや、前途遼遠だ。とにかくどの道何箇月もかゝる覺悟でやるのだね。

ヘッダ 「前の通り口まね」えゝおい。「かゝるく両手をエルヴステッド夫人の髪、毛の間に突込む」ねえ、テヤさん、不思議には思はなくつて。こん度はあなたがテスマンと並んで腰をかけて——ちやうどそつくり、前にエイレルト・リョーヴボルさんと一しよにゐた時のやうにやつてるのでせう。

エルヴステッド夫人 あゝ、本當に、あなたのところの御主人にも、わたしの力で魂を吹込んで上げることが出来るやうだとね。

ヘッダ まあ、そんなことになるでせうよ——そのうちにはね。

テスマン うん、ヘッダ、お前もさう思ふかい——全くどうも、今からそんな氣がしてゐるのだよ。だがまあ、お前は判事さんの方へ行つてゐるがいゝ。

ヘッダ お二人のお爲事には、わたしまるでお役に立たなくつて。

テスマン うん、まるでだめだ。「顔を向ける」ねえ、判事さん、將來はどうか君にヘッダのお相手を願ふことにしたいものですな。

ブラック 「ヘッダをちらりと見て」どうもそれは意外な満足といふものだね。

ヘッダ どうもありがたう。でもわたし今晚は疲れてゐますわ。しばらくあちらのソファアの上で横になりたいの。

テスマン あゝ、さうおしとも。えゝ。
ヘッダ、奥の部屋へ行き、後にカーテンを引く。短い間。ふとピアノで烈しい舞踏曲を弾く音が聞える。

エルヴステッド夫人 「椅子から立上がる」おや——どうしたのでせう。

テスマン 「扉口へ駆けよる」まあヘッダや——けふだけは舞踏曲はお止しよ。どうかリーナ小母さんのことを考へておくれ。それからエイレルト君のことだつて。

ヘッダ 「カーテンの間に首をつき出す」それからジュリヤリーナ小母さんのこともね。それから世間の人達のこともね。——わたし、すぐ静かになりますわ。
又カーテンをしめる。

テスマン 「寫字卓の前」どうもこんな面倒な爲事をあれの前で見せるのはきつとよくないのだ。どうですな——エルヴステッドさん——ジュリヤリーナ小母さんの一問をお借りなさいな。するとわたしの方から晩方出かけて行きます。さうしたらあちらで爲事をやることにしま

せう。えゝ。

エルヴステッド夫人 えゝ。それが一番よろしいやうね——

ヘッダ 「奥の部屋から」あなた、おつしやつてゐることがよく聞えますよ。でも、それではわたし、晩方こゝで何をしてみればいゝのです。

テスマン 「紙をめくる」いや、判事さんがきつとその代り、親切にたづねてくれられるだらう。

ブラック 「眩掛椅子にかけながら元氣な聲で呼ぶ」奥さん、結構——毎晩でも上がりますよ。二人こゝで愉快に話をしませうよ。

ヘッダ 「爽やかな高い聲で」えゝ、判事さん、本望でせう。鳥籠の中の唯一羽の雄鶏ですからね——

奥でピストルの音。テスマン、エルヴステッド夫人及びブラック、皆思はず飛上がる。

テスマン あゝ、又ピストルをいぢつてゐる。

カーテンをわきへよせて中へかけ込む。エルヴステッド夫人も同時に入る。ヘッダ、ソファアの上に生氣なく横たはつてゐるのが見える。動搖と叫喚。ベルテ、取り亂した様子で右手から出てくる。

テスマン 「ブラックに呼びかける」自殺だ。こめかみを射

つた。え、おい。
ブラック「眩掛椅子の上で半ば氣を失つたやうに」どうも驚いたなあ——かういふことを人はするものではないのだが。

小さいイヨルフ (三幕)

人物

- アルフレッド・アルメルス 地主で著述家、もと教師
- リ ー タ その妻
- イ ヨ ル フ アルメルス夫婦の子供、九つ
- アスタ・アルメルス アルフレッドの異母妹
- ポ ル ハ イ ム 土木技師
- 鼠取りばあさん

事件は首都から二三哩の峡灣にのぞむアルメルス家の所有地で行はれる。

第一幕

風雅な、趣味深く作られた庭つきの離室。家具、花物、葉物の鉢類いろ／＼。後景に開け放した玻璃扉、ヴェランダへ通ふ。峡灣の廣い見晴し。遠景に森の

小さいイヨルフ

やうにこんもりした山の背。部屋の兩方の横壁に扉が一つづつ。その中右側の扉は兩開きになつてゐて、ずつと奥にある。右手前寄りにソファ一脚、つくりつけでない蒲團と掛物かのかつてゐる。ソファの角に二三脚の椅子と小卓一つ。左手前寄りに、それよりも大きな卓と眩掛椅子二三脚。卓の上に蓋を開けた手提鞆。夏の早朝で、日があつく照つてゐる。

リータ、卓の傍に立つ。右手へ背中を向けて鞆の中のものを出してゐる。リータは三十格好、器量のいい、可なり大がらな、むつちりと肉付のいい、色の白い、明るい金髪の人である。薄色の朝着を着てゐる。

やゝしばらくして、アスタ・アルメルスが右手の扉から入つて来る。薄い茶色の夏服に帽子、ジャケツ、日傘を携へてゐる。小脇に大きな紙ばさみに鏡をかつたのを抱へてゐる。アスタは瘦形の中肉中背、眞黒な髪のに、深い、眞面目な目付をしてゐる。二十五歳。

アスタ「扉口で」リータさん、おはやうございます。

四三七

リータ 「振り向いてうなづく」おや——アスタさん、あなたでしたの。まあこんなに早く町の方から。ずつとわたし共の方へ。

アスタ 「持物を取り、扉の傍の椅子の上に置く」どうも落着いてゐられないのですからね。何でもけふはこちらへ上がつて、小さいイヨルフちゃん顔を見なければゐられないやうな気がしたのですよ。それからあなたにもね。「紙ばさみをソファの前の小卓に置く」ですからわたし、さつそく汽船に乗つてやつて来たのですよ。

リータ 「笑ひかける」そこで船の上ではきつとどなたか仲よしのお友達にお會ひになつたといふわけですわね。むろん、ほんの偶然ですがね。

アスタ 「落着いて」いゝえ——どなたも知り合ひの方には。「鞆に目をつける」でも、リータさん——それはどうしたといふのですの。

リータ 「やはり鞆のものを出しながら」うちのアルフレッドの旅行鞆ですわ。あなた覚えていらつしやらなくつて。アスタ 「さもうれしきうに傍へよつて来る」え。にいさんはお歸りになつたのですか。

リータ え、それが、どうですわ——ゆうべ夜汽車でひよつこり歸つて来たのですよ。

アスタ おやあやはり蟲が知らせたといふのでせうね。つひ来たくなつたのですよ。——で、まるつきり前ぶれはなかつたのですか。はがき一本來なかつたのですか。

リータ それはたゞの一行だつて。

アスタ 電報も打たなかつたのですか。

リータ それはね——着く一時間前に打つて來ましたわ。いたつて短い、そつけないのがね。「笑ふ」まあアスタさん、あの人らしいとはお思ひにならなくつて。

アスタ まつたくね。何でも御自分一人で承知してゐるのですものね。

リータ でもそれだけまあ、顔を見るとよけいにうれしかつたのですよ。

アスタ え、それはさうでせうつて。

リータ 何しろ思つてゐたよりは、まる二週間も早かつたのですよ。

アスタ で、具合はいゝやうですか。御機嫌は悪くはなかつて。

リータ むろんそれは疲れてゐるやうでしたわ。どうして、随分疲れたでせうよ。何しろ氣の毒な、道中大抵歩きとほしたといひますの。

アスタ それに高山の空氣は随分あの人にはこたへたでせうからね。

リータ いゝえ——そんなことは決してないでせうよ。一度も咳をする様子がありませんの。

アスタ それ、ごらんなさい。するとやはりお醫者さまが旅行をすゝめて下さつたのは、よかつたのでせう。

リータ まあ、どうやらそれもすましてしまへばね——。でもアスタさん、その代りそこまでの辛抱といつたらなかつたのでよ。それを人に話して見やうもないでせう。それからあなただつて、ごくたまにしかたづねて來て下さらなかつたでせう——

アスタ 全くそれは申譯がありませんでしたわね。でもね——

リータ まあさ、まあさ——だつてあなたの學校は町におありなのですね。「微笑する」それにあの技師先生だつて——やはり旅行に出ていらしたでせう。

アスタ まあリータさん、そんなことなんか——

う——ところでわたしがどの位アルフレッドの歸りを待ちこがれてゐたか、とてもおわかりにはなりません。そのがらんとした手持なさ。その無氣味な寂しさ。あゝいやだ——まるでお葬ひでも出たあとの家のやうでしたわ。

アスタ おや、まあ——だつてたつた六週間——七週間のことではありませんか。

リータ え、でも考へて下さい。アルフレッドはこれまでに、つひぞわたしの傍をはなれたことはなかつたのですよ。それはたゞの一日だつて。この十年の間に一度だつて——

アスタ え、でも、ですからよけい今年あたりは、ちよいとでも外へ出て見るにはいゝ潮時だつたと思ふのですよ。一體毎年夏ぐらゐは山へ出かけるとよかつたのです。まあ何でもやつて見るとよかつたのですよ。

リータ 「軽い微笑を含んで」え、それはまあおつしやるとほりよ。わたしが——あなたぐらゐ物の分かつた女であつたら、むろんとうにあの人を行かせてゐたでせうよ。でもね、アスタさん、どうもわたしにはそれまでの思ひ切りがつかなくつたのですよ。もう何ですか、二度と戻つて來ないやうな気がしたのですよ。あなたにはさういふ

心持はお分かりにならなくて。

アスタ ええ、でもそれは多分わたしに、だあれも無くす心配のある人がないからでせう。

リータ 「意地の悪い微笑を含んで」あなた、ほんたうに一人もないの——

アスタ まあ、自分ではないつもりですわ。「話の先を換へて」それはさうとリータさん——にいさんはどこにいらつしやるの。お休みですか。

リータ とんでもない。どうして、けふだつてさつそく、いつもの通り早いお目覚めでした。

アスタ へえ、するとさう大してくたびれておいでになるわけでもないのね。

リータ いえ、それはゆうべはね。歸つて来たばかりの時はね。でもいまはもう自分の部屋で、一時間餘りもイヨルフを傍に引きつけてゐるのですよ。

アスタ 可哀さうにあのちひやな青い子が。きつとまた學課で立てつづけにいぢめられることでせうね。

リータ 「肩を聳かして」さあね、いづれアルフレッドはさうするつもりでせう。

アスタ ええ、でもリータさん、それをさうさせないやうに、あなたがなさらなくてはなりませんまい。

リータ 「やゝいら立ち氣味に」いえ、どうして——とて

もそんな口出しはわたしには駄目ですよ。さういふことはアルフレッドの方が、わたしなんかよりはつとよく心得てゐる筈ですもの。——それに一體イヨルフに何がさせられます。あの子は當り前の子供のやうに——そこらを駈け歩いて、遊びまはるなんといふことは出来ないのですよ。

アスタ 「はつきりと」そのことはわたし、にいさんに話して見ますわ。

リータ どうぞよろしくね。おや、そこへ出て來ましたわ——

アルフレッド・アルメルス、夏服、イヨルフの手を引いて左手の扉口から出て來る。瘦せた、きやしやな肉付の、三十六七歳の男子である。柔和な目をしてゐる。髪の手口は褐色で、薄い。その顔つきに眞面目な、ものを深く考へる癖が現れてゐる。——イヨルフは金モールの飾と、軍隊風の金ボタンのついた軍服のやうなものを着てゐる。びつこをひいて、左の腕で松葉杖にすがつて歩いてゐる。片足跛なのである。なりも小さく、病身らしく見えるが、きれいな利口さうな目をしてゐる。

アルメルス 「イヨルフの手をはなして、うれしそうにアスタの方へ歩いて行つて、兩手を差しよべる」あゝ、お前、

アスタ。お前が来てくれたかい。かうさつそく會へようとは思はなかつたよ。

アスタ どうも伺はなくてはならないやうな氣がしたものですから——。ほんとによく歸つていらつしやいました。

アルメルス 「妹の兩手を振る」うん、よく來てくれた。

リータ どうして、元氣なものでせう。

アスタ 「あからめもしず兄の顔を見つめる」すてきよ。全くすてきですよ。どうして、明るい生々した目つきにおなりになつて。きつと旅行中、澤山お書きになつたこととせうね。「うれしいのぼせ氣味に」いよ／＼あの本も完成でせう、にいさん。

アルメルス 「肩を聳かす」あの本——いやはや、あれはアスタ ええ、あれはもう一旦手をおつけにさへなれば、すぐすらくと出來上がつてしまふだらうと思つてゐたのですよ。

アルメルス わたしもやはりさう思つてゐた。ところがどうもまるで様子が違つてしまつたよ。實はあの本はたゞの一行も書かずにしまつたよ。

アスタ 一行も——

リータ さうなのですよ。わたしじつは、あの原稿紙がまるつきり手つかずに、そのまゝ鞆の中にあるのでびつくりしたのです。

アスタ でもにいさん、するとその間すつと何をしていらしたのですか。

アルメルス 「微笑しながら」なあにわたしはそれからそれと考へてばかり、たゞもう考へてばかりゐたのさ——

リータ 「夫の肩に腕をかける」で、家に残つてゐるものゝことも少しはお考へになつて。

アルメルス それはきまつてゐるさ。どうして始終考へたよ。それは毎日のやうに。

リータ 「肩にのせた腕を放す」まあ、それでやつとせいせいしましたわ。

アスタ でも本にはまるで手をおつけにならなかつたの。そのくせにいさんは、随分愉快さうに、満足しきつた御様子ではありませんか。いつものにいさんとは違ふやうね。お爲事がうまく行かない時のにいさんの御様子とはね。

アルメルス 成程、さう思ふのは尤もだよ。實はこれまで

のわたしは随分ばかであつたのだ。考へるといふことが人間に一番大事なことなのだ。紙に書くなんといふことはつまらないことだ。

アスタ 「のぼせて」つまらないことですよつて——

リータ 「笑ふ」あなた、どうかしていらつしやるわ。

イヨルフ 「はじめに父親を見上げる」あらおとうさま——

—おとうさまのお書きになるものは立派なものですよ。

アルメルス 「微笑しながら子供の髪の毛をなで上げる」

さうとも、お前がさういふならきつとそれに違ひない——

—だがね——もつと立派にやるものが、わたしのあとから出て来るのだよ。

イヨルフ それは一體どんな人。ねえ、話して下さいよ。

アルメルス まあお待ち。やがてその人がやつて来ればわかるだらうから。

イヨルフ そしたらおとうさまはどうなさるの。

アルメルス 「真面目に」さうしたらまた山へ出かけるのさ。

リータ まああなた、何ですわねえ、つまらないことを。

アルメルス ——山のとつぺんの、大きな見晴しのある所

までのぼるのだ。

イヨルフ ねえ、おとうさま、僕もいまに丈夫になつたら

連れて行つて貰へるの。

アルメルス 「痛ましい心持を誘はれながら」あゝ、あゝ——

—多分。

イヨルフ あゝ僕、山へのぼれたらさぞいゝだらうなあ。

アスタ 「話の向きを換へて」でもイヨルフちゃん、けふは

いゝ服を着ましたね。

イヨルフ をばさま、いゝでせう。

アスタ いゝともさ。きつとおとうさまのお迎へに新しい

服を着せて頂いたのでせう。

イヨルフ えゝ僕、おかあさまにお願ひしたのですよ。僕、

おとうさまにかういふ服を着たところを、お目にかけて

かつたのですよ。

アルメルス 「小聲でリータに」こんな服を坊やにこしら

へてやらなければいゝになあ。

リータ 「同じく小聲で」でもしよつちゆうせがんでゐた

のですもの。何でもこしらへてくれといひましてね。ど

うしても承知しないのですの。

イヨルフ さう、それからね、おとうさま——ポルハイム

さんが僕に弓を買つて下さいましたよ。そして弓を射る

ことも教へて下さいました。

アルメルス それだ、イヨルフ、お前にはさういふことが

一番いゝのだよ。

イヨルフ それからこんどの次にをぢさんがいらしつた

ら、僕、泳ぎを教へて下さいつて頼むんです。

アルメルス 泳ぎを、どうしてまたそれをしたくなつたの

だ。

イヨルフ えゝ、でも——濱の方の子供は誰だつて泳げる

んでせう。僕だけが泳げないのだから。

アルメルス 「感動して子供を腕に抱きしめる」まあ、何で

もすきなことを習ふがいゝ。何でも自分にやりたいと思

ふことをな。

イヨルフ えゝ、おとうさま、すると僕、何を一番やりた

がつてゐるか知つてゐますか。

アルメルス うゝん。ではいつてごらん。

イヨルフ 僕、一番、軍人になる稽古がして見たいんです。

アルメルス いゝえ坊や、そんなことよりもずつといゝこ

とが幾らでもあるのだよ。

イヨルフ でも僕、大きくなつたらどうしても軍人になる

のです。それはおとうさまだつてよく知つてゐるでせう。

アルメルス 「両手を握りしめる」よし、よし。まあ追々に

ね——

アスタ 「卓の左手に腰をおろす」イヨルフちゃん、こゝへ

いらつしやい——お話があるから。

イヨルフ 「アスタの傍へ寄る」なあに、をばさま。

アスタ どう、イヨルフちゃん、をばさんは鼠取りばあさ

んに會ひましたよ。

イヨルフ え、鼠取りばあさんに會つたんだつて。あゝを

ばさま、うまい事ばかりいつてゐるんだ。

アスタ いゝえ、ほんたうの話ですよ。きのふわたしは會

つたのですよ。

イヨルフ ぢやあ、どこで會つたの。

アスタ 町を出はぐれた往來でね。

アルメルス わたしもやはりどこか田舎で出會つたよ。

リータ 「ツファーに腰をかけてゐて」するとイヨルフ、こ

んどはわたし達が出會ふ番になるのだよ。

イヨルフ ねえ、をばさま、鼠取りばあさんて、随分へん

な名ですな。

アスタ それは何でも、そのおばあさんが行く先々で、一

疋残らず鼠を追出してくれるといふので、さういふ名が

ついたのですよ。

アルメルス 何でもほんたうの名はワルクとかいふのださ

うだ。

イヨルフ ワルクといふと、狼といふことではありません

か。

アルメルス 「イヨルフの頭をなでる」おやお前、それまで知つてゐるのかい。

イヨルフ 「考へ深く」するとやはり、そのばあさんが夜は人に化けるといふのはほんたうなんですね。ねえ、おとらさま。

アルメルス いや、そんなことはあるまい。——さあそこらでお庭へ出て、少し遊んでお出でなさい。

イヨルフ 本を持つて行く方がいゝのでせう。

アルメルス いゝや——これからはもう本はいりません。それよりか濱へ出て、ほかの子供たちとお遊びなさい。

イヨルフ 「おづ／＼と」いゝえ、おとらさま、僕けふは、みんなのゐる方へ行きたくないのです。

アルメルス なせさ。

イヨルフ だつて僕、こんな服を着てゐるんですもの。

アルメルス 「額に皺をよせる」みんながお前にからかふのかい——きれいな服を着てゐると。

イヨルフ 「その鋒先を避けるやうに」いゝえ、そんな勇氣があるのですか。そんなことをいへば、僕ぶつてやります。

アルメルス ふん、成程——するとなせだね——

イヨルフ あの子供たちは随分失敬なんですよ。それで僕に、お前なんかどうして軍人になれるもんかといふのです。

アルメルス 「苦しい心持をおさへて」でもなぜそんなことをいふと思ふ。

イヨルフ きつと僕のことか羨しいのでせう。だつておとらさま、あの子供たちは随分貧乏で、はだして歩いてゐるのですもの。

アルメルス 「聲をつまらせて小聲で」あゝ、リータ——何を見ても胸が裂けるやうだ。

リータ 「立上がりながら、なだめるやうに」まあ、あなた、いゝぢやありませんか——

アルメルス 「おどすやうに」その小僧どもに、この濱で主人と仰ぐものの誰だといふことを、思ひ知らせてやらなければならぬ。

アスタ 「耳を立てながら」扉を叩くやうですよ。

イヨルフ きつとボルハイムさんでせう。

リータ お入んなさい。

鼠取りばあさん、そつと、ぬすむやうに右手の扉口から入つて来る。小さな瘦せぎすな、しなびきつたばあさんで、眞白な髪の毛に、鋭い射るやうな目を

してゐる。古代フランク風の、花の模様のついた着物に、黒い肩掛をかけ、同じく黒い、先の尖つた頭巾をかぶり、女物の外套を着てゐる。手に大きな赤い雨傘を携へて、腕に紐で黒い袋をぶら下げてゐる。

イヨルフ 「アスタの着物をひつばつて小聲で」をばさま。きつとあれがさうでせう。

鼠取りばあさん 「扉口でお辭儀をする」ごめん下さいませ——こちらさまにはいたづらものはをりませんかな。

アルメルス うちに。いゝや、ゐないやうだ。

鼠取りばあさん もしをりますやうなら、どうぞわたくしにいたづらものめを追はせて頂きたうございます。

リータ はい／＼分かりました。でもさういふものはうちには生憎ありませんよ。

鼠取りばあさん やれ／＼、それは残念なことだ。ちやうどこちらの方へ廻つてまゐりましたものですから。さていつまたこの邊へはまゐりますことやら——やれ／＼、どうもくたびれた。

アルメルス 「一脚の椅子を指さす」全くくたびれてゐるやうだね。

鼠取りばあさん 全體、たかゞあのひどく憎まれた上に追ひまはされる、可哀さうないたづらものめを、助け出し

てやるだけの爲事に、何も疲れるの、くたびれるのといふことはない筈でございます。が、さてやはりなかく骨が折れますよ。

リータ まあ腰をかけて、少し休んでお出でなさいな。

鼠取りばあさん まことに有難うございます。「扉とソファの間の椅子にかける」何しろ夜つびで、外で爲事にかかつてをりましたものですから。

アルメルス はてね——さうかい。

鼠取りばあさん へい、あちらの島の方でな。「くつ／＼笑ひをして」嘘と思召すかは知りませんが——島の人達からお呼出しをうけてね。それには皆、初めはお氣が進まないやうでしたが、やはりどうもほかに爲様がないのでな。何しろにがいお薬を召上がらなくてはならなかつたんでございますよ。「イヨルフの顔を見てうなづく」

ねえお坊ちやま、にがいお薬をな。にがい林檎をな。

イヨルフ 「こは／＼、それでも我知らずに」なぜそんなものを——

鼠取りばあさん へえ。

イヨルフ たべなくてはならないの。

鼠取りばあさん それはあなた、もうなんにも食べるものがなくなつたからでございますよ。大鼠小鼠のをります

ために。お察しがつきませう、お坊ちやまにも。
リータ やれ〜。気の毒な〜そんなに澤山あるのですか。

鼠取りばあさん え〜、それこそぞろ〜、うよ〜してをります。「得意らしく笑ふ」それはもう、ながの一夜さ、寢床の上に這ひ上がる、這ひこむ始末でございませう。乳の罐にもとびこみます。床の上を縦横十文字にこそ〜、ちよこ〜、かけずりまはります。

イヨルフ 「アスタに向ひ小聲で」をばさま、僕そんな所へ行くのはきらひです。

鼠取りばあさん ところがそこへわたしはまゐりましたのさ〜もう一人の連れと一緒に。さてわたし共は一足残らず連れ出しました。可哀い、いたづらものをな。二人して残らず片づけてしまったのでございませう。

イヨルフ 「叫び聲を立て〜」おとうさま〜あれ、あれ。リータ まあさ、坊や。

アルメルス どうしたといふのだ。
イヨルフ 「指さしながら」あの袋の中で何かむく〜動いてゐるでせう。

リータ 「左手の方へ駆けて行きながら叫ぶ」あら。あなた、追ひ出して下さいよ。

鼠取りばあさん 「笑ふ」やれまあ奥さま、こんな小僧なんか、こはいことはございませんよ。

アルメルス 一體何だ、それは。
鼠取りばあさん さてはて、ほんのちんころでございませう。「袋の紐を解く」これ〜、暗がりから出てお出で、わたしの大事なお友達。

ひらべつたい、眞黒な鼻をした小僧が袋から頭を出す。

鼠取りばあさん 「イヨルフの方にうなづいて目くばせをする」さあずつと寄つていらつしやい、負傷兵のお坊ちやま。かみつきはしませんよ。さあいらつしやい。いらつしやい。

イヨルフ 「アスタに縋りつく」いやだ。僕はきらひだ。

鼠取りばあさん いかゞです、お坊ちやま、やさしい、かはいらしい顔をしてゐるではありませんか。

イヨルフ 「びつくりした顔をして犬を指さす」それがかい。

鼠取りばあさん はい、さやう。

イヨルフ 「あからめせず犬を見つめたまゝ、聞えないほどの聲で」どうして、僕、こんなおそろしい顔をしたやつを見たことがないよ。

鼠取りばあさん 「袋の口をしめる」はて、ぢきに馴れますよ。馴れますよ。

イヨルフ 「我知らず歩いて行き、ずつと傍までよつて、こは〜袋をさする」うん〜うん、やはり随分〜。随分可哀いねえ。

鼠取りばあさん 「勿體らしく」何しろ坊ちやま、こいつはいま大變くたびれて弱つてゐるところなのです。それは全くくたびれてゐるのですよ。「アルメルスの方を見る」何しろ旦那さま、無理はございませんよ、え〜、何しろ骨のをれるぐる〜舞を、一ばんやつて来たのでございませうから。

アルメルス 一體ぐる〜舞といふのはどんなことだね。

鼠取りばあさん おびき出しのぐる〜舞で。

アルメルス は〜あ〜鼠をおびき出すのだね。それを犬がやるのだね。
鼠取りばあさん 「うなづく」このちんころとわたしとで。二人一緒にやるのでございませう。なあにごく造作もない爲事ですよ。とにかく、見たところではね。犬がほんの紐を首輪にかけます。それからわたしが犬をひいて三度家を廻ります。さてわたしが口笛を吹きます。その聲を聞きつけて、鼠どもは穴蔵から這上がつてまゐります。

屋根裏から下りてまゐります。壁の穴からぬけ出してまゐります。〜それは可哀い小僧どもが残らず集まつてまゐります。

イヨルフ すると犬が噛みころすの。

鼠取りばあさん やれ〜とんでもない、どういたしまして。犬とわたしはそれから船に乗るのです。するとみんなあとを追つてまゐります。それはぢい鼠も、小鼠も。

イヨルフ 「夢中で」それからどうするの〜。話してよ。

鼠取りばあさん そこでわたしどもは陸をはなれます。わたしが權を押しながら口笛を吹きますと、小犬は泳いでついてまゐります。「火のやうに目を光らして」するとみんな小僧どもはちよろ〜、よち〜、どこまでも〜水を渡つてついてまゐります。いやでもついて来なくてはならないのです。

イヨルフ なぜ来なくてはならないの。

鼠取りばあさん それは水がきらひだからなのです。水を見るとこはくてたまらないので〜そのためよけい水にはまりこむやうになるのですよ。

イヨルフ ぢやあ水にはまつてしまふのだね。

鼠取りばあさん それは一疋のこらすね。「聲をおとして」そしてもうこの上の望みはないやうに、おとなしく静か

に冷たくなつてしまふのですよ。それは深い／＼水の底で、楽しい、楽しい、いつまでもさめない夢を見て眠るのです。あれほど人間に憎まれ追ひまはされたものでしたがね。「立ち上がる」まあそれでも昔は、小狗なんぞ使ふこともいらなかつたのでしたよ。もとはわたし一人でおびき出したものです。全くの一人でな。

イヨルフ 「すると何をおびき出したの。」

鼠取りばあさん 「人間をな、取り分け一人の人間をな。」

イヨルフ 「夢中になつて」へえ、誰なの、その人は。いつて下さい。

鼠取りばあさん 「笑ひながら」それはわたしの大事な可哀い人でしたよ——ねえ、あなた、かはいゝ、かはいゝ、お坊ちやま。

イヨルフ 「その人はいまだここにゐるの。」

鼠取りばあさん 「邪慳に」鼠と一緒に沈んでゐるのさ。

「またやさしく」さてこゝらでまた一爲事しに出かけなければなりません。始終それからそれと旅の空ですよ。「リータに向ひ」するとこちらではけふはほんたうに御用はございませんな。かうしてをります中に片づけて上げられるといふものですが。

リータ いゝや結構。まあいゝにしときませうよ。

鼠取りばあさん 「へい／＼——どうもお生憎さまで——ねえ、奥さま。いづれまたおうちの中で嚙つたり爪を立てたりするいたづらものが——ちよろ／＼、よち／＼、証けまはるいたづらものが、お目につきましたら——どうぞわたくしと、この小狗に御用を仰せつけ下さいまし——では御機嫌よろしう。御機嫌よろしう。」

右手の扉口から出て行く。

イヨルフ 「小聲で得意らしくアスタに向つていふ」ほら、ごらん下さい、をばさま。僕だつて鼠取りばあさんに出席つたでせう。

リータ、ヴェランダの方へ出て行き、ハンケチで煽ぐ。やがて間もなくイヨルフが、こつそり氣のつかない間に、右手の扉口から出て行く。

アルメルス 「ソファの卓の上に置いた紙ばさみに手をかける」アスタ、それはお前のだらう。

アスタ えゝ。古い手紙が幾らか入つてゐるのですよ。

アルメルス 「すると内輪の手紙だね。」

アスタ だつてそれをお留守の間に整理して置いてくれと、おいひつけになつたのですよ。

アルメルス 「妹の頭を軽く打つ」するとお前、その暇をこしらへてくれたのだね。

アスタ ちろんですわ。わたし半分はこちらで、半分は町の家の方でやつたのですよ。

アルメルス どうも有難う——さてそこで何か變つたことを見つけたかね。

アスタ 「軽くうけて」えゝまあ——さういふ古い手紙の中では、いつも何かしら見つけるものですよ。「一層調子を低く眞面目に」この紙ばさみの中に、おかあさまに書いた手紙があるのですよ。

アルメルス それはちろん、お前の方に取つて置いたらうね。

アスタ 「強ひて抑へて」いゝえ。わたし、あなたにもお目を通していただくつもりですわ。いつか——いづれそのうちにね——けふはわたしこの紙ばさみの鍵を持つて来ませんでした。

アルメルス なあにアスタ、そんなことをするには及ばないよ。わたしはお前のおかあさんの手紙を読みはしないから。

アスタ 「しつかりと相手を見据ゑて」それではわたしいつか——まあなつかしい夕方にでも、その中に書いてあることをお話しませうよ。

アルメルス それもいゝだらう。だがまあおかあさんの手

紙は取つて置きなさい。一體あの人について、お前は大きく考へてゐたこともないやうだね。

彼はアスタに紙ばさみを渡す。アスタはそれを受取つて、椅子の上に置く。リータ、また出て来る。

リータ あゝいやだ。あの薄氣味の悪いばあさんが、何だか死骸の匂ひとでもいふやうなものを、持ち込んで来たやうな氣がするわ。

アルメルス とにかくちよつと薄氣味の悪いばあさんだつたなあ。

リータ わたしあのばあさんがゐる間、それはいやな氣持でした。

アルメルス それはさうだが、わたしはあのばあさんの話すやうな、奇妙な、人を誘ひ入れる魔ものめいた力が、まことによく分かるのだ。あの山の峰と峰の間に立つたり、高原を見晴しながら感じる寂しさが、どこか似てゐるやうだ。

アスタ 「不思議さうに兄を見る」にいさん、一體あなた、どんなことがおありになつたの。

アルメルス 「微笑しながら」わたしに。

アスタ えゝさう。何かあつたに違ひないわ。いはゞ變化といつたやうなことが。リータさんもやはり氣がついて

おいででしたわ。

リータ わたし、お歸りになるとさつそく、それに目がついたのですよ。でもあなた、それはいゝ方のなんでせうね。

アルメルス まあさう思つてもらひたい。そしてまた必ずいゝことになるに違ひないし、ならうとしてゐるのだ。

リータ 「興奮して」あなた、旅行中に何か事件があつたのね。むろんさうよ。わたし、それは分かりますわ。

アルメルス 「首を振る」どうして、何があるものか——とにかく外に現れたところではな。しかし——

リータ 「一生懸命になる」しかし——

アルメルス わたしの内心には、とにかくちよつとした革命が起つたとはいへようさ。

リータ まあ——

アルメルス 「妻の手を軽く打つて氣を落ち着けさせながら」なあにさ、リータ、それもいゝ方にだよ。その點は十分安心してもらひたい。

リータ 「ソファの上にかける」それをすぐに話して下さい。なくてはなりませんわ。何もかも残らずね。

アルメルス 「アスタの方へ向く」ぢやあまづ——とにかく我々も坐ることにしよう。さうして話をして見ることにしよう。どうか話せるだけのことはね。

彼はリータの傍に並んでソファにかけける。アスタも一脚の椅子をひつばつて来て、二人のすぐ傍に席をつくる。短い間。

リータ 「待遠しきうに夫を見る」さあ、それでは——

アルメルス 「向うをじつと見る」わたしも過去の十年乃至十一年をとほして、自分の生涯を回顧すると、いや——

自分の運命を回顧すると——どうもお伽噺のやうな、乃至は夢を見てゐるやうな氣がするのだ。アスタ、お前もさうは思はないかい。

アスタ 成程、いろ／＼な意味ではね。

アルメルス 「言葉をつげながら」アスタ、何しろ我々ももどんなであつたかといふことを考へるとな。何しろ我々二人はみじめな頼りのない孤兒であつたし——

リータ 「いら／＼しながら」まあそんなこと、とうの昔のことですわ。

アルメルス 「妻に注意することなしに」ところでいまわたしも氣樂な、裕福な身分になつてゐる。自分の天職に従つて行くことが出来るやうになつた。心のまゝに著述もし、研究も出来るやうになつた。「兩手をひろげる」で、この大きな、思ひがけない幸福も一切——リータ、お前のお蔭なのだよ。

リータ 「半分冗談に、半分不平らしく、夫の手を軽く打つ」もうそんなことをいふのは、およしなさいといふのに。

アルメルス いや、これもほんの話の糸口といふものだよ。

リータ そんならそんな糸口なんかとぼしておしまひなさい。

アルメルス リータ——わたしを山へ出かけるやうにしたのは、醫者のすゝめがあつたからだと思つてはいけませんよ。

アスタ ではないの、にいさま。

リータ ぢやあ何でお出かけになつたの。

アルメルス 實は書齋にゐたのでは、もうどうしても落ちて着くことが出来なくなつたからさ。

リータ もうどうして落ちて着けないのですつて。でもあなた、一體誰がお邪魔をしまして。

アルメルス 「首を振る」それは外から邪魔をするものは誰もない。しかしわたしとしては、どうも自分の大切な力を全く濫用してゐたやうな氣がしたのだ——いや、むしろそれを空しく遺棄してしまつたやうな氣がしたのだ。どうも自分の時間を浪費してしまつたやうな氣がしたのだ。

アスタ 「目を見はつて」あんなに本と首つ引きで書いてばかりいらしたくせに。

アルメルス 「うなづく」といふのは、どうもわたしはたゞそれだけのために生れて来た人間ではないからさ。どうも何かまだほかに成就しえられる筈のことがあるのだ。

リータ するとそれがあなたの、いつもくよくよく考へこんでいらしたことになるんですか。

アルメルス まあ大概は。

リータ で、そのために、この節あなたお一人で不機嫌になつていらしたといふわけね。そしてわたしはたゞのものに對してもね。だつてさうでせう、あなた。

アルメルス 「じつと向うを見つめる」そこでわたしは卓にかじりついて、夜も晝もこつ／＼書きつゞけてゐたといふわけだ。どうかすると夜中過ぎまでもね。「人間の責任」といふ大部の本を書いて書いて書きまくつた、ふん。

アスタ 「夫の腕に手をのせる」でもにいさま——その本はあなたの一生の爲事になるわけでせう。

リータ え、それはあなたからも随分度々うかゞひましたわ。

アルメルス 成程さうわたしも考へてゐた。それはわたしがほんたうに覺醒しない時代にはね。「目つきに熱を帯

びて」そこへリータ、お前といふものがあつて、わたしを著述に赴かせるやうにしてくれたのだ——

リータ まあつまらないことを。

アルメルス 「妻に向つてほ、笑みかけて」——お前のその金の山でね——

リータ 「半分笑ひながら半分困つたやうに」もうそんなつまらないことをいひ出すたんびに、一つぶちますよ。

アスタ 「心配さうに兄を見る」でもにいさま、あの本は。

アルメルス あれはどうもだん／＼わたしから遠ざかつて行くやうだよ。その代り一層高い義務とか、その要求とかいふ考が、しつかりとわたしの心に根をおろすやうになつたのだ。

リータ 「急によるこばしくなつて、夫の手をつかむ」あなた。

アルメルス あ、リータ、イヨルフに對する考がね。

リータ 「うつとり手をはなす」あら、さう——イヨルフのこと。

アルメルス もうあの可哀さうな小さいイヨルフのことが、だん／＼強く／＼わたしの心をつかむやうになつた。あの卓から落ちた不幸な出来事の後には——。しかもそれが、到底恢復しないたしかな見込がついてからは、

ことにね——

リータ 「迫るやうに」でもあなたは、あの子のためには、随分盡していらつしやるわ。

アルメルス あ、さう、學校の先生のやうにね。しかし父親のやうではなくね。しかしこれからはイヨルフのためにわたしも父親になるつもりだ。

リータ 「首を振りながら」どうもわたし、ほんたうによくあなたのお心持がわかりません。

アルメルス わたしのいふのは、これから一生懸命、あの子の身の上で起つた災難を、少しでも軽くもし、ゆるめ

てもやりたいといふのだよ。

リータ でもまあ爲合せと、まだそんなに深く感じてゐるやうです。

アスタ 「感動して」いゝえ、リータさん、あの子はさうではありますまいよ。

アルメルス あ、ほんたうだよ。あれはもう随分深く感じてゐる。

リータ 「いら／＼しながら」だつてあなた——それでは一體、この上何をあの子にしてやらうとおつしやるの。

アルメルス わたしはあれの幼い魂の中にほの見えてゐるいろ／＼の豊かな能力を、はつきり明るみに出して見る

つもりだ。高貴な魂の芽生えを勢はり育て、大きくしてやるつもりだ——それからやがて花を咲かせ實を結ばせるつもりだ。「いよ／＼熱して来て、立上がりがら」

いや、それ以上をわたしはして見るつもりだ。わたしはあれの後楯になつて、あれの心に望んでゐるところと、あれの力に及ぶ限りのものとを一致させるやうに導いて行くつもりだ。どうもいまでは、そこまでにも行つてゐないのだから。あれの空想も努力も、一切あれが一生涯かゝつても及びもつかない方にばかり向けられてゐる。それよりか、あれの心にしみ／＼幸福の感情を起させてやりたいと思ふ。

彼は二三度行つたり來たりする、アスタとリータが目を追ふ。

リータ あなた、このことはもつと落着いてお考へなさらないでなれません。

アルメルス 「左手の卓のところに立止まつて、二人を見る」イヨルフにはわたしの一生の爲事をつゞけてやるやうにさせたい。むろんあれが進んでする場合にはだ。さもなければ、何にせよ、全くあれの心持にびつたり出會ふものを選ばせるやうにしなければならぬ。恐らくそれが一ばんいゝだらう。——しかしとにかく、わたしの爲

事はあのまゝにして置いてやる。

リータ 「立上がる」でもあなた——あなたはイヨルフのために、そしてまたあなた御自身のためにお爲事をなさることは出来ないのですか。

アルメルス いや、それはわたしには出来まい。出来ない相談だ。わたしは自分を二つにわけるとは出来ない。

だからわたしは退くつもりだ。イヨルフが、あれがどこまでも一家の中心にならなくてはならない。で、あれをそれだけのものにする、それがわたしの新たな一生の爲事になるべきだと思ふ。

アスタ 「立上がつて彼の方へ行く」にいさま、それまでに随分辛い、苦しい闘争をなすつたことでせうね。

アルメルス まあね。ところで家にゐたのではつひ自分に克つといふことが出来なかつた。どうしても自分に諦めをつけるまでにする事が出来なかつた。家にゐたのではどうしても。

リータ ぢやあそのために、この夏はお出かけになつたのですね。

アルメルス 「目を輝かして」さうだとも。で、わたしは山の上の果てしもない孤獨の中に入れて入つて行つたのだ。そこでは山の頂上にのぼつてくる太陽の光を見た。

つひ鼻の先に星が輝いてゐるやうに思つて、氣の合つた友達のやうな親しみを感じました。そこでさういふこともできたわけさ。

アスタ 「痛ましさに兄を見る」で、『人間の責任』の本は、どうしてもお書きにならないのですか。

アルメルス あゝ、もう書かない。いまもいつたやうに、二つの爲事の中に自分一人をつかひ合わせるわけには行かない。しかし人間の責任といふ事柄は——わたしの一身に現して見せるつもりだ。

リータ 「微笑しながら」あなた、ほんたうに、この家にて、そんなえらい爲事がやりとげられようとお思ひになつて。

アルメルス 「妻の手をつかむ」お前と同盟してやれば出来ようぢやないか。「片かたの手をひるげる」それからアスタ、お前とも同盟してね。

リータ 「自分の手をひつこます」では二人とね。するとやはり、あなたは両方に體を分ける譯ですね。

アルメルス まあさ、リータ——

リータ 夫をそこに置去りにして、自分は庭の扉口に立つ。右手の扉を軽く、早間はやまに叩く音。土木技師ボルハイムがあわたとどしく入つて来る。三十格好の若

い男子。活潑で快活な様子。端正な態度。

ボルハイム おはやう、おはやう、奥さん。「アルメルスを見て、愉快らしく驚いて立止まる」おや、これは、これは。アルメルスさん、お歸りですね。

アルメルス 「彼の手を振る」ゆうべ歸りましたよ。

リータ 「快活に」ボルハイムさん、休暇がそれだけしかもらへなかつたのですよ。

アルメルス いや、リータ、そんなことはないさ——リータ 「傍へよる」だつてほんたうですわ。この人の休暇がきれたのですよ。

ボルハイム はい。まあ、そんなことでしつかりと御主人の轡むちをおさへて放さないといふわけですわ、奥さん。

リータ わたし自分の権利を行ふだけですわ。それに第一、何でも物には終りといふことがなくてはなりません。

ボルハイム いやはや——まあどうか、何でもかでもさういふ風にきめないで頂きたいものですわ——さて、アルメルスのお嬢さん、おはやうございます。

アスタ 「身づくろひをして」おはやうございます。

リータ 「ボルハイムを見る」何でもですつて、あなた、ボルハイム さやう、どうもこの世の中にはやはり、終るといふことのないものがあると確信してゐるのですよ。

リータ すると差し當り愛情とか——さういつた類のことをお考へですの。

ボルハイム 「熱をもつて」一切の愛情なり美なり、皆さうだと考へます。

リータ さういふものには終りがなくとおつしやるのですね。結構ですわ。わたしたちもさう思ひます。こゝにゐる皆さん、みんなさうでせう。

アルメルス 「ボルハイムの方へ進みよる」もうやがてこの地方の道路工事はすむのでせうね。

ボルハイム やつと出来上がりました。昨日で爲上がつたところですよ。随分長くかかりました。しかしまあお蔭でとにかく、この方は終りをつげただけです。

リータ で、あなたはそんなによろこんでいらつしやるの。ボルハイム それは無論ですとも。

リータ はて、それだと申し上げることがありますわ——ボルハイム 何ですわ、奥さん。

リータ ボルハイムさん、どうもあなた、それではひどくはないでせうか。

ボルハイム はてね、それはどういふわけ。

リータ えゝ。だつてさうなると、もうあなたもこちらの方へはいらつしやれなくなるでせう。

ボルハイム 成程、おつしやるとほりです。そのことは考へませんでした。

リータ まあ、でもたまにはたづねて下さるでせうね。

ボルハイム どうも残念ながら 當分むづかしいことではなう。

アルメルス さうかね。それはなぜだらう。

ボルハイム えゝ、じつはさつそく別の大爲事を引き受けましてね、すぐそれにかゝらなければならぬのです。

アルメルス いや、さうですか。「彼の手を握りしめる」それはどうもおめでたう。

リータ おめでたう、おめでたう、ボルハイムさん。

ボルハイム おつと、おつと——一體はまだ大きな聲でお話は出来ないのですよ。しかしどうも祕密にして置けない性分ですね——いや面倒な道路工事で——北の山地なのです。山つゞきで——とても想像もつかないやうな困難と戦はなくてはならないのです。「興奮する」あゝ、偉大にして美麗なる世界よ——そして人生、道路技師たるもまた幸福なるかなです。

リータ 「微笑しながら、からかふやうに相手を見る」するとけふそんなにはめをはづしてやつておいでになつたのも、そのお爲事のためだけなのですか。

ボルハイム それだけではありません。ほかにも、かどや
かしい多望な前途が開けかゝつてゐるものですから。

リータ 「前のやうに」は、あ、すると何かまだずつといふ
事が、お取つときになつてゐるのですね。

ボルハイム 「アスタの顔をぬすみ見る」さあ、どうですか
ね。まあ幸福といふ奴は、一度来たすと春の潮のやうに、
どん／＼流れ出してくるものですよ。「アスタの方をふ
りむく」アルメルスさん、すこし散歩をしませんか、い
つものやうに。

アスタ 「早口に」いゝえ、どうも。今は止めますわ。けふ
はね。

ボルハイム まあいらつしやい。ほんのちよつとの間ある
きませう。立つ前にお話しておきたいことが、まだいろ
いろとあるのですよ。

リータ きつとまだ大きな聲ではおつしやられないことな
んかどね。

ボルハイム ふん、まあそんなものですわね——

リータ さあそれでは、内證話をたんとしていらつしやい。
〔小聲で〕アスタさん、いらつしやいよ。

アスタ でもリータさん——

ボルハイム 「たのむやうに」アスタさん——ねえ、これが

ことによるとお別れの散歩になるかもしれないのですよ
——長い、長いお別れのね。

アスタ 「帽子と日傘をとる」ぢやあまりますわ——す
こし庭をあるいて来ませう。

ボルハイム どうもありがたう。

アルメルス ついでにイヨルフも見てやつて下さい。

ボルハイム イヨルフさんか——ほんたうにさ。けふあの
子は一體どこに行つてゐるのです。もつて来てあげたも
のもあるのだが。

アルメルス どこかそとへ出て遊んでゐるのですよ。

ボルハイム まあさうですか。いよく外へ出て遊ぶやう
になつたのですね。先には始終うちの中にとちこもつて、
勉強ばかりしてゐましたがね。

アルメルス あれはもう止めました。思ひきつて野放しに
するつもりですよ。

ボルハイム それに限る。かはいさうに、なんでも外へ出
してやることですよ。いや全くさ、この美しい世界には、
遊びまはるにまさつたことはないのですよ。どうも人生
は一つの遊びです。行きませう、アスタさん。

ボルハイムとアスタ、ヴェランダを下りて庭へ出て行
く。

アルメルス 「二人の後を見送りながら」おい、リータ——

あの二人の間には何かあるらしいね。

リータ さあ、なんとも言へないことですね。せんにはさ
うかと思つてゐたのですがね。どうもこの頃になつて、
アスタさんの素振がへんになつて来てね——だん／＼わ
からなくなるのですよ。

アルメルス はてね。さうかい。旅行してゐた間にかい。

リータ え、どうもこの一二週間こつちね。

アルメルス すると今では、あの男に餘り氣がのらないと
いふわけなのだね。

リータ え、本氣でないやうです。しんから、底から、
誰がなんといつてもといふ風では、どうもないやうです
よ。「探るやうに夫の顔を見て」もしあの人に氣がある
やうだと、お困りになつて。

アルメルス 困るといふわけもないがね。むろん氣にはな
る——

リータ 氣になるのですつて。

アルメルス さうさ、わたしはアスタのことでは責任があ
るのだからね——あれの身の上についてはね。

リータ おやまあ——責任があるのですつて。だつてアス
タさんもう一人前です。自分で相手を選ぶ位のこと

は出来ようぢやありませんか。

アルメルス どうか、それだと結構だがね。

リータ わたしにいはせると、ボルハイムさんなら、ちつ
とも悪いことはないぢやありませんか。

アルメルス それはさうさ——わたしだつてさう思ふ、ど
うして悪いどころではない。だが——

リータ 「前の言葉を續けて」ですからあの二人が一しよ
になるやうだと、こちらもじつは願つたりなのですよ。

アルメルス 「不満らしく」あ、だが全體どういふわけ
で。

リータ 「次第に興奮して」だつて、さうなればアスタさん
は、あの人について遠方へ行かなくてはならないでせう。
従つて今のやうにしげ／＼と、わたし達のところへ来た
くても来られなくなるでせう。

アルメルス 「おどろいて妻の顔を見る」え。お前、アスタ
を追ひ拂はうといふのか。

リータ え、さうよ、さうよ。

アルメルス だつて全體どういふわけで。——

リータ 「熱情をこめて夫の首に腕をからみつける」なぜ
といつて、その時こそあなたといふものが、始めてわたし
一人のものになるのですもの。いゝえ、いけない——そ

れでもまだいけないわ。まだわたし一人のものではないわ。「突然痙攣的な泣聲になる」あゝ、アルフレッド、アルフレッド——わたし、とてもあなたから離れられませぬわ。

アルメルス 「優しく振り離す」これさ、リータ——まあ、しつかりしておくれ。

リータ しつかりするもしないも、そんなことはどうでもいいのです。あなたのことだけ考へてゐればいいのです。あなたが一切なのですわ。「また夫の胸にとりすがる」あなたただわ、あなたただわ、あなたただわ。

アルメルス まあお離し、ね、お離し——息がとまるよ——
リータ 「夫を離す」あゝ、いつそ止めてしまへたら。「火をくやうな目で夫を見る」あゝ、わたし、どのくらゐあなたを憎んでゐたか、思ひしらせて上げたい——

アルメルス 憎んだと——

リータ さうですとも——お部屋に閉ぢ籠つて、御自分の著述にばかり心を奪はれていらつしやるとね、それはずつと、ずつと夜更までもね。「訴へるやうに」それはいつまでも——ずるぶん遅くまでも——あゝわたし、どれ程あなたの著述を憎んだでせう。

アルメルス だがあれはもう止めたのだよ。

リータ 「斷ちきるやうに鋭く笑ふ」えゝ、さうね。その代りこんどは、もつと厄介なことに夢中になつていらつしやるわ。

アルメルス 「かつとなる」厄介なことだと。厄介なこと、は——お前、お互の子供のことを言ふのかい。

リータ 「烈しく」さうですとも。わたし達の仲から見ても、わたしはさう言ふのです。なぜといつて子供は——子供はお負けにもつて行つて、生き物ですからね。「次第に情熱を加へて」だつてあなた、わたしには我慢が出来ないのですよ。——わたしには我慢が出来ないのですよ——まつたくの話が。

アルメルス 「じつと妻の顔を見て小聲で言ふ」どうかするとリータ、わたしはお前がこはくなる位だよ。

リータ 「陰鬱に」わたし自分で自分がこはくなるのですよ。ですからよけい、あなたはわたしの心のなかにある悪魔の目をさましてはならないのですよ。

アルメルス 何を、とんでもない、——一體わたしがそんなことをするだらうか。

リータ えゝ、なさるのですとも——お互の間の何よりも神聖な絆を引き破つておしまひになれば。

アルメルス 「迫るやうに」リータ、だが氣をつけて物を言

ふがいゝぞ、お前自分の子供のことを——お互の間の一人息子のこと言つてゐるのだぞ。

リータ あの子はほんの半分わたしのものになつてゐるだけですよ。「また熱情的に」でもあなたはどこまでもわたし一人のものなのです。もうくわたし一人のものですよ。——正當の権利で、わたしそれを要求するのです。

アルメルス 「肩を聳かして」いやはや、リータ——要求するだけでは一向役に立たない。何事も、自由に與へられるのでなくてはね。

リータ 「緊張して夫の顔を見る」するとこれから先、もうさういふことは出来ないでせうか。

アルメルス うん——それはできないとも。わたしのこの一身は、お前とイヨルフの二人が分けなくてはならないのだよ。

リータ でももし、イヨルフといふものが、まるで生まれてゐないとしたら、それだどうでせう。

アルメルス 「避けるやうに」うん、それはいくらかちがふだらうよ。それだとお前だけのものになるだらうよ。

リータ 「聲を頓はせて、小聲に」それだわたし、あんな子なんか生まなければよかつたのだわ。

アルメルス 「かつとなる」リータ。お前は自分で自分の言

つてゐることが分かつてゐるのかい。

リータ 「感情の興奮にふるへて」わたしは口に言へない苦しみをして、あの子を生んだのです。それもみんなあなたのためだと思つて、悦び勇んで辛抱したのですよ。

アルメルス 「熱情をもつて」さうだとも、さうだとも、よく承知してゐるよ。

リータ 「きつぱりと」でも、さういふことはこれでもうおしまひにしなくてはなりません。わたしはわたしとして生きたいのです。あなたと御一緒にね。このまゝイヨルフの母としてやつて行くだけでは——たゞそれだけのことは生きて行けません。わたし、それはあくまでしないつもりですよ。それはできないことですよ。たゞあなた一人のものでありたいのですよ、あなた。

アルメルス だつてリータ、それは今だつてさうぢやないか。お互の子供を通して——

リータ まあ——おもしろくもない月並の文句ね。——それだけのことですわ。だめ、そんなことでだまかされはしませんよ。なるほどわたしは母親にはなれませう。けれどたゞ母親でゐるといつたつて、とてもそれはだめです。あなた、どこまでもさういふ女と思つて頂かなくてはなりません。

アルメルス　でもせんにはお前も、イヨルフをずるぶん可哀がつてゐたのではないか。

リータ　それは全くふびんに思ひました。だつてあなたはあの子を空気がらゐにしか思つておいでにならなかつたでせう。あの子はもう始終卓にかじりついて、こつ／＼やらされてばかりゐたでせう。つひ目をかけようともなさらなかつたでせう。

アルメルス　「しづかに頷く」全くだ——わたしは盲目だつたのだ。それまでの時機が来なかつたのだ。

リータ　「夫の顔を見る」ところで、今その時機が来たのだすね。

アルメルス　さうだ——とう／＼来た。イヨルフのために父親らしい父親になつてやる、それ以上にわたしがこの世にうけた尊い使命のないことをやつと悟つたのだ。

リータ　するとわたしには。わたしには何になつて下さるの。

アルメルス　「優しく」わたしはどこまでもお前に優しくしてあげよう——心から優しくね。「妻の両手を取らうとする」

リータ　「それを避けて」心から優しくあなたからして頂くぐらゐる何でもありません。わたしは、あなたをその儘

根こそぎ所有したいのです。わたし一人でね。あの初めて、夢のやうに美しい、たゞもう酔つてゐるやうなあの時分のとほりにね。「はげしく、けはしい調子で」もうもうけして、餘り物や残り物でごまかされはしないのですよ。アルメルス　「柔和な調子で」ねえ、リータ、これまでも親子三人の間には、ありあまるほどの幸福があつたやうに思ふがなあ。

リータ　「嘲るやうに」どうもおめでたい方ね。「左手の卓に向つて掛ける」まあお聞きなさい。

アルメルス　「そばへ寄る」何だい。

リータ　「鋭く光る目で夫を見上げて」ゆうべあなたの電報を受け取つた時ね——

アルメルス　ふん、それで——

リータ　——その時わたしは白い着物を着ました——

アルメルス　なるほど歸つて来た時、お前が白い着物を着てゐたのは氣がついてゐたよ。

リータ　髪をほどきました——

アルメルス　そのふつさりと、いゝ匂ひのする髪をね——

リータ　——それが首筋や背中に垂れさがるやうにね——

アルメルス　その通りだ。その通りだ。あゝまつたく、ほれぐするやうだつたよ。

アルメルス　「告めるやうに妻の顔を見る」こら——

リータ　それから床へおはいりになつたのです。そしてぐつすり正體もなくお休みになつてしまつたのですよ。

アルメルス　「首を振る」こら——リータ。

リータ　「ソファの上に長々と寝そべりながら、夫の顔を見上げて」ねえ、あなた。

アルメルス　うん。

リータ　「シャンパンはあれど、君は手をふれざりき。」

アルメルス　「可なり慳食に」うん、手をふれなかつたよ。妻の傍を離れて、庭へ出る扉口に立つてゐる。リータしばらく身じろぎもせず、目をつぶつた儘横になつてゐる。

リータ　「突然飛び上がる」あなた、でも一つ申し上げて置くことがあるわ。

アルメルス　「振り返る」うん。

リータ　あなたはいゝ氣になつていらつしやると間違ひますよ。アルメルス　いゝ氣になつてゐるとは。

リータ　えゝ、そんなに平氣な顔をしていらつしやると間違ひますよ——わたしは何も、あくまであなたのもとの

リータ　ランプには二つとも薔薇色の笠が掛けてありました。そしてわたし達は二人きりでした。——家中で起きてゐたのはたゞ二人だけでした。そしてシャンパンが卓のうへに載つてゐました。

アルメルス　わたしはちつともそれを飲まなかつた。

リータ　「憤りを含んで夫を見る」えゝ、その通りです。「溢く笑ふ」「シャンパンはあれど、君は手をふれざりき。」

——歌にあるとほりです。「眩掛椅子から立上つて、さも倦んだ體でソファに寄り、半身を横たへた姿勢で腰を下す」

アルメルス　「部屋を横切つて妻の前に立つ」わたしはあの時まじめな考に耽つてゐたのだ。お互の將來のことを相談する積りにしてゐたのだ——何はおいても、イヨルフのことをね。

リータ　「微笑する」で、それもあなたはなさつたのですわ——

アルメルス　いゝや、どうしてそこまでは行かなかつた——

——お前は着物を脱ぎに掛かるのなもの。

リータ　えゝ、でもその間にやはりイヨルフのこともお話になりました。だつておぼえていらつしやるでせう。あの子の胃の具合はどうだといつておたづねになつたでせ

きまつたわけでもないのですからね。

アルメルス 「近く寄る」それはどういふことだね。

リータ 「唇をふるはせて」ねえ、あなた、わたしはこれまで一度だつて、あなたに對して不しだらを働く考など、塵ほどももつてゐたことはありませんでした。それは唯一瞬間でも。

アルメルス だつてそれは承知してゐるさ——わたしのリータの心持ぐらゐり知つてゐるのだ。

リータ 「火のやうな目で」でも、もしわたしを振り捨ててもなさると——

アルメルス なに振り捨てる——。どういふつもりか、わたしにはわからない。

リータ それはどんな考でも、わたしの心のなかに湧くまゝといふ限りませんよ、もしか——

アルメルス もしか——

リータ もしかわたしといふものが、どうでもいふものになつたと分かれね。もう前のやうにわたしを愛して下さらないと分かれね。

アルメルス しかしな、リータ——年月と共に人間における變化が——わたし達夫婦の間にもいつか起るに違ひない。それはほかの人と變つたことはないよ。

リータ いろんなことがあつてもわたしの心には起りはしません。あなたの心にだつて變化など起らせはしません。そんなことはとても我慢がなりませんわ。わたしはどこまでもあなたといふ人を、わたし一人のものにして置きたいのです。

アルメルス 「心配さうに妻の顔を見る」お前は恐しく嫉妬深い女だな——

リータ 持つて生れた性質はどうかへやうありません。「嚇すやうに」わたしあなたといふものを誰か他の者と分けあはなくてはならないやうなことでもあれば——

アルメルス さうすればどうする——

リータ さうすればわたし復讐します。

アルメルス するとどう復讐をするのだ。

リータ どうしてするか分りません——いゝえ、知つてゐます、分かつてゐます。

アルメルス はてね。

リータ どこかへ行つてわたし、この體を投げ出します。

アルメルス 投げ出す、といふのかい。

リータ え、投げ出しますとも。わたし誰でも、最初出會つた男の頸に、いきなりすがりついてやります。

アルメルス 「優しく妻の顔を見遣つて首を振る」まさか

そんなことが——貞淑な、氣位の高い、實意のあるお前に出来るものか。

リータ 「夫の首に手をかけて」まあどんなことを爲出かすか分かるのですか、——もしもあなたかこれ切りわたしに構つて下さらないとなればね。

アルメルス 構はないつて。よくもそんなことが言へたものだ。

リータ 「半ば笑つて、つかまへてゐた手を離して」わたしだつてつひ、この家へ出たり入つたりしてゐる技師先生なんかに、手をつけないには限りませんよ。

アルメルス 「ほつとして」何のことだ——ほんの冗談を言つてゐるのだね。

リータ なんの冗談なものですか。あの人だつて間に合はないわけはないでせう。

アルメルス だつて生憎ともう、あの男にはどうやら先口があるらしいよ。

リータ なほさら結構。それなら、その相手からあの人を奪ひ取つて見せますよ。だつてわたしは、イヨルフからもちやうどそれと同じ目に逢はされてゐるのですからね。

アルメルス なに、あの小さいイヨルフがそんなことをしたなぞと。

リータ 「人差指で指して」そらね、そらね。イヨルフのこといふと、急に優しくなつて、聲までふるはしていらつしやる。「威すやうに手を握り固める」あゝ、あなたはどうやらわたしに妙な氣をおこさせて——もういゝわ。

アルメルス 「不安さうに妻の顔を見遣る」どんな氣をおこさせたと——

リータ 「夫の側を離れて、烈しく」いゝえ、いゝえ、いゝえ——それはいひません。どんなことがあつてもいひません。

アルメルス 「妻の傍に近寄つて」リータ、後生だ——わたしのために、そしてお前自身のために——どうか悪い考などは起さないでお呉れ。

ボルハイムとアスタとが庭からはいつて来る。二人とも心中の興奮を抑へてゐる。共に眞面目な元氣のない顔をしてゐる。アスタはヴェランダに残る。ボルハイムは部屋の中にはいつて来る。

ボルハイム どうやらこれでお名残の散歩をいたしました、お嬢さんと御一緒にね。

リータ 「びつくりした様子で、相手の顔を見る」おや。——すると散歩だけで、あとの旅行の方は中止ですか。

ボルハイム いゝえ、わたしはいたします。

リータ お一人だけ。

ボルハイム え、一人だけ。

リータ 「陰鬱な目付でアルメルスをちらと見る」あなた、お聞きなすつて。「ボルハイムの方へ振り向いて」きつと、不吉な目付をしたものが、いたづらを爲掛けたに相違ありませんわ。

ボルハイム 「相手の顔を見る」なに不吉な目付。

リータ 「顔きながら」え、不吉な目付よ。

ボルハイム 奥さん、あなたは不吉な目付をお信じになりませんか。

リータ え、つひこの頃不吉な目付を信じるやうになりましたよ。取り分け子供の不吉な目付をね。

アルメルス 「かつとして、小聲で」リータ——よくもお前は——

リータ 「小聲で」わたしがこんな意地悪の、いけずになつたのも、みんなあなたのせみですよ。

この時遙かの濱の方に、入り亂れた叫喚の聲が聞える。

ボルハイム 「玻璃扉の傍へ寄つて」あの騒ぎはどうしたといふ事だらう。

アスタ 「扉口のところで」おや、みんな棧橋の方へ駈け出

して行きますよ。

アルメルス 何だらう。「ちよつと外を見る」きつとまた町の腕白共が、何か喧嘩でもはじめたのだらう。

ボルハイム 「欄干の上に乗りに出して呼ぶ」お、い、そこにゐる子供達、どうしたのだ。

聞きとれない混亂した数人の返事が聞える。

リータ なんだつて。

ボルハイム 子供が一人溺れたのださうです。

アルメルス 子供が溺れた。

アスタ 「不安さうに」小さい子供ですつて。

アルメルス なあに、あの連中は誰も皆泳ぎは知つてゐるよ。

リータ 「恐怖の餘り叫び聲を出す」イヨルフはどこにいます。

アルメルス なあに大丈夫。心配しなくともい。イヨルフは庭に出て遊んでゐるよ。

アスタ い、え、庭にはいませんでした——

リータ 「兩手を高く上げて」お、どうかあの子でありませんやうに。

ボルハイム 「聞き耳を立てて、下へ呼びかける」おい、どここの家の子供だつて。

第二幕

海濱に臨むアルメルス所有林のちよつとした狭い谷間。左手に大きな老木が殆どこの場所一ぱいに枝をひろげてゐる。後景傾斜地を下つて小さな流れがほとばしり出て、森のはづれの岩蔭に入つて行く。流れに沿つて小徑がうねつてゐる。右手に疎らな木立、その間から峽灣が見える。前景に船小屋の角が見え、陸に引き上げられた一艘の小舟が見える。左手老木の下に一脚の卓と腰掛及び二脚の椅子、いづれも薄い白樺の板で造つたものである。ぼんやりと雨氣を保持した日。をり／＼霧がかゝる。

アルフレッド・アルメルス、前幕と同じ服装、腰掛にかけて卓に肘をもたせてゐる。帽子は前に置いてある。じつと身じろぎもせず、うつとり放心した體で、水の面を眺めてゐる。
しばらくしてアスタ、小徑をおりて来る。雨傘をひろげて持つてゐる。

はつきりしない聲で聞える。ボルハイムとアスタとは抑へつけられたやうな叫び聲を立て、庭から外へ飛び出す。

アルメルス 「心中に苦悶して」イヨルフではないよ。ねえ、お前、イヨルフではないよ。

リータ 「ヴェランダで聞き耳を立てる」しいッ。黙つて。何をいつてゐるのか、聞かせて下さい。

リータは劈くやうな叫び聲を立て、部屋のなかへ駈け戻つて来る。

アルメルス 「妻の後を追ふ」なんといつてゐた。

リータ 「左手の駄掛椅子の傍にべたりとなる」「松葉杖が浮いてゐる。」といひました。

アルメルス 「殆んど體が痺れたやうに」嘘だ。嘘だ。嘘だ。

リータ 「嘔れた聲で」イヨルフ。イヨルフ。まあ、でもあの人達が救つてくれるに違ひない。

アルメルス 「半分氣が違つたやうに」無論、救つて呉れるとも。大切な生命だもの。大切な生命だもの。

庭へ駈けおける。

アスタ 「静かに淑やかに傍へ寄つて来る」にいさま、こないやなお天氣に、こゝでじつとしていらつしやるのはよくないでせう。

アルメルス 「静かにうなづいたまゝ黙つてゐる」

アスタ 「傘をつぼめる」もうさつきから方々探してゐたのですよ。

アルメルス 「表情なしに」それはどうも。

アスタ 「一脚の椅子をひいて来て傍へかける」もうさつきからこゝにいらつしたの。ずうつと。

アルメルス 「それには答へないで、しばらくしていふ」うん、どうもわたしにはのみこめない。とてもあり得べからざることに思はれる——一切の出来事が。

アスタ 「同情するやうに相手の腕に手をのせる」ほんたうにねえ。

アルメルス 「じつと相手を見る」ぢやあアスタ、やはりどうしてもほんたうなのだね。それともわたしはどうかしてゐるのか知ら。それとも夢を見てゐるのか知ら。あゝ、どうか夢であつてくれ、ばい、がねえ。まあかうやつてゐる内に目が醒めたら、どんなにうれしいだらう。

アスタ あゝ、ほんたうに、目を醒まして上げられるものでしたらねえ。

アルメルス 「水の上を眺める」どうだ、けふの入江の情ない様子は。あの通り陰氣にどんよりと——鉛色をして——黄いろく光つて、その上に雨雲が影をうつしてゐる様子といつたらない。

アスタ 「哀願するやうに」でもにいさま、まあさうやつて始終水の上ばかり見つけていらつしやらないでね。

アルメルス 「妹のいふことにはとんちやくなしに」なるほど水の上はその通りさ。だが水の底では——その底にはけはしい流れが渦を巻いてゐるのだ——

アスタ 「配さうに」あゝ、もう後生ですから、水の底のことなど考へないで下さい。

アルメルス 「やさしく妹の顔を見る」お前きつと、あの子の死骸がつひその邊に浮んでゐるとでも思つてゐるのではないか。いやはや、そんなことはないのだよ。とてもそんなことを思つては駄目だぞ。何しろお前、この邊の流れがどんなに強いかといふことを、忘れないでゐてもらひたい。いききに海へ入つて行く勢ひといつたらないのだ。

アスタ 「両手を顔にあて、すゝり泣きながら、卓に體をつツ伏す」あゝ、ほんたうに、——ほんたうに。

アルメルス 「陰鬱に」だからイヨルフも可哀さうに、もうとうに——とうに、遠い／＼所まで流されてしまつてゐるのだよ。

るのだよ。

アスタ 「頼むやうに兄の顔を見る」でもにいさま、そんなことおつしやらないでね。

アルメルス それはお前、自分で考へても分かる筈だ。その位なことは分かる筈のお前だもの——二十八時間——いや、二十九時間の間には。まあちよつと——。まあちよつと——

アスタ 「叫び聲を立て、自分の耳をおさへる」にいさま

アルメルス 「卓をしつかり片手で押さへて」だがおい、お前かういふ出来事の意味が分かるかい。

アスタ 「相手を見る」意味ですつて。何の。

アルメルス わたしとリータの上についた出来事さ。

アスタ 意味ですつて。

アルメルス 「いら／＼しながら」うん、意味だ、とわたしはいつたのだ。なぜといつて、これに意味がない筈がないからな、人生、存在——運命、とにかくさういふものが、まるつきり無意味である筈がないのだ。

アスタ あゝ、さういふことになる、誰だつて確實なことがいへるものではありませんまい。

アルメルス 「にが顔で笑ふ」それはさうさ——なるほ

どお前のいふ通りに違ひあるまい。結局一切のことがでたらめに過ぎて行くのだらう——いは／＼楫を失つた難破船が風のまに／＼流されるやうに、勝手な方向に向つて行くのだらう——どうもその方がほんたうらしい。とにかくそんな風に思はれる。

アスタ 「考へ深く」でもそれがほんのさう思はれるだけのことでしたら——

アルメルス 「激しい調子」すると。恐らくお前はわたしに代つてこの事件の謎を解くことが出来よう。わたしには到底出来ない。「一そう穩かに」まづイヨルフだが、あれはちやうどこれから人生の精神的な機微に入りかけようといふところであつた。いろ／＼な天分を無限にあの子は備へてゐた。あるひは随分豊富な天分であつたかも知れない。何しろあの子はわたしの生存を歡びと誇りで充實させてくれたものだ。そこへつひ氣違ひじみたよぼよぼばあさんがひよつこりやつて来て。——袋の中の小犬をちらりと見せたばかりで——

アスタ でも一體どうしてあんなことになつたものか、さつぱり分かりません。

アルメルス それは無論分かつてゐる。子供たちはばあさんが入江に船を漕ぎ出すところを眺めてゐたものさ。と

ところでイヨルフは一人ぼつち、棧橋のはづれに立つてゐたところをみんな見たといふ話だ。それでばあさんの行方をじつと見送つてゐる内に——くら／＼と目まひが来たらしいといふのだ。「體をふるはせながら」まあそんな風にして、あの子は前へのめりこんだ——そして見えなくなつたのだ。

アスタ そんなことでせうね。でもやはりどうも——

アルメルス ああ、ぼあさんが子供を水底へ引き入れたのさ、それは間違ひのないところだ。

アスタ でも、にいさま、何だつてばあさんが、そんなことをしたでせう。

アルメルス あゝ、さうだよ——そこが問題さね。なぜばあさんがそんなことをしたか——。そこに何も應報があるわけはない。何も罪の報いを受ける覚えはないとわたしは思つてゐる。イヨルフは何もあつたのだ。だからあつた覚えはない。悪口を浴びせた覚えもない。あの犬に石を投げつけた覚えもない。それはつひきのふまで、あの子はばあさんも犬も見たことはなかつたのだ。だからそこに應報のなんのといふ事はありやうがない。すべてがいかに根拠がない——いかに意味がないのだよ、アスタ。——それでも何でも、世の中の廻り合せがそんな

な風になつて来るのだ。

アスタ そんな話をリータさんになすつたの。

アルメルス 「首を振る」どうも、こんな話はお前に向つてする方が、しいゝやうな気がしてね。「深い溜息をつく」一體ほかのことでもさうなのだよ。

アスタ がかくしから裁縫道具と小さな包を取り出す。アルメルス、ぼんやり眺めてゐる。

アルメルス アスタ、それは何だね。

アスタ 「兄の帽子を取る」黒い紗のきれですよ。

アルメルス はてね、何にするのだ。

アスタ リータさんが、これをつけて上げてくれるとおつしやるのよ。つけますか。

アルメルス あゝ、どうぞね。

アスタ は喪章の紗を帽子に縫ひつける。

アルメルス 「相手を眺めながら」リータはどこにゐるのだい。

アスタ 庭を歩いていらつしやるでせうよ、きつと。ボルハイムさんと一しよにね。

アルメルス 「少し驚いて」ボルハイム君はけふもやつて来たのかい。

アスタ えゝ、お晝の汽車でお出でになつたわ。

アルメルス それは意外だつたな。

アスタ 「平靜な熱情をもつて」全く實意のある人ね。それはたしかにね。

アルメルス 「相手を見る」お前、あの男を一體好いてゐるのかい。

アスタ えゝ、好いてゐるわ。

アルメルス それでゐてお前、決心がつかないでゐるのかい——

アスタ 「遮る」まあ、にいさま、その話はよして下さい。

アルメルス いや、いや、——まあいつておくれ、どうしてその決心がつかないのだ——

アスタ あら、いけません。後生ですわ。これだけはどうぞ聞かないで下さいよ。だつてほんたうにわたし、苦しいのですからね——さあ。やつと帽子ができました。

アルメルス 有難う。

アスタ こんどは左の腕ですよ——

アルメルス 腕にも紗をつけるのかい。

アスタ えゝ、さういふことになつてゐますわ。

アルメルス ふん——まあいゝやうに。

アスタ、傍へよつて縫ひはじめ。

アスタ あなた腕をじつとしていらつしやいよ。針がさゝ

るかも知れませんよ。

アルメルス 「半ば微笑して」そつくり昔のとほりだね。

アスタ えゝ、さうでせう。

アルメルス もうちひちやな娘の時分、お前はよくそんな風に坐つて、わたしの縫ひを直してくれたりなんかしたものだつたよ。

アスタ その位なことはわたしにも出来たのですね。

アルメルス 何でもお前がはじめてわたしに縫ひてくれたのも——やはり喪章の紗であつたよ。

アスタ さうでしたかねえ。

アルメルス 學生帽に縫ひつけてくれたのさ。あれはおとうさんがなくなつた時だつた。

アスタ へえ、さうでしたかねえ——わたしまるで覚えてみせんわ。

アルメルス さうだらうよ——何しろまだ随分小さかつたからね。

アスタ えゝ、小さかつたのですとも。

アルメルス それから二年たつて——お前のおかあさんがおなくなりの時——あの時もお前はやはり大きな喪章を袖にぬひつけてくれたものだ。

アスタ わたし、さうするものだと思つてゐたのですよ。

アルメルス 「妹の手をさする」アスタ、無論さうするものなのだとも——さてそれからお互二人だけ、世の中へ取り残されることになつたのだ。——もういゝのかい。

アスタ えゝ。「裁縫の道具を纏める」ねえ、にいさま、やはり何といつてもあの時分がお互に楽しい時代でしたね。二人きりでゐた時代が。

アルメルス 全くさ。その代り随分苦しみもしたけれどな。

アスタ あなたは随分苦勞なすつたわ。

アルメルス 「一そう元氣づいて」あゝどうして——お前だつてそれは——お前だけの苦勞はあつたよ——。「微笑しながら」——何しろお前は、わたしのやさしい、親切な——イヨルフだつたよ。

アスタ あら、いけません——そんな名をいつて、下らないことを思ひ出させてはいけませんよ。

アルメルス 一體お前が男の子であつたら、イヨルフといふ名前をつけられるところであつただよ。

アスタ えゝ、それは全く——でもあなたは大學へいらつしやるやうになつた時——「思はず微笑する」——どうしてあなたはあんなに子供らしかつたのでせうね——

アルメルス 子供らしい。わたしが子供らしかつたかい。

アスタ えゝ——とにかくわたしが覚えてゐるところでは

さう思はれたのですよ。だつてあなたは男のきやうだいがなくつて——妹一人しかないのを、きまり悪がついてらしたのですもの。

アルメルス いやはや、とんでもない。それはお前の方だよ、お前こそきまりわるがつてゐたのだよ。

アスタ さうね、それはわたしもきつと、少しぐらゐきまりわるがつてゐたかも知れせんわ。それでわたし、何だかあなたがお氣の毒だつたのよ。

アルメルス どうもさうらしかつたね。それでよくお前は子供の時分の古着をひっぱり出しては——

アスタ 全くね、上等の晴着をね。あなたまだ、あの水色のブルーズと半ズボンを覚えていらしつて。

アルメルス 「相手にじつと目をすゑる」お前があの服を着て歩きまはつてゐる姿が、あり／＼と目に浮ぶやうだ。

アスタ でもそれはほんの二人つきりで、家にゐる時だけでしたわ。

アルメルス それでお互が随分眞面目くさつて、勿體ぶつてゐたことを——お前、まだおぼえてゐるかい。それでわたしは始終お前のことを、イヨルフと呼んでゐたのだよ。

アスタ でもまさかあなたは、この話をリータさんになさ

りはしなかつたでせうね、にいさま。

アルメルス どうも、一度話したことがあるやうだよ。

アスタ まあ、にいさま、どうしてそんなことを。

アルメルス まあさ——それは何だつて細君には話してしまふものだよ——まあ大抵のことはね。

アスタ えゝ、まあ、さういふものでせうね。

アルメルス 「目がさめたやうに額をおさへて飛びあがる」

アスタ 「立上がり、氣づかはずはしきうに相手の顔を見る」どうなさつたの。

アルメルス あれのことを殆ど忘れかけてゐた。まるで忘れてしまつてゐたやうなのだ。

アスタ まあ、イヨルフを。

アルメルス そのくせわたしはこゝに坐つて追憶に耽つてゐるのだ。それでゐてあの子のことは思ひ出さなかつたのだ。

アスタ でもにいさま、——小さいイヨルフのことはやはり始終影身につきまゝとつてゐたのです。

アルメルス いゝや、いゝや、あの子はわたしの念頭から消えてゐた——わたしの記憶から消えてゐた——今までかうして話をしてゐる間に、あの子の姿がちりちりとも浮

んで來なかつた。ずつとあの子のことは目の前から消えてなくなつてゐたのだ。

アスタ でもあなただつて少しは、悲しみから紛れるといふことがなくてはなりませんわ。

アルメルス いゝや、いゝや。——そんなことをしてはならないのだ。そんな法はないのだ。そんな權利はないのだ。——假りにもそれが念頭を離れるといふ法はないのだ。「興奮して右手へ歩きかける」わたしの居るべき場所、どこまでも、あの今頃、あの子が水底へ押し流されてゐるあそこなのだ——あそこばかりなのだ。

アスタ 「後から追つて行つて引き止める」にいさま、にいさま——水の方へいらしつてはいけません。

アルメルス いや、行かなくてはならない。こら、離せ、アスタ、船に乗らなくてはならないのだ。

アスタ 「きよつとして」いゝえ、水の方へいらしつてはいけませんといふに。

アルメルス 「素直に」うん、うん。——まあ止めておかう。だから離しておくれ。

アスタ 「卓の傍へ連れて来る」ねえ、にいさま、落着いて下さらなくてははいけませんよ、まあこゝへおかけなさいな。

アルメルス 「腰掛にかけようとする」よし〜〜お前のいゝやうに。

アスタ いゝえ、そこにおかけになつてはいけません。

アルメルス まあ、いゝぢやないか。

アスタ いゝえ、いけません。そこだとまた相變らず、あ

ちらばかりごらんになるのですもの——。「無理やり右

手へ背を向けて掛けさせる」さう、これでいゝのだわ。

「自分も腰掛にかけろ」さあ、これでまた少しおしやべりをしませうよ。

アルメルス 「聞えるほどの溜息をつく」まあ一時でも、苦

勞や痛手を忘れるといふことは結構なことさ。

アスタ いゝえ、せひさうなすつて下さい。

アルメルス だがそんなことの出来るといふことが、いか

にもわたしの懦弱な、鈍感な證據だと思つて、お前、い

やになりはしないか。

アスタ いゝえ、どうして。だつて人間は始終一つ考に憑

かれて、そのまはりをぐる／＼まはつてゐるわけには行

かないものですよ。

アルメルス とにかくわたしはさう行かないのさ。そのく

せお前の来るまでは、わたしも實に胸を引き裂かれるや

うな、いひやうもない苦しみをしてゐただがね——

アスタ さうでせうね。

アルメルス ところでアスタ、どうだいお前——。ふん——

アスタ なあに。

アルメルス その苦痛の中でわたしは、一體けふの晝食は

何のごちさうかしらんといふ疑問を起してゐたのだ。

アスタ 「なだめるやうに」まあ、そんなことでお氣が休ま

るなら、それも——

アルメルス うん、どうもね——全くそれが休止點のやう

なものさ。「卓越しに妹に手を差し出す」アスタ、お前と

いふものがあてくれるので、どの位うれしだらう。わ

たしは實にうれしく思つてゐるのだよ。それはうれしい

のうれしくないのつて——胸の苦勞を忘れる位だ。

アスタ 「眞面目に相手を見る」だつてあなたには、リータ

さんがお傍にゐるのが。何よりもうれしい筈ではありま

せんか。

アルメルス うん、それはいふまでもない、分かりきつた

ことだ。だがリータとわたしは身内ではない。妹——と

なるとまた別なものだよ。

アスタ 「緊張して」あなた、ほんたうにさう思つて。

アルメルス うん、うちの一家はこれでもちよつと變つてゐ

るからね。「半分冗談のやうに」うちでは昔からみんな

名前が母音ではじまつてゐるのだ。その話をせんには随

分爲合つたものではないか。それから親類といへば——

どれもこれも貧乏人ばかりさ。そして誰も彼も同じ目をしてゐるのだ。

アスタ わたしもやはりさうでせうか。

アルメルス いゝや、お前はそつくりおかあさんの方だよ。

うちのほかのものにはまるつきり似たところがな。お

とうさんにも似てゐないのだ、でも何でも——

アスタ でも何でも——

アルメルス いや、お互一緒に暮して来たお蔭で、どこか

面影を鑄つけ合つたものらしい。尤も精神的にいふのだ

がね。

アスタ 「深く感動して」そんなことをおつしやつてはい

けませんよ、にいさま。わたしこそあなたから何もかも

受けて来たのです。何事もあなたのお蔭です——世の中

へ出て役に立つたことは、みんなあなたから受けてゐた

のです。

アルメルス 「首を振る」アスタ、わたしのお蔭なんといふ

ことはありはしない。どうしてあべこべだ。

アスタ いゝえ、何もかもあなたのお蔭です。それはよく

御存じの筈ですよ、あなたに對してはどんな犠牲を拂つ

ても足りない位です。

アルメルス 「言葉を遮る」何を馬鹿な、犠牲なんて。そん

な風にいつてもらつては困るよ。——わたしはたゞお前

を可哀く思つてゐただけさ。それはずつと小さな時分か

らね。「短い間をおいて」それはかりでない、わたしの始

終氣になつてゐることは、いろ／＼道に違つたことをし

て来た、その償ひをしなければならぬことだ。

アスタ 「びつくりして」道に違つたことすつて、あなた

が。

アルメルス それは自分の都合ばかりでしたわけでもない

が。

アスタ 「緊張して」でも——

アルメルス とうさんの都合でね。

アスタ 「腰掛から立ちあがる」まあ、おとうさま——のた

めに。「またかける」それはどういふことですか、にいさ

ま。

アルメルス おとうさんは決してお前に對して十分やさし

かつたことはなかつたのだ。

アスタ 「はげしく」そんなことをいふものではありませ

ん。

アルメルス いや、さうなのだよ。おとうさんはお前をい

たはることをしなかつた。親として當然すべきことをしなかつた。

アスタ 「避けるやうに」それはきつとあなたをお可哀がりになつたやうには行かなかつたでせう。それは當り前のことですわ。

アルメルス 「言葉をつげけて」それとお前のおかあさんに對しても随分つらかつた。少くとも晩年はね。

アスタ 「小聲で」だつておかあさまはおとうさまに比べると、それはずつと若かつたのですもの。それをお忘れになつては駄目よ。

アルメルス どうも夫婦仲がしつくり行つてゐなかつたやうではなかつたかい。

アスタ 多分そんなことでしたらうね。

アルメルス それはさうとして置いてはどうも——。何しろおとうさんは、一體は随分ものやさしい、親切氣のある人なのだからね——それは誰に對しても随分やさしかつたものだ——

アスタ 「小聲で」おかあさまだつてやはり、おかあさまとしてすべきことをしていらしたとは思へません。

アルメルス お前のおかあさんが。

アスタ どうもさうばかりとはいへません。

アルメルス おとうさんに對してかい。

アスタ ええ。

アルメルス さういふことはちつとも氣がつかなかつたよ。

アスタ 「立上がり、涙をおさへながら」あゝ、アルフレッドにいさま——あの人たちを休ませておきませう——もうこの世にないあの人たちをね。「右手へ立ちかける」

アルメルス 「立上がる」うん、休ませておかうよ。「両手をしぼる」でもこの世にないあの人たちが——わたしたちを休ませてくれないのだよ、アスタ、費も夜も。

アスタ 「情の籠つた目つきで」いづれ時が来れば、アルフレッド、あなただつてもつと穩かに物ごとをお考へになるでせうよ。

アルメルス 「頼りなさきさうに相手を見る」うん、お前もさう思つてくれるだらうね——だがさてこの最初の悲しい幾日かを、これからどうして過ごしたものだらう。「しやがれ聲になつて」わたしには分からない。

アスタ 「相手の肩に両手をかけて、頼むやうに」リータさんのところへいらつしやい、お願ひですから。

アルメルス 「はげしく體を振りはなす」いゝや、いゝや、いゝや——そんなことはいはないでおくれ。いやはや、

わたしには出来ないことだ。「やゝ穩かに」わたしをここに、お前の傍にゐさせておくれ。

アスタ ええ、あなたをおいて行きはしません。

アルメルス 「アスタの手をとつてしつかりつかんでゐる」有難う。「しばらく水の面を眺める」小さいイヨルフは今頃どこにゐるだらうね。「惱ましきうに微笑する」お前ならをしてもへさうなものだね——わたしの大きな、利口な子のイヨルフさんならね。「首を振る」どうして世界中で誰一人だつて、それをやしへることは出来なないのだ。わたしの知つてゐることはたゞ一つの恐しいことだけだ、あの子がもう歸つて来ないといふことだけだ。
アスタ 「左手の方を見て手をひっこめる」あの人たちがやつて来ましたよ。

リータとボルハイムが小徑をこちらへおりて来る。女が前に立ち男が後に従ふ。女は暗色の着附、頭に黒いヴェールをかぶつてゐる。男は雨傘を脇にかゝへてゐる。

アルメルス 「妻を迎へる」どうした、リータ。

リータ 「夫の前をとほりすぎる」まあ、聞かないで下さいな。

アルメルス こゝへ何をしに来たのだ。

リータ あなたを見に来ただけだわ。何をしていらつしやるの。

アルメルス 何もしてゐない。アスタがそばにゐてくれたのだ。

リータ それはさうでせう、でもアスタさんのお出でになるまでは、あなたは襦袢すつとわたしに姿をお見せにならなかつたのです。

アルメルス わたしはこゝに腰をかけて、水をながめてゐたのだ。

リータ あら——そんなことがよ、出来てねえ。

アルメルス 「いら／＼しながら」今のところわたしは何よりも自分一人であつたのだ。

リータ 「不安げにあちこち歩く」そしてじつと坐つてゐるの、しじゆう同じ場所にね。

アルメルス わたしは何一つ爲がひのあることが世の中になくなつてしまつたのだ。

リータ わたしはどこにだつてじつとしてゐることなんぞ出来ません。取り分けこんな所には——すぐ目の前に入江の見える所になんぞ。

アルメルス 入江がすぐ傍にあればこそゐるのだ。

リータ 「ボルハイムに」ねえ、この人もわたしたちと一しよに今あちらへ行く方がいゝでせう。

ボルハイム 「アルメルスに」どうもその方がよささうですわね。

アルメルス いゝや、いゝや、わたしはこのまゝにしておいて下さい。

リータ ぢやあなた、わたしは傍にゐますわ。

アルメルス それはどうでも。——アスタ、お前もおいで。

アスタ 「ボルハイムに囁く」二人だけ置く方がいゝのよ。

ボルハイム 「悟つたやうな目つきをして」アルメルスのお嬢さん——少しそこらを歩きませう——海岸を、こんどこそお名残にね。

アスタとボルハイムは船小屋の方角へ出て行く。アルメルス二三歩あるく。さて後前景左手の木立を圍む石の上に腰をかける。

リータ 「傍によつて来て、兩手を垂れたまゝ組み合せて夫の前に立ち止まる」ねえあなた、イヨルフがもうゐなくなつてしまつたとは——どうしても思へないでせう。

アルメルス 「惱ましげに前を伏し目にじつと見る」お互さういふ考に、いやでも馴れなければならぬのだよ。

リータ とても出来ません、わたしには駄目ですわ。それ

とあの薄氣味悪い有様は、一生目の先につきまとはなれないでせう。

アルメルス 「目を上げる」どんな有様さ、どんなものを見たのだい。

リータ わたし自分では何も見たものではありません。たゞ人の話を聞いただけですわ、あゝ——

アルメルス 早く話してもらひたいなあ。

リータ わたしボルハイムさんに棧橋までつれて行つてもらつたのですよ——

アルメルス 何しに行つたのだ。

リータ どうしてさういふことになつたか、それまでの行くたてを子供たちに聞かうと思つて。

アルメルス それはもう分かつてゐるぢやないか。

リータ まだ知らないことがあります。

アルメルス さうかね。

リータ あの子がすぐと見えなくなつたといふのは、ほんたうではないのです。

アルメルス あいらは今更そんなことをいふのかい。

リータ えゝ。何でもあの子が、水の底に横になつて寝てゐるところが見えたといひますよ。澄んだ水の中の深いところに。

アルメルス 「齒をくひしばりながら」それでゐて助けようともしなかつたのか。

リータ きつと出来なかつたのでせう。

アルメルス あいらはみんな泳げるのだ——一人残らず泳げるのだが——それであの子が見えたといふのは——どんな風にして寝てゐたのだらう。その話は何もしなかつたかい。

リータ でもね。仰向けになつてゐたといひますよ。大きな目をぼつかりあけて。

アルメルス 目をぼつかりあけて。でもあくまでじつとして。

リータ えゝ、あくまでじつとして。その時何か来てさらつて行きました。早瀬の向きだといふのです。

アルメルス 「静かにうなづく」ぢやあそれなり見えなくなつてしまつたのだね。

リータ 「涙に聲をつまらせて」えゝ。

アルメルス 「沈んだ調子」もうそれで誰の——誰の目にも、あの子は見えなくなつたのだね。

リータ 「泣きながら」これからは夜も晝も、あの子が水の底に寝てゐる姿が目の前にちらつくでせう。

アルメルス 大きな目をぼつかりあけて。

リータ 「身ぶるひしながら」大きな目をぼつかりあいた姿が見えますよ。目の前に見えますよ。

アルメルス 「徐ろに立ち上がり、靜かに責めるやうな目で妻を見る」リータ、その目は不吉に見えるかい。

リータ 「青くなつて」不吉に——

アルメルス 「妻の傍へびつたりよりそふ」どうだ、その上を見あげる目つきは不吉に見えるかい。水の底から見上げる目つきは。

リータ 「身をすさる」あなた——

アルメルス 「追ひ迫る」さあ、いつてごらん。それは不吉な子供の目つきだつたか。

リータ 「呼ぶ」アルフレッド。アルフレッド。

アルメルス さて、そのとほりになつたといふものだ——ねえ、リータ、お前が望んでゐたとほりに。

リータ わたしが。わたし何をのぞんでゐたでせう。

アルメルス イヨルフがゐなくなつてくれゝばいゝと。

リータ まあわたし、つひそんなことをのぞんだおぼえはありません。イヨルフがわたしたち夫婦の仲の邪魔にならないやうに——さうわたしは望んだのです。

アルメルス うん／＼さうだらう——それでもあの子は邪魔にならなかつたのだ。

リータ 「前をじつと見つめたまゝ小聲で」多分それ以上でせうよ。「體をすくめる」あゝ、あの氣味のわるい有様は。

アルメルス 「うなづく」うん、さうだらう、不吉な子供の目が。

リータ 「きよつとしてあとじきりする」よして下さいよ、あなた、わたしあなたがおはくなりません。これまでつひそんな顔をなさつたことはなかつたのに。

アルメルス 「険しく妻の顔を見て」苦痛は人間を残酷にも、底意地わるくもするものだ。

リータ 「こはく、でも強情に」わたしにもそれはわかるわ。

アルメルス、右手の方へ行きかけて入江を眺める。
リータ、卓に向つてかける。短い間。

アルメルス 「妻の方へ顔をふり向ける」お前はあの子を決して眞心から愛してはゐなかつたのだ。決してなかつたのだ。

リータ 「冷淡に情をおさへて」イヨルフはつひぞ心からわたしになつかうとはしなかつたのです。

アルメルス それはお前がさうさせないからさ。

リータ まあそんなことは。わたしはさうして貰ひたいのだ。

ころではなかつたのです、ところが誰か邪魔をしたのです、そも／＼のはじめから。

アルメルス 「くるりと向き返る」おい、わたしがその邪魔をしたといふのかい。

リータ まあ、そんなことは。はじめはそんなことはなかつたわ。

アルメルス 「傍へよる」ぢやあ誰だ。

リータ をばさんさ。

アルメルス アスタかい。

リータ さうですよ。アスタさんが間に立つて、わたしの邪魔をしたのです。

アルメルス リータ、よくもそんなことがいへるな。

リータ いへなくつて。アスタさんは——あの子を手なづけてしまつたのです——あの出来事があると間もなく、

——ほら、例の不幸な事件があると間もなく、
アルメルス あいつがそんなことをしたにしても、やはり可哀さのあまりしたことだ。

リータ 「はげしく」さあ、そんなですよ。わたしはほかの人間と物を分け合ふなんといふことはしたくはありませんが。愛情を分けるなんといふことは。

アルメルス わたしたちはあの子に對して、平等に愛を分

け合はなければならなかつたのだよ。

リータ 「嘲るやうに夫を見る」實をいふとあなただつて、ほんたうに愛してはいらつしやらなかつたのですよ。

アルメルス 「おどろいて妻を見る」わたしが愛してゐなかつたと——

リータ えゝ、あなただつてさうなのですよ。だつてあなたは御自分の本にはまるつきりはまりこんでいらしつたんでせう——あの責任論の本に。

アルメルス 「言葉を強めて」それはさうさ。だがその本だつて——わたしはイヨルフのために犠牲にしたのだ。

リータ それもあの子が可哀いためではありません。

アルメルス ぢやあなぜだ。

リータ それはあなた御自身を信任しきれなくなつたからです。御自分が果たしてこの世の中に、大きな使命といふやうなものを持つて生れて來てゐるかどうか、疑はしくなつて來たからです。

アルメルス 「さぐるやうに」よくそんなことに氣がついたものだなあ。

リータ えゝ、それはだん／＼にね、それであなたは何かしら御自分の心を充實させる變つたものを求めておいになつたのです——わたしだけでは満足なさらなかつた

のです。

アルメルス お前、それが變化の法則だよ。

リータ そこであなたは、あの小さな可哀さうなイヨルフを神童にしたて上げようとなさつたのです。

アルメルス そんなことをわたしは思ひはしなかつた。幸福な人間にしてやりたいとは思つた。それだけがわたしの考だつたのだ。

リータ でもやはりあの子が可哀いだけではありません。心の中をさぐつてごらん下さいまし。「きまりわるさうな表情で」そして一切の事の根元をさぐつて——その奥にひそんでゐるものを、十分しらべて見てごらん下さい。

アルメルス 「妻の視線をさける」お前、なんだ。いひしぶつてゐるやうだね。

リータ あなただつてさうだわ。

アルメルス 「考へ深く妻を見る」何事もお前が考へてゐるやうな關係だとすると、お互は實に、つひぞ肉身を分けた子供を持たなかつたといふことになる。

リータ えゝ、完全にはね、愛情はほんの半分しか注がれなかつたわけです。

アルメルス そのくせお互は、今かうしてそこらをうろう

ろしながら、あの子のことをいかにも苦しさに歎いてゐるのだ。

リータ 「皮肉の調子」え、さう考へると不思議ではありませんか。よその小さな子供のために、こんなに泣いて騒ぐといふのは。

アルメルス 「興奮して」おや、どうしてよその子だなんていへるのだ。

リータ 「痛ましげに首を振る」あなた、お互は一度も子供を自分のものにしたことはなかつたのですよ。わたしもさうだし、あなただつてさうでした。

アルメルス 「両手をしぼる」今更いつても追ひつかない、あとの祭さ。

リータ 何しろまるつきり慰められるところがないのです——どちらを向いても。

アルメルス 「急にはげしい調子」お前のせゐだぞ。

リータ 「立ち上がる」わたしのせゐですつて。

アルメルス さうだ。お前だ。あの子があんなに——あんなことになつたのはお前のせゐだ。あの子が水に落ちてぬけ出ることが出来なかつたのは、お前のせゐだ。

リータ 「防ぐやうに」あなた——それをわたしになすりつけるつもりですか。

アルメルス 「よけい夢中になつて」うん、そのつもりだとも。あのかよわい子供を見てやるものもなく、卓の上に置きつばなしにしておいたのは、お前ではなかつたのか。

リータ あの子は蒲團にくるまつたま、いかにも穩かに眠つてゐたのです。それはぐつすり寝込んでゐたのですよ。その上あなたは、子供は見えてゐるから大丈夫だとおつしやつたでせう。

アルメルス うん、それはいつたとも。「聲を落す」だがそこへお前がやつて來たのだ。お前が、お前が、——そしてわたしを自分の部屋へひつぱりこんだのだ。

リータ 「強情に夫を見る」いつそ、あなたはそれで、子供も何もかも忘れてしまつたと白状なさるがい。

アルメルス 「こみ上げて來る憤りをおさへて」うん、さうだとも。「やゝ穩かに」わたしは子供のことを忘れて——お前の腕に抱かれたのだ。

リータ 「のぼせて」あなたは、——それではあんまりでせう。

アルメルス 「両手を固めて妻に向けながら小聲で」あの刹那、お前は小さいイヨルフに死の宣告を下したのだ。

リータ 「我を忘れて」あなただつてさうよ。あなただつて、——どこまでもさういふ平法で行くのならば、

アルメルス まあいゝ——わたしにも責任をかぶせるがい

い——前がさうしたければな。何でもお互に罪はあつたのだ——そこでイヨルフの死が、やはりどこまでも因果應報といふ事になるのだ。

リータ 因果應報ですつて。

アルメルス 「再び自制を恢復する」さうだ。お前とわたしの上に下つた天の裁きだ。そこでお互に當然の報いを与へたといふことになる。あの子が生きてゐた間は、お互人にははれない、あさましい行ひをしたことを、あの子に對して恥ぢなければならなかつたのだ。あの一物を——それにとりついて、飽くまでもあの子が體を引きずり歩かなければならなかつた——あれを目の前に見ることは、いかにもたまらないことだつたが——

リータ 「小聲に」松葉杖をね。

アルメルス それだよ。——そこでお互は今苦痛だ、悲哀だと名をつけてゐるものゝ、實は良心の呵責なのさ。それにきまつてゐるのだ。

リータ 「取りつく島がないやうに、夫の顔を見る」かうなるとお互は、絶望のどん底にいやでも追ひ込まれなければ——いやでも氣が違はなければなりません。だつてもうく決して——この後どうしたつて取り返しつ

けやうがないのですもの。

アルメルス 「一そう平和な氣分になつて」わたしはゆうべイヨルフの夢を見た。どうもあの子が棧橋を上がつて來るやうなのだ。それもほかの子と同じやうに駆けて來るのだ。だからもう何もあれのことでもききすることはないやうに思つたのだ。全く何のこともなかつたのだ。

あの苦しい現在の事實は、するとほんの夢にすぎなかつたのだと、わたしは一人でさう思つた。あゝ、どの位わたしはうれしく思つて感謝したことだらう——「ふと言葉を切る」ふん——

リータ 「夫の顔を見る」誰に。

アルメルス 「さけるやうに」誰にだと——

リータ え、——誰にうれしく思つて感謝なさつたのです。

アルメルス 「言葉を遮る」わたしはほんの夢を見たのだ。まあ聞かがい。

リータ 御自身の心に信じてもらつしやらないあの方にでせう。

アルメルス まあとにかくそんな風に感じたのさ。尤も寢てゐる間のことだが——

リータ 「非難をこめて」あなた、何もわたしをかうして、

取りつく島もない女にしておしまひになるには及ばなかつたでせう。

アルメルス しかしわたしとしては、たわいもない考のままで一生お前を過ごさせるのが、いゝことだとも思はれまいぢやないか。

リータ いつそわたしにはその方がましでしたらう。それだとにかく、何かしら取りつくところも、たよるところもあるのですからね。かうなるとしかし、もう出るも引くもないのです。

アルメルス 「しげく」と妻の顔を見る「お前に今その考さへあれば——。どこまでもイヨルフについて、あの子の今行つてゐる先までも行くことが出来れば——

リータ はてね。さ、するとどうです。

アルメルス お前が飽くまでそこであの子のほんたうの姿を見つけることが出来れば——あの子の心持を悟ることが出来れば——

リータ え——さうするとどうです。

アルメルス 一思ひに自分からあの子の所まで飛んで行くつもりなら。自分からあつさりこの世のことを一切諦めて行くつもりなら。地の上の生活に一切お別れを告げるつもりなら。どうだリータ、それをする氣はないか。

リータ 「小聲に」今すぐにですか。

アルメルス さうだ——けふの内に。たつた今。どうだ、直ぐ返事をおし。どうだね——

リータ 「躊躇しながら」あゝ、あなた、わたしどうしたらいいでせうね——いゝえ、駄目です。やはりわたしは當分しばらく、こゝで御一緒にゐなければならぬのだと思ひます。

アルメルス わたしのためにかい。

リータ えゝ、ほんのあなたのために。

アルメルス だがそのあとは。あとはどうするつもりだ。さあ返事をおし。

リータ そんなことにわたし答へることがあるものですか。わたしどうしたつてあなたから離れることは出来ないでせう。決して。どんな事があつたつて。

アルメルス だかもしわたしがイヨルフの所へついて行くとしたらどうだ。さうすれば無論お前はあの子と、その上わたしとも、そこで一緒にゐられるわけだらう。その時はお前わたしたちの方へ来る氣があるかい。

リータ 無論行きますわ、えゝもう、それはよろこんで、どんなにかよろこんで。でも——

アルメルス どうした。

リータ 「静かに、うめくやうに」それも出来さうもない——そんな氣がします。いゝえ、いゝえ、駄目です。とて

出来さうありません。それは金輪際出来ないことです。

アルメルス わたしも同様だ。

リータ ——さうでせう、あなた。あなただつてやはり出来さうもないでせう。

アルメルス うん、どうも。それといふのが、この世界が、地上の世界が、われ／＼生きてゐるものゝ世界だからだ。

リータ えゝ、やはりこの世界に幸福があるのですよ、わたしたちの知つてゐる幸福がね。

アルメルス 「暗い調子で」あゝ、幸福が、——幸福が——お前それを——

リータ あなたの おつしやるのはきつと——お互が二度と、手に入れることの出来ない幸福のことをおつしやるのでせう。「たづねるやうに夫の顔を見る」でもさういふ場合もあるとして——。「はげしい調子」いゝえ、いゝえ——わたし、とてもそれをいふ氣にはなりません。それを考へる氣もしません。

アルメルス まあ、いつてごらん。いつてごらん、お前。リータ 「もじ／＼しながら」どうかしてやつて見られな

いものでせうか——。どうかしてあの子のことを忘れてしまふことは出来ないものでせうか。

アルメルス イヨルフのことを忘れるのだと——

リータ 後悔と呵責を忘れる、といふ意味ですよ。

アルメルス よくもそんなことが望めたものだ。

リータ だつてそれがさう行くものなら——さうでせう。

「興奮して」だつてこんな風では、わたしこの先とてもやつてはいけませんもの。あゝ、一體お互を忘れるやうなことが何か見つかからないものでせうかね。

アルメルス 「首を振る」そんなことが出来ると思ふか。

リータ 長い旅行をやつて見たらどうでせう。

アルメルス 旅行だと。お前、どこへ行つたつて、自分の家よりほかに、氣樂なところもあるまいぢやないか。

リータ とすると——これはどうでせう、いつそ大ぜいの人をこの家へ集めてみるのは。大家内の家にするのですよ。何でもお互の心の悩みの紛れるやうな賑かな生活を

するのですよ。

アルメルス そんな生活はわたしの好みには向かない。——駄目だ——そんなことよりも、いつそもう一度著述にかゝる工夫をした方がましだ。

リータ 「不機嫌に」あの著述ですか、始終お互の間に突ッ

立つた壁のやうな、あの著述ですか。

アルメルス 「じつと妻の顔を見ながらおもむろに」お互の間には、これからよけいへだての壁が築かれるばかりだらうよ。

リータ だつてなぜでせう——

アルメルス あの大きな、ぼつかりあいた子供の目が、夜も晝も、お互のすることを見てゐないとはいはれまい。

リータ 「身ぶるひして小聲に」あなた——何て恐しいことを考へていらつしやるの。

アルメルス お互の愛情といつても、それは消えかけた残り火のやうなものであつたのだ。それも今はいやでも消えてしまふのだ。

リータ 「詰め寄る」消えてしまふ。

アルメルス 「荒く」消えてしまつたのだ——二人の中の一人の胸には。

リータ 「化石したやうに」まあ、よくもそんなことを、あなたはおつしやれたものね。

アルメルス 「やゝ穩かに」さうだ、リータ、滅びてしまつたのだよ——だがわたしが今お前に對して抱いてゐる、お互の罪は一緒に償はなければならぬといふ心持——そこに何かしら復活のほのかな光を認めてはゐるが——

リータ 「のぼせて」まあ、復活なんて、そんなことどうでもするがよい。

アルメルス リータ。

リータ だつてわたしはあつい血の燃える人間ですもの。

わたしそんなことをいつて——お魚のやうな冷たい血をこの血管の中に氷らせたまゝ、うとくしてはゐられませんが。「両手をしぼる」その上これからの生涯を——悔いと憎みの中に閉ぢこめられてゐなければならぬといふのでせう。それももう自分の夫でない、もう、もう、自分のものでない一人の男を相手に、閉ぢこめられてゐなければならぬなんて。

アルメルス リータ、いつかはそんなことにならずにはゐなかつたのだ。

リータ そんなことにならずにゐない。だつてお互の間はあれほど望んで遂げた仲ではなかつたでせうか。

アルメルス わたしの方は初めは——望んで遂げたといふわけでもなかつた。

リータ すると全體、わたしに對してどんな氣持でいらしたの。

アルメルス こはかつたのだ。

リータ それは分かるわ。でもそれなのにどうして、あな

たはわたしの手に入つたでせう。

アルメルス 「沈んだ聲で」リータ、お前は實に惚れくすりやうな美人であつたよ。

リータ 「さぐるやうに夫を見る」ぢやあそれだけのことであつたのですね。さうでせう、あなた。それだけのことでせう。

アルメルス 「僅かに自制して」いや、まだほかにもあつたよ。

リータ 「興奮して」それが何だといふことは推察がつくのですよ。それはあなたのおつしやる「金の山」でしたらう。さうでせう、あなた。

アルメルス さうだ。

リータ 「非難するやうに夫を見る」よくもそんなことが——よくもそんなことが出来てねえ。

アルメルス わたしはアスタのことも考へてやらなければならなかつたのだ。

リータ 「はげしく」アスタさんのこと——それはさうでせうよ。「にがい調子」するとほんたうはアスタさんが二人を一緒にしたやうなものですね。

アルメルス あれは何も知らないよ。つひけふまでもそれに氣がついてはゐないのだ。

リータ 「避けるやうに」でも何でも、やはりアスタさんで

したわ。「嘲るやうな横目をつかつて微笑する」いや、やさういふよりか——小さいイヨルフであつたのです。小さいイヨルフ、ね、さうでせう。

アルメルス イヨルフだと——

リータ だつてあなたはあの人のことを、せんにはイヨルフと呼んでいらしたのではありませんか。いつかさうおつしやつたと思つてゐます——或時のしめやかな話の間にね。「傍に寄る」あなたお忘れになつたの——あ、いふうつとりするやうな楽しい時のあつたことを。

アルメルス 「恐怖につかまれたやうにあとじさる」いや、何も覚えてゐない。覚えてゐたくないのだ。

リータ 「追ひすがる」しかもあの時でしたわ——あなたのもう一人の小さいイヨルフが、跛になつたのはね。

アルメルス 「卓に體を支へて、沈んだ聲で」因果應報だ。

リータ 「おどすやうに」さうです、因果應報ですよ。アスタとボルハイム、船小屋から戻つて来る。女は手に睡蓮の花を持つてゐる。

リータ 「また我にかへつて」それでアスタさん——ボルハイムさんのお話は、十分につきましたか。

アスタ え、まあ大抵。

アスタ、雨傘をわきへ置いて、一脚の椅子に花を載せる。

ボルハイム お嬢さんは散歩の間、随分口数が少かつたのですよ。

リータ まあさう。ところでアルフレッドとわたしはもう随分話をしてしまひました、それこそ——

アスタ 「緊張して、アルメルスとリータの顔を見る」それはどういふことですか。

リータ ——それこそ一生涯續くほどの話をね。「言葉を切つて」さあみなさん、御一緒にあちらへまゐりませう。わたしはこれからは、どなたか人がまはりにゐなければいけないことになつたのですよ、アルフレッドとわたしだけでは、すまなくなつたのですわ。

アルメルス まあ君たちは一足先へ行つてもらはう。「振り向く」アスタ、行く前にまだ一言お前にいつて置くことがあるのだ。

リータ 「夫を見る」さうですか。——いゝわ。それではボルハイムさん、御一緒にまゐりませう。

アスタ 「心配さうに」にいさま、今どんなことがあつたのですか。

アルメルス 「陰鬱に」いや、わたしはこの上こゝにはゐられない——それだけのことだよ。

アスタ こゝには。といふと、リータさんと御一緒にはいふのですか。

アルメルス さうさ。リータとわたしはこの上一緒に暮してはいけな……のだ。

アスタ 「兄の腕をおさへて振る」でも、にいさま——まあそんな恐しいことをおつしやるものではないわ。

アルメルス いや、その通りに違ひないのだ。わたしはお互は、意地のわるい、邪慳なことをし合つてゐるのだ。

アスタ 「氣の毒さうに」あゝ、まさか——まさかこんなことにならうとは、思ひもかけなかつた。

アルメルス わたしだつて、けふはじめてそれに氣がついたのだ。

アスタ ところであなたどうなさりたいの——。えゝ、さうですよ、にいさま、一體どうなさらうといふお考なの。

アルメルス 離れてゐたいのだ。もう一切の係累からはなれてゐたいのだ。

アスタ この世の中で、まるつきり一人ぼつちになりたいとおつしやるの。

アルメルス 「うなづく」先のやうに——さうだらう。

アスタ でもあなたは、一人ぼつちでゐられる方ではありませんよ。

アルメルス なあに。ひとりだつて、先はゐたではないか。

アスタ 先はね——それはさうよ。その代りわたしもお傍にゐましたわ。

アルメルス 「アスタの手を執らうとする」さうだとも。そこでアスタ、お前のところへ、またわたしは歸つて行きたいのだ。もとの巢へ歸つて行きたいのだ。

アスタ 「相手を避けるやうに」わたしのところへ。いゝえ、いけません。そんなことが出来るものですか。

アルメルス 「いぢらしく女を見る」ぢやあやはりボルハイムが邪魔をするのだね。

アスタ 「熱心に」まあどうして——そんなことはありません。それこそ思ひちがひですよ。

アルメルス よろしい。それではわたしはお前のところへ行く——可哀い、やさしい妹のところへね。どうしてもお前のところへ歸つて行かなくてはならないのだ。お前のところへ、元の巢へ歸つて、それで自分を浄めなくては、高めなくてはならない、夫婦の生活からうけた汚れから——

アスタ 「はつとする」アルフレッド——それではリータさ

んにすまないでせう。

アルメルス あれに對してはすまないことをして來てゐる、だがそれとこれとは話が違ふ。思ひ出しておくれ——お互が一緒にくらしてゐた時代のことを。あれははじめからしまひまで、たゞ一つの麗かな祭日といつてもいいやうなものではなかつたか。

アスタ えゝ、それはさうでしたよ。でもそんなことが、もう一度やれるものではありません。

アルメルス 「にがい調子」するとお前は、結婚生活のためにわたしといふものが、救ひやうもなく墮落してしまつたといふのか。

アスタ 「静かに」いゝえ、そんなことを思つてゐるのではありません。

アルメルス よし、そんならお互昔の生活をやり直さうではないか。

アスタ 「きつぱりと」にいさま、そんなことは出来ませないよ。

アルメルス いゝや、出来なくつてさ。なぜといつて兄と妹の間の愛情は——

アスタ 「緊張して」それが何です——

アルメルス その關係だけが、たゞ一つ、變化の法則に支

配されないのだよ。

アスタ 「體をふるはせて、小聲でいふ」でももし、そんな関係がないとしたら。

アルメルス ない——

アスタ —— 相互の関係がそれではないとしたら。

アルメルス 「ぎよつとして相手を見る」お互がさうでない。お前、それはどういふわけだ。

アスタ ねえ、アルフレッドさん、こゝでお話した方がいゝでせうね。

アルメルス どうか、して貰ひたい。

アスタ おかあさんの手紙ね——あの紙ばさみの中に入つてゐる——

アルメルス うん——

アスタ あれをぜひ讀んで頂きたいのですよ——わたしが立つたあとで。

アルメルス なぜ讀まなくてはならないのだ。

アスタ 「一人聞えながら」だつて、するとお分かりでせうからね——

アルメルス ふん、何が。

アスタ —— わたしといふものに、あなたのおとうさまの姓を名乗る権利のないといふことが。

アルメルス 「よろしくとなる」アスタ。何を前、いふのだ。

アスタ 手紙を讀んで下さい。さうすればお分かりになるでせう。——そして何かと分かつて来て——ことによると思ひやりがつくかも知れません——おかあさまに對してもね。

アルメルス 「額をおさへる」どうもわたしにはのみこめない、お前のいふ心持がはつきりとつかめない。アスタ、お前は——するとお前は、何かい——

アスタ あなたはわたしのいさまではないのですよ、アルフレッドさん。

アルメルス 「相手を見ながらそゝくさと、半ば反抗するやうに」なるほどね——だがそれにしても、何も相互の関係に變りはない筈ではないか。事實は少しも變らないではないか。

アスタ 「首を振る」いゝえ、アルフレッドさん、何もかも變つて来るのですよ。相互の関係は兄と妹といふやうなものではないのですよ。

アルメルス それはさうだらう。だがさうでないからといって、神聖なことに變りはないのだ。どこまで行つてもやはり神聖な関係なのだ。

アスタ 覚えてゐて下さいまし。——これは變化の法則に支配されることなのですよ——あなたが今しがたおつしやつたやうに。

アルメルス 「さぐるやうに相手を見る」するとお前、どういふことになるのだね、それは——

アスタ 「静かに、心の底の感動をおさへて」もう何もおつしやらないで——ねえ、やさしいアルフレッドさん——

アルメルス 「静かにうなづく」その花はあそこの——ずつと深い水の底から出て来た花だ。

アスタ あの池で取つて来たのです。あそこの入江に流れこむ池でね。「花をわたす」アルフレッドさん、受けて下さいますか。

アルメルス 「受け取る」有難う。

アスタ 「涙を目に浮べて」これは小さいイヨルフから、あなたへの最後の御挨拶のつもりですよ。

アルメルス 「相手を見る」あちらにゐるイヨルフのかい。それともお前のかい。

アスタ 「静かに」二人のイヨルフのですよ、「雨傘を取り上げる」さあそれでは、リータさんの所へ御一緒にまゐりませう。

アスタ、小徑を上がつて行く。
アルメルス 「卓の上の帽子を取り上げ、悲しきうに囁く」アスタ。——イヨルフ——小さなイヨルフ——
女のあとについて行く。

第三幕

アルメルス家の庭園の中の灌木の深く茂つた小丘。後景に向つて下る険しい傾斜地に手摺をつけてある。左手に丘へののぼり口。ずつと下にある峽灣を見はらす広い眺望。手摺の所に、綱だけついて旗のない旗竿。前景右手に涼み屋。蔓草と野生の葡萄が屋根を造つてゐる。涼み屋の前に腰掛一つ。晴れた夏の夕方おそく、空は晴れわたつてゐる。だん／＼に暮れて行く黄昏の光。

アスタ、腰掛にかけて両手を膝にのせてゐる。ジャケツを着て、帽子をかぶり、傍に日傘を置いて、女持ちの旅行鞆を紐で肩にかけてゐる。
ボルハイム、後景左手に現れる。これもやはり肩に

旅行鞆をかけてゐる、小脇に、巻いた旗をかゝへてゐる。

ボルハイム 「アスタを見つける」ぢやああなたはこんなところに來ていらしたのですね。

アスタ わたし、お名残に、かうして景色を眺めてゐるのですよ。

ボルハイム ぢやあ、こちらへ見に來て、いゝことをしましたね。

アスタ わたしを探していらしたの。

ボルハイム さうですとも。ぜひお暇乞ひをして置きたいと思ひましてね——こんど立つについてですよ。まあどうか、永久のお別れにはしたくないものですが。

アスタ 「静かに微笑を浮べて」まあほんたうに——あなたは辛抱強い方ですね。

ボルハイム それでなくては、道普請はやれませんか。

アスタ あなた、アルフレッドにお會ひでしたか。それともリータさんに。

ボルハイム お二人ともお目にかゝりました。

アスタ 一しよにをりまして

ボルハイム いゝえ。別々においででした。

アスタ あなた、その旗をどうなさるの。

ボルハイム 奥さんから、上げてくれといふお頼みでしてね。

アスタ 上げるのですつて。今頃。

ボルハイム 半旗にね。夜も晝も上げておくのだとおつしやるのです。

アスタ 「溜息をつく」リータさんもお氣の毒ね。アルフレッドも氣の毒ですわ。

ボルハイム 「せつせと旗にかゝりながら」あなた、あの人たちをおいて思ひきつてお立ちになるのもりですか。だつて、その通り旅行の支度をしておいでせう。——ですからおたづねするのです。

アスタ 「小聲で」わたしせひ行かなくてはならないのよ。

ボルハイム さうですか、せひといふわけですと——

アスタ すると、あなたもやはり今夜お立ちになるのですか。

ボルハイム 御同様せひ立たなくてはなりません。わたしは汽車でまゐります、あなたも汽車ですか。

アスタ いゝえ、汽船でまゐります。

ボルハイム 「ぬすむやうに相手を見る」ぢやあ、お互別々の道を行くのですね。

アスタ えゝ。

男が旗を半旗にして上げる間、女はそれを見てゐる。旗を上げてしまふと、男は女の傍へよつて來る。

ボルハイム アスタさん——まあわたしが小さいイヨルフのことをどれほど痛ましく思つてゐるか、あなたには想像がつかずまい。

アスタ 「相手を見る」えゝ、それはわたしよく承知してゐるのですよ。

ボルハイム それでまことに苦しい氣持でならないのです。實をいふと、痛ましく思ふなんといふことは、てんでわたしの柄ではないのですからね。

アスタ 「目を上げて旗を見る」それも時が來れば、消えて行きます、きれいさつぱりとね、それはどんな苦痛でも。

ボルハイム どんな苦痛でも。さうお思ひですか。

アスタ 夕立に會ふやうなものですよ。その場所からとほのいてしまへば、それでも——

ボルハイム その代り随分遠方までもどいてゐなくてはなりませんまい。

アスタ その上あなたには、例の大きな新しい道路工事があたりでせう。

ボルハイム でも傍にゐて、助けられるものがないのです。

アスタ どなたかお出來になるでせう。

ボルハイム 「首を振る」何かあるのですか、それは喜びを分けるだけの相手もありはしないのです。何しろ喜びを分けるといふことは、何をおいてもしなければならぬいことなのですからね。

アスタ 勞苦や心配を分け合ふわけではないのですね。

ボルハイム ふん——そんなものは自分一人で背負へば澤山ですよ。

アスタ でも喜びは——喜びは誰かと分け合はなければならぬ、とおつしやるのですね。

ボルハイム さうです、だつてそれがなければ、せつかく喜ぶかひがないではありませんか。

アスタ まあそんなものでせうね。

ボルハイム 勿論しばらくの間は、一人でもこゝとびまはつてもゐられませう。でもさういふことで長つゞきはしませんよ。さうです——喜びはやはり二人で分けるに限ります。

アスタ いつも二人に極つてゐるでせうか、それより多くなつては駄目でせうか——大ぜいになつてはね。

ボルハイム さあ、さうなると、問題が違つて來ますよ——
アスタさん——あなたはやはりどうしても、思ひ切つて
幸福と喜び、それから——勞苦と心配を、一人の人間と
分け合ふ決心はつきませんか——たゞ一人の人間を相手
にね。

アスタ わたし先にやつてみたことはあるのです——前に
一度。

ボルハイム さうでしたか。

アスタ あの時分にはね、にいさんと——アルフレッドと、
二人で、家を持つてみました時分にはね。

ボルハイム なるほど。おにいさまと。しかしそれはまる
つきり違つたものですよ、まあさういふ生活は、わたし
にはせると、幸福などいふよりも、満足した生活とい
ふのでせう。

アスタ でもやはり面白うございましたわ。

ボルハイム そら、ごらんなさい——それだけでも面白か
つたのでせう。それがもしさうでなく——相手があなた
のおにいさまでなかつたら、どうでしたらう。

アスタ 「立上がりがけて、やはり坐つたまゝである」そ
れだつたら、二人一緒にくらすことなんぞはなかつたで
せう。なぜといひますと、あの時分はわたし、まだ子供

でしたもの。それにあの人がだつて、やはりそんなもので
したわ。

ボルハイム 「短い間をおいて」その時代は實際そんなに
面白かつたのですか。

アスタ え、それはあなた、全く面白かつたのですよ。

ボルハイム ではその頃あなたは、實際、歡喜と幸福の内
に暮らしていらしたわけですね。

アスタ え、え、それは随分。もうおそろしく澤山のね。

ボルハイム アスタさん、そんなら少し話して聞かせて下
さいませんか。

アスタ なあに、ちよつとしたことばかりでしたよ。

ボルハイム たとへていつてみると。——ねえ。

アスタ たとへていつてみると、アルフレッドが試験を受
けて、立派な成績で及第したといふやうなこともありま
す。それからしばらくして、ある學校に奉職するやうにな
つたことだの。または論文を書いて、わたしに讀んで聞
かせてくれたことだの。それからそれが雑誌に載つたこ
とだの。

ボルハイム なるほど、それはわたしにもよく分かります
よ。それは面白い、不足のない生活に違ひはありません。
きやうだいて喜びを分け合ふのですからね。「首を振

る」ところでわたしの腑に十分落ちないことは、おにい
さまがどうしてあなたと別居する氣になられたでせう。

それですよ、アスタさん。

アスタ 「興奮をおさへて」だつてアルフレッドは結婚した
のですもの。

ボルハイム でもそれは、あなたにはつらいことでしたら
う。どうです。

アスタ え、え——はじめの内はね。まあ、だしぬけ
にあの人を取られてしまつたやうな氣がしましたわ。

ボルハイム さうでせう。まあ偽合せとそれほどのこと
はなかつたのですね。

アスタ え。

ボルハイム それにしてもやはり——どうしておにいさま
がそこまで思ひきれたでせうね。つまり結婚されたでせ
うね。だつてそのまゝお家で、あなたと二人きりで暮し
て行けば行けるのでせう。

アスタ 「じつと前を見る」きつとそれは變化の法則に従
つたのでせうよ。

ボルハイム 變化の法則ですと——

アスタ アルフレッドはさういふのですよ。

ボルハイム ふん——そんなものは下らない法則にちがひ

ない。そんな法則なぞわたしは信じません。てんで信じ
ないのです。

アスタ 「立上がる」やがてあなたがそれをお信じになる
時が來るかも知れせんわ。

ボルハイム 一信するものですか。「迫るやうに」とこ
ろでアスタさん、まあ聞いて下さい。どうかよく考へて
下さい——ぜひもう一遍。例の話ですがね——

アスタ 「言葉を進めて」だつていけません、いけません、
——またその話はやめて頂きます。

ボルハイム 「前のやうに」でも、アスタさん——わたしと
してはさう手軽にあなたから離れるわけには行かないの
ですよ。今ではおにいさまは恐らく望んでいらしただ
けのものは、残らず手に入れておいでなのです。あなた
なしでも何不足のない生活をおくつてゐられるのです。
あなたなしでもお困りにはならないのです。——その上
こんどの事情で——あなたといふものが、こゝのおうち
で持つておいでの位置が、がらりと變つてしまつたので
す——

アスタ 「きよつとして」おや、それはどういふことで
か。

ボルハイム お子さんがなくなつたことですよ。ほかに何

があるのですか。

アスタ 「また自分に選つて」小さいイヨルフはもうをりません——それは全くです。

ボルハイム さうなると全體 なたはこゝに何をなさることがあるのです。不憫なあのお子さんのことでもうお世話をやくことはないのですよ。何の義務もないのです——

アスタ あゝ、もうどうぞ、ボルハイムさん——そんな風にはげしくお責めにならないで下さいよ。

ボルハイム だつてどうも。やるところまでやつて見ないのは、よくないことだと思はれるのです。もうあすはわたしもこの町を去るのですよ。これなり二度と出會ふことがないかも知れません。それは長い、長い年月の間には、またお目にかゝることもないではありませんまい、しかしその間にはどんなことが起るか知れたものではありません。

アスタ 「真面目な微笑を浮べて」するとやはりあなたも、變化の法則を恐れていらつしやるわけですね。

ボルハイム いや、ちつとも恐れてはるませんよ。「にが笑ひをする」だつて何も變化することなどないのですよ。あなたの方にはですよ。だつてあなたはわたしのこ

とをさう大して考へても下さらないやうですからね。

アスタ そんなことのないことは、あなたは御存じの筈ですよ。

ボルハイム えゝ、でも十分といふわけには行かないのです。わたしがさうありたいと思つてゐるやうなものではなかつたのです。「興奮して来て」まったくですよ、アスタさん——ねえ、アスタさん——何もかも間違ひきつたことばかりですよ。けふとあすをすこせば、すぐそのあとに、生活の幸福がわたし達を待つてゐるのですよ。それなのにわたし達は手にとらずに棄てて置くのです。アスタさん、いつかそれを後悔する時がくるでせうよ。

アスタ 「静かに」それは分かりません。でもたゞお互にさういふ輝かしい希望は、すべて思ひ切らなければならぬと思ふだけです。

ボルハイム 「自分をおさへて相手を見る」するとわたしは一人ぼつち、自分の道をきり開いて行かなければならぬのですか。

アスタ 「熱情をこめて」まあ、わたしのやうなものでも、お力になることが出来さへすればね。あなたのためにいくらかでも苦勞を軽くして上げることが出来ませう。あなたと一緒に喜びを分け合ふことも——

ボルハイム あなた、してくれませんか——それができれば。アスタ えゝ。それができさうな事なら、いたしてもよいのですが。

ボルハイム ところができさうでないといふのですね。アスタ 「目を伏せる」わたしを半分だけ所有するといふことに満足して下さるでせうか。

ボルハイム いや、それはあくまで全部をわたしのものにしたければなりません。

アスタ 「男を見て小聲にいふ」するとわたしには出来ません。

ボルハイム ぢやあ、ごきげんよくおくらしなさい、お嬢さん。

つと行きかける。その時アルメルスが後景左手の丘路を上がつて来る。ボルハイム立止まる。

アルメルス 「まだ丘路の上で、涼み屋を指さして、沈んだ聲でたづねる」リータはそこにゐますか。

ボルハイム いや、アスタさんはおいでですが、ほかに誰も。

アルメルス 「傍へ来る」アスタ 「彼を出迎へる」わたし、行つて探して来ませう。こちらへいらつしやるやうに、さういふのでせう。

アルメルス 「拒むやうに」いや、いや。——まあ、よろしい。「ボルハイムに」あの旗は君が上げたのですか。ボルハイム えゝ、奥さんがさうおつしやつたものですか。それでこゝへ上がつて来たのです。

アルメルス そこで君は今夜立ちますか。ボルハイム えゝ、今夜こそは本氣に立ちます。

アルメルス 「アスタをちらりと見て」ところで結構な道連れが出来たといふものだね。どうもさうらしい。

ボルハイム 「首を振る」いや、僕は一人ですよ。アルメルス 「びつくりして」一人だ。

ボルハイム 全くの一人ぼつち。アルメルス 「うつとりと」はあさう——はあさう。

ボルハイム その上どこまでも一人ぼつちであるのですよ。アルメルス どうも一人ぼつちであるといふのは、何となく薄氣味のわるいものだね。さう聞いただけで、わたしは體中ぞつとするやうだ——

アスタ でもアルフレッドさん、あなたはお一人ではないではありませんか。

アルメルス アスタ、それでも何たか薄氣味がわるいのだよ。

アスタ 「胸苦しきうに」まあ、どうぞそんなことをいはないで下さい。そんなことを考へないで下さい。

アルメルス 「相手のいふことは聞かずに」するとお前さんは、一緒には出かけないのだね。何にも繋がるものがないのだね。そんなら何だつてこのまゝこゝにゐないのだから、わたしと一緒に——そしてそれからリータと一緒にね。

アスタ 「不安さうに」だつてそれは出来ませんわ。わたしどうしたつて、今度は町へ歸らなくてはならないのです。

アルメルス でも町へ行くだけだよ、いゝかい、アスタ。

アスタ えゝ。

アルメルス それからすぐと歸つて来るといふ約束をしておくれ。

アスタ 「早口に」いゝえ、いゝえ——そんなことをはじめからお約束はしかねます。

アルメルス よし。ぢやあいゝやうにするさ。それではいづれ町で會ふことにしよう。

アスタ 「頼むやうに」でも、アルフレッドさん、これからやはりあなたは、リータさんと御一しよに家にいらつしやらなくてはいけませんよ。

アルメルス 「それには答へずに、ボルハイムの方を向く」

多分かうなると君も、旅の道連れがない方が、いつそいいのではないか。

ボルハイム 「我知らず」どうしてそんなことがおつしやれるでせう。

アルメルス だつて、それは今からどうなるか、分かつたものではないからね、これから行くと——誰か——途中で出會ふものがないとは限らないからね。

アスタ 「我知らず」アルフレッドさん。

アルメルス ほんたうの道連れにね。おくれればせではあるが。おくれればせに違ひないよ。

アスタ 「慄へながら、小聲に」アルフレッドさん、アルフレッドさん。

ボルハイム 「二人を互違ひに見る」これはどうしたといふのだらう。わたしにはわからない——

リータ、後景左手に現れる。

リータ 「訴へるやうに」みなさん、わたしをおきざりになさつてはいやですよ。

アスタ 「リータを出迎へる」だつてあなた一人であたいとおつしやつたでせう——

リータ えゝ——でもわたし、よても我慢が出来なくなりましたの。だつて随分氣味のわるいほど薄暗くなつたで

せう。もう何だか、あの大きな、ぼつかりあいてゐる目が、わたしを見てゐるやうなのです。

アスタ 「同情するやうにやさしい聲で」まあリータさん、そんなことがあつたにしても、何でもないのでせう。こはがることはないですよ。

リータ どうしてそんなことがいへるでせう。こはくはないなんて。

アルメルス 「迫るやうに」アスタ、お願ひだ——後生一生のお願ひだ——こゝにゐておくれ——リータと一しよにね。

リータ えゝ、さうよ。そしてアルフレッドとも一しよにね。さうして下さいよ。ねえ、アスタさん。さうして下さいよ。

アスタ 「一人で聞えながら」まあ、わたし、それはさうしてあげたいのは、山々なのですけれどね——

リータ まあ、ぢやあさうして下さいよ。だつてアルフレッドとわたしと二人きりでは、とてもこの悲しみにも悩みにも、堪へて行くことは出来ません。

アルメルス 「陰鬱な調子」いつそ——後悔と呵責といふがいゝ。

リータ 何とでもいゝやうにおつしやつして下さい——とに

かくわたしたちだけでは、こらへて行くことは出来さうにもないのですよ。ねえ、アスタさん、後生だからさうして下さいな。こゝにいつまでもゐて、わたしたちの力になつて下さいよ。イヨルフの代りになると思つて——

アスタ 「あとじきりする」イヨルフの——

リータ だつていゝでせう、あなた——

アルメルス それはそのつもりになつてして貰へるなら、リータ だつてあなたはこの人を、先にあなたの小さいイヨルフと呼んでいらしたつたのでせう。「アスタの手を握る」アスタさん、これからはあなたが、わたしたちのイヨルフになつて下さるのよ。昔にかへつて、あなたがイヨルフになるのですよ。

アルメルス 「興奮をおさへて」ゐておくれ、アスタ——、わたしと一しよにくらしておくれ。リータと一しよに。わたしと一しよに。お前のにいさんと——このわたしと一しよにね。

アスタ 「思ひきつて執られた手を振りはずす」いゝえ。わたしには出来ません。「振り向く」ボルハイムさん——

汽船はいつ出るのです。

ボルハイム 今すぐに。

アスタ ぢやあ、わたし乗りこまなくてはなりませんわ。

あなた、一しよに来て下さいませか。

ホルハイム 「こみ上げて来る喜びをおさへて」行くかとおつしやるのですか。え、え、行きませすとも。

アスタ それではまゐりませう。

リータ 「静かに」あらさう。まあ、それではやはり、ゐて下さるわけにはいかないのね。

アスタ 「リータを抱く」リータさん、いろ／＼と有難うございました。「アルメルスの方へ行き、その手を握る」アルフレッドさん——御機嫌よろしう——くれ／＼も。

アルメルス 「緊張して小聲に」アスタ、どうしたといふことだ。それではまるで逃げ出すやうなものではないか。

アスタ 「心切かな苦痛をこらへて」さうですよ、アルフレッドさん——全く逃げるやうなものです。

アルメルス 逃げるのだとも——わたしから。

アスタ 「囁くやうに」あなたから逃げるのと——それからわたし自身から。

アルメルス 「あとじさりする」あゝ——

アスタ、後景の方へ丘路をおりて急いで行く。ホルハイム、帽子を振つてそのあとにつゞく。

リータ、涼み屋の入口によりかゝつてゐる。アルメルス、いよ／＼はげしく高まつて来る感情をおさへて、

手摺の方へ行き、そこにじつと立ち止まつたまゝ下をながめてゐる。間。

アルメルス 「振り向いて、いや／＼ながら、つとめて落ちついた調子でいふ」汽船が入つて来る。ごらん、あれを、リータ。

リータ わたし、見る氣になれません。

アルメルス 見る氣になれない。

リータ え、だつて汽船は赤い目をしてゐます。それから青い目を。大きな燃えるやうな目を。

アルメルス だつて、あれは明りぢやないか。

リータ い、え、目ですよ。これから先目になるのですよ。わたしにはね。それは暗闇の中からぎよろ／＼こちらを見るのですよ。——それから暗闇の中をのぞくのですよ。

アルメルス 今船がつく。

リータ けふはどこへつくでせう。

アルメルス 「傍へよる」でもお前、いつものとほりさ、棧橋につくのさ——

リータ 「立上がる」だつてよくもあそこへつけられますね。

アルメルス だつて、やはり爲方がないさ。

リータ でもあそこにはイヨルフがゐるのですよ。どうし

てそんなところへ船をつけることなんぞ出来るものですか。

アルメルス うん、世の中は無慈悲なものだよ、リータ。

リータ 人間は心なしなものです。思ひやりといふことなどまるでありやしない。生きてゐるものに對しても、死んだものに對しても。

アルメルス それはお前のいふとほりだ。人間の世は行くだけの路をかまはず行く。それはまるで何事も起らなかつたやうにね。

リータ 「じつと前を見つめる」また何も起りはしなかつたのですからね、むろんほかの人にしてみればね。何事もわたしたち二人だけのことですよ。

アルメルス 「苦痛を新しく感じて来て」さうだよ、リータ。——お前が痛い思ひをして、苦しい思ひをして、あの子を生んだのも、無駄なことだつたよ。このとほりまたゐなくなつてしまつて——あとには影も形も残らないのだからね。

リータ 秋葉杖だけが残つてゐますわ。

アルメルス 「はげしい調子で」まあお黙り、もうその言葉をいつてくれるな。

リータ 「訴へるやうに」まあ、もうあの子がゐないのだと

思ふだけでも、わたし、たまりませんわ。

アルメルス 「冷淡に、にが／＼しく」あの子がまだゐた時分、お前は結構あの子なしでゐられたではないか。それはまる半日つひ顔を見ないでもゐられたのだ。

リータ だつて見たいと思へば、いつでも見られると思つてゐたものですからね。

アルメルス そんな具合でわたしたちは小さいイヨルフと一しよにくらした短い月日を、無駄にしてしまつたのだ。

リータ 「耳を澄して、恐しきうに」あれお聞きなさい。あのとほりまだ鐘が鳴つてゐますよ。

アルメルス 「向うを見る」鐘を鳴らしてゐるのは汽船だよ。もうすぐと出て行くのだ。

リータ まあ、あの鐘のことをわたしはいふのではありません。せん。まる一日わたしの身につけてはなれないあの音ですよ——ほら、また鳴つてゐます。

アルメルス 「リータの傍へよる」リータ、お前の聞きぢがひだよ。

リータ い、え——それはつきりと聞えるのですよ。まるでお葬ひの鐘のやうな音ですよ。ゆつくり。ゆつくり。そしていつも同じ言葉なのです。

アルメルス 言葉だと。どういふ言葉だ。

リータ 「頭で拍子をとる」「そら松葉杖が浮いてゐる。」
——「そら松葉杖が浮いてゐる。」あゝ、きつとあなたにも聞えたに違ひありません。

アルメルス 「首を振る」何も聞えない。何もそんなものはないはしない。

リータ だつて、だつて——何とでもおつしやるがいよ。わたしにははつきりと聞えるのです。

アルメルス 「手摺から下を見おろす」もうみんな船につた。汽船は町へ向つて出て行く。

リータ まあどうしてあなたには聞えないのでせう。「そら松葉杖が浮いてゐる。」そら松葉杖が——

アルメルス 「傍へよつて来る」お前、いつまでもありもしないものゝ音を聞かうとしてさわいでも、爲方がないよ。

アスタとボルハイムが今船に乗つてゐるといふのに。もう出る所だ——アスタは行つてしまつたぞ。

リータ 「おづ／＼夫の顔を見る」ぢやあきつと、あなたもすぐお出かけになるのでせう。

アルメルス 「早口に」それはどういふわけだ。

リータ 妹さんのあとを追つていらつしやるのでせう。

アルメルス アスタがそんなことをいつたかい。
リータ いゝえ。だつてあなた御自分でおつしやつたでせ

う。わたし達お互が一緒になつたのだつて——アスタさんのためを思つた結果だと。

アルメルス さうさ——だがお前が、お前といふものがやはり、わたしを繋いでしまつたのだ、同棲といふことで。

リータ あゝ、あなたのお目には、わたしといふものが、——もうそんな——うつとりするやうな美人ではなくなつたのですね。

アルメルス さうはいつてもやはり、變化の法則が結局二人を一しよにしておくのかも知れない。

リータ 「徐ろにうなづく」さういへば全く、その變化がわたしの心の中に起つてゐるのです。わたしそれを苦しみながら感じてゐるのです。

アルメルス 苦しみながら。

リータ えゝ、それはお産をするやうなものですからね。

アルメルス それはさうだ。あるひは復活といふのだらう。——さう高い生活へのうつり變りだ。

リータ 「喪心したもののやうに、向うをじつと見る」さうですよ——でもそれはありとあらゆる生活の喜びを残らず失つた後の移り變りです。

アルメルス 失ふことはやがて得ることだ。

リータ 「はげしく」まあ、何といふ口前でせう。何とおつ

しやつても、わたしたちはつまりたゞの人間ですからね。

アルメルス その代りにリータ、空にも海にもやはり少しづゝの縁故はあるのだよ。

リータ あなたはさうかも知れない。わたしは違ひます。

アルメルス なあにそんなことが。それはお前が考へてゐるやうなものではないよ。

リータ 「二足傍へよる」ねえ、あなた——また例の著述に取りついて見る氣にはなれさうありませんか。

アルメルス あれほどお前が目の敵かたみにしてゐた著述にか

い。

リータ わたし、いやでなくなつたのですよ。あなたの本のお爲事を半分手傳つて上げた氣になつたのですよ。

アルメルス どうして。

リータ それはたゞ、あなたに傍にゐて頂きたいためですよ。わたしの傍に引きつけてね。

アルメルス いやはや——リータ、とてもわたしには大したことはして上げられまいよ。

リータ その代りわたし、あなたにして上げることが出来るかも知れせんわ。

アルメルス 著述の爲事でない。

リータ いゝえ。生活の上で。

アルメルス 「首を振る」どうもわたしはこの先生活らしい生活をして行くことは出来さうもない。

リータ ぢやあせめて、生活にたへて行くだけのことも。

アルメルス 「陰鬱に、前に目を向けて」お互のためには、どうも別れてしまふのが一ばんだと思ふよ。

リータ 「さぐるやうに夫を見る」すると一體どこへ逃げて行かうといふおつもりなの。やはりアスタさんのところへですか。

アルメルス いゝや。アスタのところへはもう決して行かない。

リータ そんならどこでせう。

アルメルス 孤獨の中へ出て行くのだ。

リータ 山の中へね。さうでせう。

アルメルス うん。

リータ でもそんなことは、あなた、ほんの夢のやうなものですよ。そんな山の中なんぞでくらすことが出来るものですか。

アルメルス それでもやはりそこへわたしは心がひかれるのだ。

リータ なぜでせうね。わけを話して下さい。

アルメルス まあおかけ。それでは少し話して上げようよ。

リータ それは山の中であなたが出會ひになつたことですか。

アルメルス うん。

リータ そしてアスタさんにもだまつていらしたことですか。

アルメルス うん。

リータ あなたは何でもそんな風にいつでも、御自分一人で承知していらつしやるのね。それがいけないのよ。

アルメルス こゝへおかけ、それでは話して上げるから。

リータ えゝ、えゝ——伺ひませう。

涼み屋の前の腰掛に腰をかける。

アルメルス わたしはたゞ一人山の上へ上がつて行つた、

高い山の中へ分け入つたのだ。やがて大きな寂しい湖水の傍へ出た。ところでその湖水を向うへ渡らなければならなかつた。だがそんなわけには行かないのだ。何しろ船もなければ、人もゐないのだからね。

リータ まあ、それで。

アルメルス そこでわたしはでたらめに、横の谷間へ入つて行つた。まあそこへ行けば、向うへ出る道があるだらうと思つたのだ。——山を越して岩の狭間をぬけて行く道がね。それを通つて、うまく湖水の向うへおりて行けよ

うと思つたのだ。

リータ それで無論、お迷ひになつたでせう。

アルメルス さうだよ。方角を取り違へたのだ。何しろ本道にも小徑にも何にもなかつたのだからね。それでわたしはまる一日ぐんぐん歩きとほした。その晩一晩やはり歩いた。とうぐんぐん、これは二度と再び人間の世界へ出ることはないのではないか、と疑ふやうになつた。

リータ 二度と再びわたしたちのところへ——この家へでせう。あゝ、それは無論一圓にうちのことか戀しくおなりなかつたに違ひはないわ。

アルメルス いゝや——それがさうでないのだよ。

リータ さうでないのですつて。

アルメルス うん、妙だねえ——どうもわたしにはお前さんたちが、お前さんも、イヨルフも、ずつと遠い、縁のはなれたものゝやうに思はれたのだ。アスタだつてやはりさうだよ。

リータ するとどんなことを考へていらしたのでせう。

アルメルス わたしはまるで考へたぞはしなかつた。まあ何でも崖ふちについて、體を引きずつて歩いたのだね。そして死の感覚の平和と幸福を味はつてゐたのだよ。

リータ 「とび上がる」まあそんな恐いことを。そんな風

におつしやらないで下さい。

アルメルス いや、全くさう感じたのだよ。恐いなんと思はなかつた。どうやらわたしは死と仲のいゝ道連れになつて、歩いて行くやうに思はれたのだ。何事もその時は至つて自然に、至つて無雜作に思はれたのだ。一體わたしの一家は、昔から長生きをしないことになつてゐるからね——

リータ もうあなた、そんなことをいふのはおよしなさいよ。何のかのといつても、やはりあなたは達者で、そこから出ていらしたのではありませんか。

アルメルス うん——やはりわたしは知らない間に目的の地についてゐたのさ。湖水の向う岸へね。

リータ なるほどそれはさぞ恐しい一晩でしたらう。たゞすんだあとでは、さうだとはいふなさいのでせう。

アルメルス その晩わたしは急に決心をしたのだ。そこで踵をかへしてすぐとうちへ歸つて來たのだ。イヨルフの所へね。

リータ 「静かに」遅ればせにね。

アルメルス うん。するともう——あの——道連れが追つかけてやつて來て、あの子をつれて行つたのだ——。そこでわたしは今更その道連れがつく／＼恐しくなつた。

何といつても恐しい。それは何よりも恐しい——とてもその手に自分を委せる氣はしないのだよ。まあリータ、そんな風にお互はこの世にほだしがあるのだ——お前にしてもわたしにしても。

リータ 「喜びの輝きを見せて」えゝ、やはりさうでせう。あなただつて。「傍へよる」あゝ、だからもう行けるところまで、一しよに生きて行きませうよ。

アルメルス 「肩を聳かす」生きて行く、なるほど。但し生きがひのあることは何もないのだ。どこをどう眺めまはしても空の空だ。

リータ 「心配さうに」あなた、おそかれ早かれ、やはりあなたはわたしをおすてになるのね。わたし、そんな氣がします。それはお顔を見ても分かるのですよ。わたしをおいて、出ていらつしやるでせう。

アルメルス 例の道連れについてかい。

リータ いゝえ——もつとわるいことですよ。自分から進んでわたしをすてゝお行きになるのでせう。だつてあなたはこゝにかうしていらしたのでは、生きてゐるだけのかひがないとおつしやるでせう。ねえ、さうでせう。あなたのお考はやはりそこでせう。

アルメルス 「じつと妻を見る」で、それがわたしの考だと

したらどうだ——

遠く海濱から、はげしい、怒りたけつて叫ぶやうな
聲が、がや／＼騒がしく聞えて来る。アルメルス手
摺の方へ行く。

リータ 何でせう。「興奮して」まあ見て下さいよ。あの子
が見つかつたのですよ。

アルメルス どうして、あれは見つかりつこがあるものか。

リータ すると何でせう。あれは。

アルメルス 「また傍へ来る」つまらない喧嘩さ、——例の
とほり。

リータ 下の濱ですか。

アルメルス さうだ。どうもあの濱の村は、根こそぎ片付け
てしまはなければだめだな。あのとほり濱の男たちが、
今うちへ歸つて来る。例によつて酔っぱらつてゐる。子
供たちをなぐりつける。まあお聞き、あのとほり子供た
ちの泣き叫ぶ聲を。女どもは金切聲を上げて助けを呼ん
でゐる——

リータ さうね、誰か助けに人をやりませうか。

アルメルス 「荒く慳食に」助けにやる。あいつらを。あい
つらはイヨルフを助けてはくれなかつたぢやないか。な
あに、あいつらはどうでもなるがいよ——イヨルフを見

殺しにして、構ひもつけなかつた奴らのことだ。

リータ まあ、そんなことをおつしやるものではありませ
んわ。そんなことを思ふなんて。

アルメルス だつてほかに考へやうがないのだ。あの古ぼ
けた小屋を、残らず叩きこはしてしまふがよいのだ。

リータ さうすれば大勢貧乏な人たちはどうなるでせう。

アルメルス どこかほかに住居を探すがよいのさ。

リータ まあ、それで子供たちは。

アルメルス どこへどうならうと、何も構つたことではな
いさ。

リータ 「穩かに責める調子」あなた、わざとそんな残酷な
ことをおつしやらなくてはならないのね。

アルメルス 「はげしく」なあに残酷にするのが、これから
わたしの立派な権利なのだ。いや、義務なのだ。

リータ 義務ですつて。

アルメルス イヨルフに對するわたしの義務さ。あの子の
ために復讐をしないと云ふ法はない、リータ、手つとり
早くいつておく。わたしのいひたいことはかうだ。これ
だけよく覚えておいておくれ。あの村の建物残らずぶち
こはしてしまふのだ——わたしが出て行つたあとでは。

リータ 「眞面目に夫を見つ」あなたが出ておしまひにな

つたあとですつて。

アルメルス さうさ。それでお前も、はじめて、とにかく
何かしら、生活を充たす何物かが得られるといふものだ。
お前にはぜひそれが必要なのだ。

リータ 「きつぱりと」それはおつしやるとほりです。ぜひ
それは必要なこととせう。でも一體あなたが行つておし
まひになつたあとで、どんなことをわたしがすると思つ
ていらつしやるの。

アルメルス はてね、何だらう。

リータ 「徐ろに、きつぱりした調子で」あなたが出て行つ
ておしまひになつたら、さつそくわたしは濱へおりて行
つて、あの可哀さうな、寄るべのない子供たちを、一人残
らず集めて、このうちへ連れて来るつもりです。無教育
の子供たちを一人残らずね——

アルメルス その子供たちをどうするつもりだ。

リータ 引き取つてやるのですよ。

アルメルス お前がかい。
リータ え、さうするつもりです。あなたがわたしをす
て、出ていらしつたその日から、みんな一人残らずこゝ
へとめてやつて——そつくり自分の子供のやうにして可
哀がつてやるのです。

アルメルス 「激昂して」小さいイヨルフの代りにか。

リータ さうですとも、小さいイヨルフの代りですよ。み
んなイヨルフの部屋に住まはせませう。あの子の本をよま
せませう。あの子のおもちやで遊ばせませう。食事の時は代
りばんこに、あの子の椅子にかけさせませう。

アルメルス いやはや、それこそ正真正銘の氣違ひ沙汰と
いふものだ。全體この世の中に、お前位そんな爲事に向
かない人間はありはしないのだ。

リータ それではさう向くやうに自分を教育しようではあ
りませんか。さういふ風に自分を教育しませうよ。さう
いふ練習をつみませうよ。

アルメルス それが全くお前の本音だとすると——お前の
いつてゐるとほりだとすると——やはりお前にも變化が
起つたに違ひがない。

リータ あなた、さうなんですよ、全く。それもあなたの
お蔭ですわ。あなたはわたしの心の中に空地をこしらへ
て下すつた。そこでわたしは、ぜひその空地を埋めなく
てはならないのです。何かしら愛情に似たやうな形のも
のでね。

アルメルス 「しばらく考へ深く、じつと立つてゐる、やが
て妻を見る」實をいふと、お互あの下の貧乏人に對して

大したことをしてはなかつたのだ。

リータ まるつきり何もしてやつたことはなかつたのですわ。

アルメルス 殆ど一度もあの連中のことを考へてやつたことはなかつたのだ。

リータ たゞの一度だつて、あの人たちに同情をもつたことなどはないのですよ。

アルメルス そのくせこちらは「金の山」を持つてゐるくせに——

リータ あの人は施しの手を求めてゐたのです。慈悲の心を求めてゐたのです。

アルメルス 「うなづく」するとやはり、あれらがイヨルフを救ふために命がけになつてくれなかつたのも、無理のない事なのだ。

リータ 「静かに」あなた、まあよく考へて下さい、わたしたちにしても、それをしたでせうか——きつとさうしたといひきれますか。

アルメルス 「不安らしく遮るやうに」リータ、そんなことを危ぶむに及ばない。

リータ あゝあなた——やはりお互に人間の仲間ですよ。アルメルス 一體それでお前は、あの見はなされた子供た

ちに、何をしてやらうといふのだい。

リータ まづわたしがせひやつてみなくてはならないのは、わたしの力であつて子たちの持つて生れた境涯をよくしてやれないものか——向上させてやることは出来ないものかといふことです。

アルメルス お前にそれだけのことがしとげられれば、小さいイヨルフの生れたのも、むだにはならなかつたといふものだ。

リータ そしてまた取られて行つたのも、犬死ではなかつたといふものです。

アルメルス 「じつと妻を見すゑる」リータ、はつきり一つお前に分かつてゐることがあるだらう。それは愛情が、そのお前の事業の動機ではないといふことだ。

リータ それはたしかにさうではありません、とにかく今のところでは。

アルメルス では一體何が理由なのだ。

リータ 「半ば避けるやうに」だつてあなたはよくアスタさんに向つて、人間たるものゝ責任といふことを話しておいでになりましたね——

アルメルス お前のきらつてゐた例の本の話ね。

リータ わたし今でもやはりあの本はきらひです。そのく

せわたしは、いつもあなたがそのお話をなさるところを、注意して聞いてゐたのです。ところで今わたしは、一つあれを續けてみたいと思ふのですよ。わたしの流儀でね。アルメルス 「首を振る」それもあの 未完成の本のためではないだらう——

リータ ええ。——ほかに一つわけがあるのです。

アルメルス それは何だ。

リータ 「惱ましげに微笑を浮べて、静かに」わたしはあの大きな、ぼつかりあいた目と、仲なほりをしたと思ふのですよ、あなた。

アルメルス 「はつとして、じつと妻を見すゑる」どうだね、わたしもその仲間にはいれようかしら。そしてリータ、お前の爲事を手傳つてやるのが出来 うかしら。

リータ そんな氣がありがたいの。アルメルス うん。——わたしに出来さうなことだとわかつたら。

リータ 「もじくしながら」でもそれにはやはり、こゝにこのまゝいらつしやらなくてはならないでせう。

アルメルス 「静かに」まあ、やれるものかどうか、やつてみようよ。

リータ 「聞きとれない位に」ええ、やつてみませうよ、あ

なた。

二人だまつてしまふ。やがてアルメルス、旗竿の傍へ行き、高く旗を上げる。リータ、涼み屋の傍に立つたまゝ、だまつて夫のことをみてゐる。

アルメルス 「また傍へ来る」リータ、これからは苦しい労働の日をお互は迎へるのだ。

リータ それでもあなた——時をりは安息日の平和がお互の上に下るでせう。

アルメルス 「静かな感動の調子」その時は精霊の訪問を受けるかも知れない。

リータ 「囁くやうに」精霊ですつて。

アルメルス 「前の調子」さうだよ、その時はきつと精霊たちが取りまいてくれるだらう——お互がなくなつてしまつた精霊が。

リータ 「徐ろにうなづく」わたしたちの小さいイヨルフがね、それからあなたの大きいイヨルフもね。アルメルス 「じつと前を見る」まあ、時をりはそんなこと

もあるかも知れない——長い生活の間には——それはあれらの姿を映像のやうに見ることがあるかも知れない。リータ それを見るにはどこへ目をむけたらいいのでせう、あなた——

アルメルス 「妻にじつと目を向ける」上の方へ。
 リータ 「同意したやうになづく」さうです、さうです—
 —上の方へ。
 アルメルス 上の方へ—山の上へ。星の世界へ。そして
 大きな沈黙の方へ。
 リータ 「手をさし伸べる」有難う。

集ンセプイ

—了—

非賣品

世界文學全集(26)
第二回配本

集ンセプイ

昭和二年四月一日印刷
昭和二年四月十五日發行

植木製本所

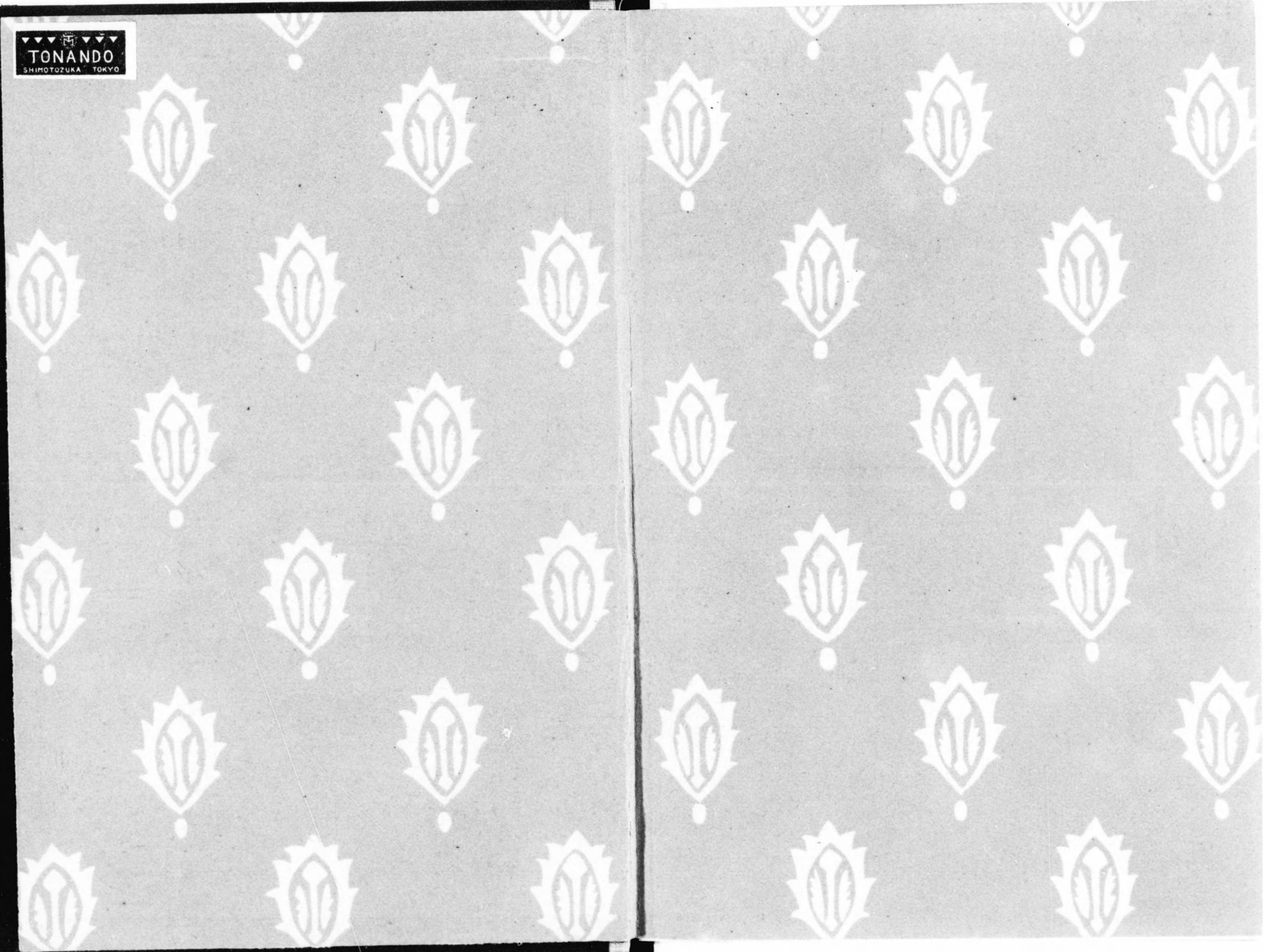
翻譯者 楠山正雄
發行者 佐藤義亮

發行所 新潮社
東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込 長八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番
振替東京 二三四五〇番

刷印社會式株刷印清日 町榎區込牛市京東

TONANDO
SHIMOTOZUKA TOKYO



終